

---

# 遊戯王LOST

ホープ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王LOST

### 【Nコード】

N9626Q

### 【作者名】

ホープ

### 【あらすじ】

旧サテライト地区に造られた新たなデュエルアカデミア。

そこに入学した主人公・炎城遊介とその親友・上条利樹。

そして、学校で出会った新たな仲間たちと共に『ロストシリーズ』と呼ばれるカードを巡る戦いが始まる

この小説は、オリカを主体に進みます。苦手な方は、直ぐさま読むのを止めてお戻りください。

第1話 前編 E！（前書き）

初投稿です

誤字、脱字があつたらすいません

そして、今回デュエルパートはありません

## 第1話 前編 E!

「ブラッド・ヴォルスで攻撃!!」

獣人が岩石の敵に突撃し、持っている武器を横一線で切り裂く。

切られた敵は、演出のせいなのか派手に爆破し跡形もなく吹き飛ば

「岩石の巨兵の攻撃力は1300・・・よって私の受けるダメージ600ポイント・・・私の負けだ」

そう言うと悔しがる素振りを一切見せず、デュエルディスクを待機状態に戻すとスタスタと控え室らしき場所に戻ってゆく

『受験番号89番、試験官のライフポイントを0にし勝利しました。繰り返します・・・』

俺の勝利を繰り返し放送でながされている  
すると、床が下がり、俺は控え室へと向かっていった

（控え室）

「試験官もたいした事ないな・・・」

俺は壁にもたれそう言葉を漏らすと、そこに美形顔の学ラン男が近づいてきた

男の名前は、上条利樹

ちなみに、苗字が上条だからっていつも「不幸だー!!」と叫ぶ、ツンツン頭の少年では決してない

「何言ってるんだ。遊介。遊介のライフも500しかなかったろ」

そんな利樹はいたい所をつくちなみに、遊介とは俺のことフルネームは炎城遊介だ

「それよりお前はどうかよ受験番号1番」

「ん、僕が僕なら余裕の1ターンキルだ」

「ゲツ、マジかよ・・・」

爽やかに笑顔でそう答える利樹

まあ、昔から運動、勉強、デュエルとまさに、リアル出来杉くんと呼ばれるほどのすごさだったからなこれぐらいは訳ないってか・・・

そして、俺たちは難なくデュエルアカデミアに入学することになった

↓デュエルアカデミア入学当日

遊介自宅↓

「しまったア！寝坊したア！！」

俺が起きた時間は8時半

デュエルアカデミアの入学式の式開始時間は9時20分

俺は急いで服をデュエルアカデミア指定の制服に着替える

支度を2、3分で済ませると1階に下り、パンを1枚口に銜えようとしたが、不幸なことに今日はホカホカのご飯だった

その状況を確認めると朝ごはんを諦め、再び自宅2階の自分の部屋に戻り、そこら辺に放り投げてあったデュエルディスクを手さげ鞆に詰める

「よしっ、準備完了っつと」

そして、最後の荷物

つまり、机の上にあるデッキを手に取り、

「・・・これからもよろしくな、お前ら」

そうデッキに呟く

そして、デッキを制服の上着のポケットに入れ、部屋を出た

「  
では、これにてデュエルアカデミア第18期入学式を終了  
します」

ロングヘアの女教師の言葉で入学式はどつやら終わったらしい

時刻は午前10時半

俺はあれから走りになり、徒歩は1時間も必要であろう距離を30分程度で走るがそれでも遅刻してしまい、学校の教頭にこっ酷く叱られてしまった

そして、今は部屋から新1年生たちが出発していて、俺はそんな人の流れに流され、教室の外に出されてしまった

そして、外から利樹を待つことにしたが、いつまで待っても来ない・  
・どうなってるんだ

真相を確かめようとした時、俺は見てしまった・  
・現実の厳しさを解き放った光景を・  
・

利樹の周りに女子生徒が殺到し、利樹のハーレム状態だった

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その状況に目を奪われてしまい何も言い出せない

というか、またお前だけか!!、という怒りの感情と親友との人気の差に心が折れてしまいそんなそんな感情しか俺の中には存在しなかった

なんでこんな状況になってしまったんだろうか・  
・

俺は、入学式が終わった後、遊介と一緒に昼ごはんでも食べようと考えていたのだが、なぜか今俺は女子生徒に周りを取り囲まれてしまい、一歩も足を踏み出せない状況になってしまった

すると、体中の色素がなくなった遊介を見つけた

いつもは、炎のような髪型も今では水で鎮火されたようにへなっとなっていた

(これはどう遊介に声をかければいいんだろう)

(しかし、声をかける以前に目の前に殺到している女子たちをどうにかしなければ・・・)

一人思案していると、ある女子生徒がその意図に気づいたのか、周りの女子たちに何かを言い始める

すると、その話を聞いた女子生徒たちがうなずき、また、周りの女子生徒たちにその内容を伝え始めた

まさに伝言ゲームのような状況だが、これでみんながどこかに行ってくれば助かると一人思っていたが、そう思った自分が甘かった・・・

5分後、どこかのドラマで見たような光景が目の前に広がっていたそれは、女子たちがそれぞれ中央に道を作るように分かれる  
啞然とする僕をよそに女子生徒の代表者とも思われる女子生徒が僕の道を遮らないような位置に立ち高らかに言った

「利樹様！私たちが随分と失礼な真似を致してしまつて我々は心の底から申し訳ないと思つております！どうか、お許しを！」

どこかの貴族に謝るような口調で言つ

「ささつ、入学式で疲れてしまつた体を一刻も早くお休みください」

いやつ、入学式で疲れたというより今のこの状況に対しての疲れのほうが大きいのだが・・・

そう考える利樹だが、口には出さず女子生徒が作る道を歩き始めたが、そこで気づいた

女子生徒たちよつて埋もれてしまつている親友を



溜息を吐きながらそっちの方に向かうと、なぜか親友の上に立っている女子の目が一段と輝きが増していた

「あつ、……あのなにか……」

恥ずかしがるその女子生徒は視線をあっちこっちに向ける

「え……つと、そこをどいてくれるかな」

「はいっ！喜んで！！」

テンパッタように横に退くと「うえっ」と言う声が聞こえる  
どうやらまだ死んでいないな

「何してる遊介。立て」

そう言い放つと、ガバツと親友が顔を上げ、

「ココハドコワタシハダレ」

なぜかボケる

「おい、大丈夫か何か変な食い物でも食ったのか」

「いいや、そんなことはない。俺は今日の朝ごはんを抜き来たんだからな」

ハッハッハッハと高らかに笑うと、

「腹減った」と倒れる始末

「はあ、ともかく立て。ほら手を貸してやる」

そう言っつて手を差し出すと、遊介はその手を取り、ヨロヨロと立ち上がりながら「飯食いに行こうぜ」利樹」と連呼していた

「そつだな」

そつ受け答えすると、ふと気づく何か嫌な気配が俺たちの周りを取り囲んでいた

その正体は今まで道を作っていた女子たち全員だった

「……」

「……」

なぜこの殺気とも呼べるものを彼女たちは放っているのかはわからない

しかし、異様な気配を感じたのかさつきまでフラフラしてたはずの遊介はいつの間にか真面目な顔つきになっていた

「遊介……俺からの提案……聞くか？」

「いや、僕たちの考えているものは一緒だろ」

フツと僕は笑う

そして、次の瞬間二人してその場を全速力で逃げた

「ハア、ハア、どんだけ速いんだこの学校の女子たちは」

息を切らしながらわたくし炎城遊介は思う

「知らないよ、ハア、一時間も走らされて、ハア、こっちはいい迷惑だよ」

「いや、女子に追いかけて回される原因をつくったのはお前だろ」

正論であるうことを利樹にぶつける

「まあいいだろ。食事前の運動ってことで」

「いや、よくねえだろ」

そつつツコミをいれた後

俺たちは学校内にある食堂に向かった

「いやあ、食った食った」

「カレー定食を大盛りで4杯食うのはおかしいだろ、遊介」

食事を終えた俺たちは男子寮に帰る道の途中を歩いていた

すると、遠くに不審な3人組を見つけた

近づくとその3人組の行動がおかしいことに俺たちは気づき、利樹

と顔を見合わせる

「行ってみるか？」

利樹が確認するのに対して俺が言う言葉は一つ

「当然！」

近くまでやってくると不審な3人組は一人の男子生徒を囲むようにしてイジメをしていた

「何をしている！お前ら！」

利樹が言葉を発する

ピタリと動作をやめてこちらを向く  
そして、ガタイのデカイ奴が口を開く

「なんだア、お前ら？」

「俺は今年入った1年生の上条利樹」

「同じく炎城遊介だ」

「俺に何か用か？」

「もちろんある……ここで何をやってる？」

冷静そうに言うが、利樹は静かに怒っていた  
なぜなら、利樹はイジメが嫌いだからだ  
そして、なぜ見れば分かること再び聞き直すか、それは今、目の前  
で行われていることが、イジメではないことを言ってくれるのを必  
死に祈っている利樹の心優しい部分がそうさせていたのだろう

「ん？見てわかんねえーのか？」

だが、ガタイのデカイ男はそれに気付かずに言う

「イジメに決まってるんだろ」

その言葉を利樹が聴いた瞬間、ガタイのデカイ奴は、地面に逆さま  
に投げた倒された

「ガハツ！！？」

訳が分からずにいガタイのデカイ奴

細身の利樹がなぜ正反対の体系の奴を投げられるか

それは、利樹の柔道の腕が2段あるということだ

利樹は昔から色んなことが出来ていてその中でズバ抜けて出来てい  
たのは武術などの自分の身を守ることだった

「フザケるなよ……」

低い声で利樹は告げる

「イジメが……どれほど辛いか……お前たちには分からないの

か!！」

自分が昔受けた傷

利樹はイジメを受けている人を見るといつも昔のデュエルを知る前の自分と重ねてしまう

そして、気付けば周りの大人が押さえ込むまでイジメをしていた奴に攻撃をやめない

だからこそ止めなくては、親友の俺が

利樹の前に出る

そして

「おい、俺とデュエルしろよ」

デュエルアカデミアらしい決着の付け方だと俺は思う  
すると、相手は少し躊躇したが、

「いいぜ、デュエル受けてやる」

そいつはそう言って前が出る

「!遊介!これは僕が起こした問題だ!遊介には関係はない!」

制止させようと俺の肩に手を置く利樹  
しかしな・・・

「お前デッキ持ってきてないだろ」

「・・・ッ気付いてたのか」

そう普通なら時間通りに来た生徒達は一度学生寮で荷物や式で必要ないものを置いてくるはずになっていが、俺は遅刻してきたため、手さげ鞆だけは寮監に預け、デッキは俺の上着ポケットに入っただまだ

しかし、利樹は時間通りにいたはずでデッキも寮の中つまり、デュエルなら利樹のこれ以上の暴走はなく、もしかしたらイジメもデュエルの勝敗で終わらせられるかも知れないというのが俺の考えだ

「それに俺がこんな奴に負けると思つか？」

「……気を抜いて初歩的なミスだけはするなよ」

そう言っただけから数歩離れる

デュエルディスクは向こうの2人の内の一人が投げそれを受け取るとすぐにデュエルディスクをつけ、デッキをセットする

「俺に楯突いたらどうなるか教えてやる……！」

あつちも準備を済ませる

まさか、こんなのが学園生活最初のデュエルになるのか……だが、俺のやることは一つ

「さあ、デュエルを楽しもうぜ……！」

第1話 前編 E！（後書き）

いかがだったでしょうか？

おもしろければ幸いです

次回の更新はいつになるかわかりませんがまた読んでいただけるなら嬉しいです



第1話 後編 E！（前書き）

遅くなくしました！！

1話後編です！

今回はデュエルパート！

第1話 後編 E!

「デュエル!!!」

その一声でゲームがスタートする

「俺の先攻!ドロー!」

相手のターンからだ

(ちっっ・あのカードがきてねえ)

心の中で舌打ちする不良

「俺は手札から魔法カード発動!『手札抹殺』!」

カードの右端に上に手があり、その手元から無数のカードが奈落に落ちるのを表現している絵だ

「こいつの効果はお互いに手札のカードを墓地に送り、送った枚数だけデッキからカードをドローするカードだ!」

(・・・!いきなりか!?)

お互いに手札のカードをセメタリーゾーン置き、デッキからカードをドローする

「そして、俺は手札から魔法カード『儀式の準備』を発動」

儀式を行うための祠のようなものが描かれており、黒いマントのよ  
うなものを着た人が二人儀式に必要な捧げ物を置くというイラスト  
が描かれていた

「こいつはデッキからレベル7以下の儀式モンスターを手札に加え  
るカードだ」

すると、ディスクが自動で不良のほしいカードを選出する

「俺は『混沌の帝 ベルフェレウス』を手札に加える」

(混沌の帝？知らないカードだ・・・)

「だが、儀式の準備の効果はまだ続く！儀式モンスターを手札に加  
えた後、墓地に存在する儀式魔法を1枚手札に加えることが出来る  
が、生憎墓地にこいつの儀式魔法はない・・・だから、こいつを召喚  
して気長に待たせてもらおうぜ」

そう言うとディスクのモンスターゾーンにカードを攻撃表示の形で  
セットする

「来い！『地獄の奴隷商人ニフナ』！」

スーツを着たゴブリンが現れる  
その手には首輪がいくつもある

ATK 1700 DEF 300

「ニフナの効果を発動！1ターンに一度墓地のモンスターを特殊召  
喚できる！スレイブ・リバイヴ！」

ゴブリンが不良の方を向き手に持っていた首輪を不良の墓地に投げると、ガチン！と音がする

セメタリーゾーンから一体のモンスター引きずり出された首輪に繋がれたモンスターは『絶対服従魔人』だ

ATK 3500 DEF 3000

「特殊召喚されたモンスターは守備表示になり、表示形式の変更の他にアドバンス召喚のためのリリースにはできない。さらに、シククの素材にもできない。さらに、奴隷商人には、特殊召喚したモンスターのレベル×100ポイント支払わなければならない効果もある」

LP4000 3000

「ターンエンドだ」

「俺のターン！ドロー！」

（あいつフィールドには、『奴隷商人ニフナ』と『絶対服従魔人』それで何をする気だ？・・・）

「俺は『エレメント・H ヒート・ヴァレス』を召喚！」

大地から大きな火柱が揚がる

そして、中から両手に炎、胸に「H」のマークを刻んだの戦士が現れる

ATK 1700 DEF 1000

「バトル！ヴァレスで『奴隷商人ニフナ』に攻撃！」

ヴァレスが空高く跳ぶ

「だが！テメーのモンスターと俺のモンスターの攻撃力は互角だ！」

「いいやちがうぜ」

「なに？」

怪訝そうな顔をする不良

「ヴァレスの効果！こいつは自分フィールド上に存在する『エレメント』の数だけ攻撃力を200アップする！」

「オオオオオオオオ！！！」

ATK1700 1900

ヴァレスが雄たけびを上げると両手の炎がさらに勢いを増す  
そして、ニフナに向かって急降下する

驚くニフナにヴァレスは炎の拳を叩きつけと、ニフナは粉々に砕け、  
不良はヴァレスの炎を少し浴びる

「アチツ、アチチチツ！」

LP3000 2800

ソリットビジョンなのにそんな大袈裟な行動をする不良をよそに遊  
介はバトルフェイズを終了し、メインフェイズ2に移行する

「カード二枚伏せてターンエンド！」

「クソッ、俺のターン！ドロー！」

全くのリアクションもない遊介に少しの怒りを覚えながらドローしたカードを見るが、『成金ゴブリン』不良のほしいカードではない

(まだ来ねえのかよ)

仕方なく手札のモンスターをディスクの横向きでセツトする

「俺は『地獄の番犬オルトロス』を召喚！守備表示！」

二つの首を持った犬が現れる

ATK 1800

DEF 300

「カードを一枚伏せてターンエンド」

「俺のターン！」

「いくぜ！ヴァレスで攻」

「させるかア！リバーズカードオープン！『威嚇する咆哮』！」

すると、俺の攻撃宣言の聲が発動された罠の咆哮の所為でかき消される

「こいつの効果はてめえの攻撃宣言をこのターンできなくするぜ」

「・・・ターンエンドだ」

しびしびエンド宣言をする

「俺のターン！手札から速攻魔法発動！『魔導書整理』」

本をいくつも重ねたイラストのカードが発動する

「その効果でデッキのカード3枚をめくり、好きな順番でデッキに戻す」

（！こいつは！）

不良が何かに気付いたようだ

まさか、キーカードでも見つけたのか？

「手札から魔法カード発動。『成金ゴブリン』」

（成金・・・ゴブリン？）

「効果でお前はライフを1000ポイント回復し、俺はデッキから1枚ドロ」

「・・・」

LP4000 5000

（成金ゴブリンは普通シモッチと一緒に使うはず一体どうゆうことだ？）

「ん？その顔どうしてシモッチないのにこいつを発動したのか分からないって顔だな」

気持ち悪い視線を送って嘲笑う不良

「そいつはちよっとしたハンデだ。こいつを使えばてめえーは手も足も出せずに負けるのさ！」

そう言つて1枚のカードを突き出す

「このカードが何か特別に教えてやるぜ」

そして、突き出したカードを表向きに俺に見えるように出した

「儀式魔法『混沌なる儀式』だ」

(混沌なる儀式？まさか！)

「『混沌の帝 ベルフエレウス』か！！」

「ご名答。しかし、この儀式は厄介なことにレベル10の闇属性モンスターとレベル1の光属性モンスターをフィールドから墓地に送らねえーとこいつを召喚できねえーんだ」

(たしかに、フィールド上にはレベル10のモンスター『絶対服従魔人』がいるが属性は炎、たとえレベル1の光属性モンスターを召喚しても儀式魔法の発動はできない)

そう考える遊介に不良は

「こいつをこのターン召喚する」



そう宣言した

「なんだと!?!」

困惑する遊介

「装備魔法発動! 『幻惑の巻物』!」

(なっ、その手があったか!)

地面から巻物がとぐるを巻くように『絶対服従魔人』の周りに現れる

「『幻惑の巻物』の効果は属性を一つ宣言し、宣言した属性が装備カードの属性になる効果。そして、俺が宣言するのは『闇』!」

その言葉に合わせ、巻物の紙の白い部分に闇の字が浮かび上がる

「これで『絶対服従魔人』の属性は闇になった。さらに、モンスターを召喚! 『ワタポン』!」

綿毛のようなモンスターが現れる

ATK 200      DEF 300

「そして! 儀式魔法発動! 『混沌なる儀式』!」

すると、場が一気に暗くなり、ぼっ、ぼっと火が何処からともなく灯る

火が灯ったと思うとそこに二人の修道服を着た人が立っていた  
すると、懐からナイフを取り出し、場にいたモンスター二体にその

ナイフを突き刺す

悶え苦しむモンスター2体

しばらくすると力なく倒れる

そして、修道服の二人の手の中にはモンスターから取り出した心臓があつた

修道服の二人はその心臓をそれぞれの台に置き、何かを唱える。すると、空間に亀裂が入り、6本の腕が飛び出し、台に置かれた心臓を鷲掴みにして持ってゆく

そして、フィールド全体に光が蘇る

いきなり場が明るくなつたせいで、目を細める遊介すると、目の前には見たことのないモンスターがその場にいた腕が六つもあり、左右違う羽のモンスター

「『混沌の帝 ベルフェレウス』・・・」

ATK 3200 DEF 3000

(攻撃力が3000以上!?!これはまずいぞ・・・遊介!)

怪訝そうな顔で利樹は遊介を見つめる

「くっ、・・・リバースカードオープン!!!『エレメント・チェンジ』!」

遊介のフィールドに伏せてあつたカードが表になる

「『エレメント・チェンジ』の効果は、フィールド上の『エレメント』と名のつくモンスターをリリースする!」

フィールドのヴァレスが体が上から順に消えてゆく

「その後、リリースしたモンスター以下のレベルのモンスターをリリースしたモンスターと同じ表示形式で特殊召喚！」

ディスクにセットされたデッキが一枚のカードを選出する  
遊介はそれを場に出す

「来い！『エレメントW ウォーター・レミネ』！」

地面から水柱が上がり、中から顔のサイズに合わないデカ過ぎる「W」と刻まれた帽子を被り、杖を持った少女が現れる

ATK 1200 DEF 900

「なんだア、その弱つちいモンスターは？ふざけてんのかア？」

「『エレメントW ウォーター・レミネ』には、特殊召喚された時発動する効果がある・・・それは、特殊召喚成功時相手モンスターを手札に戻す効果だ！対象はもちろんベルフェウス！」

杖をかざすレミネ

すると、周りから水が集結し、水の塊になる

それを効果の対象であるベルフェウスに向かって投げつけるが、水はベルフェウスを押し流すどころか弾かれてしまった

「!？」

ベルフェウスが手札に戻らないことに驚く遊介

「まったくよオ・・・苦労して召喚したモンスターをあっさり手札に

戻させるはずがねえだろ。墓地の『混沌なる儀式』の効果で儀式召喚されたベルフェウスはカード効果を受けないぜ」

「なにつ!?!」

「さあて、ベルフェウス効果発動!!1ターンに一度相手モンスターを全て破壊する!カオスクライシス!」

それと同時に遊介のモンスターの色素が逆転するすると、モンスターはガラスのように砕け散ってしまう

「レミネが・・・っ」

(なんて効果だ!なんのコストもなしでサンダーボルト級の破壊効果もちかよ・・・!)

遊介の場は裸同然、今遊介を守るカードは1枚もない

不良の場に守備表示で存在したオルトロスの表示形式が変更された

「いくぜ・・・ベルフェウス、オルトロスで攻撃!」

二体が同時に遊介に襲い掛かる

「ぐあああああああ!!」

LP5000 200

いきなりの大ダメージに膝を地面に着けてしまう

「カードを1枚伏せてターンエンド。オラア!てめえーのターンだ!ソラア、奇跡だも起こしてみる!!」

(・・・が、俺の伏せカードはミラーフォースたとえどんなモンス  
ターが来ようとこれで返り討ちだぜ)

ニタニタ笑う不良とフラフラになりながら立ち上がる遊介

(俺の手札にあるカードを使えば”あいつ”を召喚できるがベルフ  
エウスの攻撃力には届かない・・・だが、あのカードを引けば、俺  
にも勝機はある！)

全神経を指先に集める

(このドローで全てが決まる・・・！)

「・・・ドロー!」

遊介は体が捻じれるほどの勢いでデッキ上のカードを引く  
そして、そのカードは遊介が今最も望むカードだった  
遊介は、フツと笑い宣言した

「このターンでケリを着けるぜ!」

「何いい!?!」

「まず、俺は『エレメントR<sup>ロック</sup> ロックマン』を召喚!」

片腕が馬鹿デカイ岩石で覆われた戦士が現れる  
ちなみに、片腕の岩石には「R」の字がちゃんと刻んである

ATK 1600 DEF 1600

「そして、手札から魔法カード発動！『傷だらけの生還』！」

フィールドに傷ついたモンスターたちが描かれたカードが現れる

「このカードの効果は、ライフを半分支払い、墓地のモンスターを1体攻撃表示で特殊召喚する！」

LP200 100

「墓地から選ぶのは『エレメントH ヒート・ヴァレス』だ！」

胸に「H」と刻んだモンスターが現れる

ATK/DEF 0

「この効果で呼び出したモンスターの攻撃力・守備力は0になる」

「ハッ、わざわざライフを下げてまでモンスターを召喚してくるなんてしかも2体とも攻撃表示、誘ってんのかア？」

不良の言葉を聞いて、またもフツと笑う遊介

「なにがおかしい？」

「お前気付いてないのかヴァレスはチューナーだぜ？」

「なっ！？」

うろたえる不良

そして、遊介は・・・

「レベル4の『エレメントR ロックマン』にレベル4の『エレメントH ヒート・ヴァレス』をチューニング！不死鳥の羽を持つ戦士よ、その剣で我を勝利に導け！」

2体のエレメントモンスターが跳ぶ

ヴァレスの体から緑色の輪っかのようなものが現れる

ロックマンがその輪っかの間に入ると4つに光る球のようなものが現れ、やがて光に包まれる

そして、そこから炎の羽を生やした戦士が現れる

「シンクロ召喚！燃えろ！『エレメントEX エクストラ フェニックス・ナイト

ATK 2800 DEF 2300

「なっ・・・何だそのモンスターは!?!」

不良が見たことのないカードに驚く

しかし、遊介はこれで終わらなかった

「さらに、速攻魔法発動！『エレメントフォース』！」

さまざまなアルファベットの字がモンスターに集結する絵のカードが現れる

「このカードの効果はフィールド上のモンスターを1体選択し、そのモンスターの攻撃力を墓地の『エレメント』と名のつくモンスターの数×200ポイント上げる！」

「オオオオオオオ!!!」

ATK2800 3400

フェニックスの周りに「H」「W」「R」のアルファベットが浮かび、フェニックスの中に取り込まれてゆく

「バトル！フェニックスでベルフェウスに攻撃！」

フェニックス・ナイトは手の剣をかざすと不死鳥の形をした炎を剣に纏わりつく

そして、ベルフェウスに向かって飛び立つ

「させるかア!!!リバース発動ミラーフォース！」

フェニックス・ナイトの前にバリアが現れる

フェニックス・ナイトの炎がバリアで撥ね返され、フェニックス・ナイトを炎で被う

「ヒヤハハハ！いくらベルフェウスの攻撃力を超えたところで攻撃が通らないんじゃないあ」

意味がないと言おうとした不良だが、遊介はその言葉に上乘せするよう

「それはどうかな？」

その言葉に不良の動きが止まる  
すると、炎に包まれて倒されたはずのフェニックス・ナイトが炎を振りほどき現れる



「なっ!?!どうなってるんだ!?!」

「フェニックスには特殊効果が3つあってな・・・その内の一つがバトルフェイズに移った時、そのバトルフェイズが終わるまでカード効果で破壊されない効果を得る!」

何イイイと叫ぶ不良

「行け!フェニックス・ナイト!ブレイブスラッシュユ!」

フェニックス・ナイトの剣がベルフェレウスを真っ二つに切り裂く

「チツ・・・」

LP2800 2600

「まだまだ!フェニックス・ナイトの効果発動!フェニックス・ナイトがモンスターを戦闘で破壊したとき、破壊したモンスターの攻撃力の半分を相手ライフに与える!」

「何っ!?!」

フェニックスが不良の前に降り立つと、背中が不良を襲う

「ぐあああああ」

LP2800 1200

不良はフェニックス・ナイトの炎に燃やされ終わると勝ち誇ったよ  
うな顔で言う

「耐え切ったぜ・・・」

そんなことを言いながら目の前の遊介のフィールドを見ると一枚の罨カードが表になっていた

「エレメント・・・バースト？」

思わずカード名を読み上げる不良

「『エレメントバースト』をメインフェイズ2に発動」

フェニックス・ナイトの体が光に包まれ中から何か飛び出している絵だ

「こいつ効果は自分フィールド上の『エレメント』と名の付くシンクロモンスターをリリースする。そのモンスターのレベル×200ポイントのダメージを相手に与える」

「・・・え・・・えええええ!!？」 LP1200 0

ガクンと膝を折る不良

こうして遊介は不良に勝利した

「クソオオ・・・次はこうはいかねえぞオオ!!」

と言いながら子分らしき二人と逃げて行く

「・・・一件落着・・・なのか？」と遊介は呟く

「混沌の帝・ベルフェウス・・・何なんだあのカードたちは・・・

」

そう一人考える利樹

そのことには同感だ。と遊介は思っていた

正直自分のデッキも世間には出回っていないらしいがソリッドビジョンが反応するのならこのカードは必ず存在するはずのカードだ（一部例外を除く）

「まっ、深く考えてもしょうがない。帰ろうぜ、利樹」

「そうだな」

その場を後にする俺達

一人取り残された男子生徒はいつまでもキョトンとしていた

く????く

「負けちゃったんですかあ？」

そうふざけた仮面の男が言う

「次は絶対負けない！だから」

「だからなんです？」

「まさか、あれだけ強力なカードたちをあげたのにまだほしいと言

うのですか？」

不良を笑うように仮面の男は言う

「だけどいいですよ。このカードをあげちゃいます」

仮面の男の懐から1枚のカードを出す

「ただし、これがほしいなら私とデュエルで勝つことですな。負けた場合は、あなたにあげたカードを返してもらいますけど。」

しばらくすると、不良はこう答えた

「いいぜ・・・やってやる」

その言葉を聞いた仮面の男は笑った

第1話 後編 E！（後書き）

いかがだったでしょう

おもしろかったら嬉しいです。

次の更新もいつになるかわかりませんが3・4月ぐらいには更新したいです

## 第2話 遊介vs牙城教諭(前書き)

今回デュエルへ持って行くのが強引すぎました  
これに関して・・・目を瞑ってやってください



くデュエルアカデミア

食堂1階く

不良とのデュエルから一週間が経ち、俺たちは何事もない日々を過ごしていた

「腹減ったくく」

今は昼休みの時間で俺は食堂に向かって歩いている  
ちなみに、利樹はまた大勢の女子たちに囲まれていて動けずにいる  
いつ見てもあれは羨ましい

くデュエルアカデミア

食堂2階テラスく

眼鏡をかけたオールバックの教師、きはしろ牙城は優雅にティーカップを飲んでいたが、その手は微妙に震えていた  
その訳は授業を終え、食堂へ向かおうとしていた時のことだった

「牙城先生」

私はすれ違う寸前にある教師に話しかけられた

「なんですか？福山先生」

彼の名は福山恭二ふくやまきよじ私が持つ秘密を唯一知っている人間だ  
そして、そんな福山先生が放った言葉はまさに私にとって寝耳に水のことだった



「秘密バレちゃいましたよ」

「!!!」

思わず後ろを振り向と、何かを投げ渡された  
それはデュエルアカデミアの生徒手帳だった  
しかし、この生徒手帳は普通の生徒手帳とは違い、電話としての機能にメール、インターネットなどの多機能を持っている品物だ  
ちなみに、現在のバージョンはタッチ式の3Dだ

「炎城遊介？」

「ええ、彼はたまたまあなたのあの瞬間に居合わせていた者ですよ」  
牙城はなツと声を洩らす

「そこで私からの提案です」

「何？」

怪訝そうに福山を見る牙城

「フフツ、それはね・・・」

↳デュエルアカデミア

食堂1階

「はい、豚骨ラーメンセットだよ」

学食のおばちゃんもといお姉さんから食事の乗ったお盆をもらう

「それにしてもすげーなこの学校・・・」

なぜならこの学校の学食のレパートリーが半端でなくさまざまなジャンルの食べ物を低価格の学食で売っているからだ

「この豚骨ラーメンセットも某ラーメン会社のセットと酷似してるからな・・・」

そう独り言を呟きながら席を探すが出遅れたらしく空いている席はなかった

「しょうがない・・・合い席にしてもらおう」

そう思い近くの席に近づき尋ねた

「すみません、ここ使ってもいいですか？」

ツインテールの背低めの少女に聞く

「ひひれふよ」

いいですよと言いたいんだろうが口に物が入っていて聞き取りにくい

「じゃ、じゃあ座りますね」

ツインテールの少女の目の前の席に座ると、目の前の光景に空いた口が塞がらなくなった

「ほほか（ゴクン）したの？」

いやどうかしたのじゃないですよ

ナニこの皿の量どれだけ食ってんの！！

と心で叫びつつ聞いた

「これ全部あなたさまが？」

「あ、あなたさま？おかしいよその言葉使い普通に普通に私はネネ。  
前田ネネ。 1年生だよ」

「へえ〜1年生・・・1年生！！！」

と驚く俺にあゝストップと制止をかけるネネ

「私の背が低いからって中学生や小学生だって決めつけないで」

そう訂正するネネだがちがう俺の質問はもっと別のところにある

「ちがうって、君1年生ってことは・・・君」

利樹のことを聴こうとした瞬間、隣から長い黒髪を揺らしながらやってくる見た目クールな美形女子いわゆる美少女が来た

「ネネどうしたの？」

俺は1度ネネに聴こうとした質問を止める

「ん？迷些めこせじゃないやっとな終わったの？」

そうネネは迷些という名前の女子に聴く

「ああ、あれだけの男子を撒くのは苦勞したよ」

お盆を机に置くと手を肩において首を左右に揺らした  
そこで彼女は俺の存在に気付いた

「・・・君は？」

「えっ？俺？俺は炎城遊介だ」

一応名乗る

「私は黒崎迷些だ。迷些と呼んでくれ遊介君」

迷些はそう言って手を出す  
握手か？

「これはどうも丁寧に・・・」

お互いに手を握った瞬間

バチイッと静電気のような感覚がして思わず迷些の手を離す

「・・・？」

いきなり手を離されて疑問符が頭に浮かんでいる迷些  
しまったと心で思い弁解しようとした時

「お取り込み中失礼するよ」

俺の助け舟、かみじょうとしき上条利樹が現れた

「「とっ、利樹様!!」」

利樹を見た瞬間、二人とも叫んだ

そして、結局この二人も利樹ファンだったのか・・・と一人残念に思う遊介

「どどどどどっしてここに!？」

とネネは動揺しながら聴くが

「  
(パクパクパク)」

迷些は口をあけてパクパクしながら顔を赤くして黙り

「・・・」

利樹はしまったとばかりに手を顔に当てていた  
そして、こっぴどくだった

「もういい加減にしろ」

一週間もこんなのだったら誰でも迷惑するよなと思いつつぱり羨ましいと思う遊介だった

「わわわわわたくしの名前はままま前田ネネです!」

わたくし?という言葉遣いに疑問に思いながらネネの自己紹介を聞

き握手すると「ハフ~~~~」と言って倒れてしまう

「.....」

握ったまま利樹は俺に呟いた

「.....遊介.....こうゆうことはいつまで続くんだ？」

俺に聞くな

どうやら利樹の心はすでに極限状態に達しているらしい

「君たち」

すると、俺の後ろから何か声が聞こえてきた

振り返ると、そこにはオールバックの髪型の眼鏡をかけた先生が立っていた

時間を数分巻き戻すと牙城が食堂1階を歩いていたことから始まった

（人がこれからどうするか必死に考えているのになんだ下の騒ぎよ  
うは！！）

自分の秘密を握って知るであろう炎城遊介をどうやって口封じするかでイライラしていた牙城は、周りの音に対して敏感になっており、普通はどうでもいいと思い無視している騒ぎに対して苛立ちを募らせていた

だが、彼も教師上の立場からあまり怒鳴り散らかすのもよくないし、自分に対するイメージも下がってしまうのでちょっときつめの注意

で終わらせようと思いきその騒いでいる席に向かった  
騒いでいたのはなぜか手を握ったまま気絶しているツインテールの  
女子生徒、そして何かうんざりしている美形の男子に炎のような髪  
型の男子生徒だった

「君たち」

そう口になると、炎のような男子生徒がこっちを見た

「!!!」

驚く牙城

(なぜこんなところに炎城遊介が・・・！？)

そして、すぐにチャンスだと言わんばかりに眼鏡をクイツと上げた

「君が炎城遊介君かい？」

何も知らない遊介は「はい」と答えた

そして、牙城はそんな遊介に向かってこう言った

「君には退学してもらおう」

「え？」

目が点になる遊介

しばらくすると牙城の言ったことを理解し始め、同時にあせり始め  
遊介は叫んだ

「ちょっと待ってください先生！なんで俺が退学なんですかー！」

訳がわからない遊介が牙城に講義するが牙城は簡単な理由を言った

「君が入学式の日に野外でデュエルをしていたからだ」

「なっ、それだけで退学っておかしいだろ！」

そう反論すると牙城の後ろから「その通りです」と髪の毛の長いちょび髭のおっさんが現れた

「彼がそれだけの理由で退学はおかしいぞ。牙城先生」

このおっさんはこの学校の教頭。笹川徳仁ささがわ、なるしだ

「だが、彼には入学式の日が遅刻してきた時の処罰がまだで悩んでいたんだが、ちょうどよかった彼の処罰はあなたとのデュエルしよう。彼が負けた場合、停学2週間はどうですか？」

教頭がそんなことを提案する

「いいでしょう」

牙城も同意し、遊介の停学を賭けたデュエルをすることになった

「……まさかこうゆう展開になるとはな……まっ、目的は果たせるしよしとするか」

物陰に隠れていた男がそう呟いた



くデュエルアカデミア  
公式試合用ホールく

現在時刻16時半過ぎ

ホール中央のデュエルステージには牙城教諭の姿があった  
デュエルディスクを付けたまま直立不動だった

すると、ホールの出入り口から誰かが走ってくる音がした  
そこから遊介が現れホールのステージに飛び乗り、そしてお互い無  
言にディスクを展開し

「デュエル！！」

デュエル  
決闘が開始された

「私の先攻！ドロー！」

牙城先生からの先攻だ

「『俊足のギラザウルス』を特殊召喚！」

足の速い恐竜が現れた

ATK 1400  
DEF 400

「さらに、私は『大進化薬』を発動！その効果により『俊足のギラ

ザウス』をリリース！これにより君のターンを数えて3ターンこのカードはフィールド上に残り続け、私はレベル5以上の恐竜族モンスターはリリースなしで召喚可能になる！」

フィールド上に表側で存在するギラザウルの体が消えて一枚のカードが出現する

それは、さまざまの恐竜に囲まれたカプセルのイラストのカードだ

「そして、大進化薬の効果で私はリリースなしで『ブラック・ティラノ暗黒恐獣』を召喚！」

全身黒い皮膚をした恐竜がフィールドに現れた

ATK 2600  
DEF 1800

「カードを二枚伏せてターン終了」

「どうしてこうなった」

上条利樹はホール内の座席で放った第一声だった

「どうしたんですか？利樹様」

なぜか僕の隣に座っている前田ネネは言う

ちなみにその反対側には顔を真っ赤にして俯いている黒崎迷些もいる

「いや、何でこんな状況になっているのか（両隣に座っていることも込）僕は分からないんだが」

「食堂で騒いでいたからでは？」

もう緊張の色は前田ネネからは無くなっていた

「それぐらいじゃあこんな大事には発展しないだろ……」

「俺のターン！ドロー！」

（さて、目の前にはレベル7の『ブラック・ティラノ暗黒恐獣』か……守備モンスターでフィールドを固めるのは自殺行為だが……あえてそうするぜ！）

「エレメントS スノウを守備表示で召喚！」

遊介のフィールドにSのマークが刻まれたペンダントと着物全体の丈が短いスパッツを穿いた女性型モンスターが現れる

|     |      |
|-----|------|
| ATK | 1000 |
| DEF | 1500 |

「えれめんと？」

今まで緊張していた黒崎迷些は遊介のモンスターの名前を聞いて疑問に思う

「うわっ！？何あのエロいモンスター！」

遊介に軽蔑の目を向ける前田ネネ

「守備モンスターのみの場合に直接攻撃可能な『ブラック・テイラノ暗黒恐獣』相手にどう立ち向かうつもりだ遊介」

座席に座る彼らの感想はさまざまだった

「フツ、」

口元が歪み笑い始めた牙城

「フハハハハ！！『ブラック・テイラノ暗黒恐獣』相手に守備モンスター？君の今の成績の疑わしいね」

その後も笑う牙城。

そんな光景を見ても遊介は動揺しない。

「スノウのモンスター効果。このカードの召喚時、相手フィールドの魔法・罠1枚選択、このカードが存在する限り使用不可能にする。」

すると、スノウが飛び上がり牙城の右側にセットされたカード目掛けて手を突き出す。

そこから氷の粒が現れ、そのカードに向かって氷の粒が飛んでゆき、セットカードが凍り付いてゆく

( くつ、 『魔宮の賄賂』<sup>わいろ</sup> が・・・ッ )

「あんたの顔からしてどうやら俺の目的のカード封印できたみたいだな」

舌打ちする牙城。

「行くぜ！俺は魔法カード『召喚士の暴走』！」

マントを着た召喚士が頭を抱えて術の暴走が止まらないイラストのカードが現れる

「このカードの効果は俺の手札にある通常召喚可能なモンスターを全て召喚する！俺が召喚するのは『エレメントW ウォーター・レミネ』、『エレメントT タイムウォーリアー』だ！」

体と不釣合いの帽子を被るモンスターと時計をいくつもぶら下げたモンスターが現れた

ATK 1200  
DEF 900

ATK 1500  
DEF 1500

「ただし、この効果で召喚したモンスターの数×1ターン、俺はあらゆる召喚は出来なくなる。カードを1枚伏せてターン終了だ！」

「せっかくモンスターを増やしたのに全員守備表示か・・・それに2ターンのモンスターの召喚が全てできないんじゃないやあどうしようもないよ」

「これじゃあ次のターン牙城にダイレクトアタックしてくださいって言ってるもんじゃん！」

終わってたなと息を洩らす二人だが、利樹だけは違った

「あの伏せカード・・・そうゆう事か。遊介。」

「私のターン」

デッキからドロウする牙城は俺から目を一切離さなかった。

「君が何を企んでいるか知らないが君に勝機は訪れることはない。来るのは絶望だけだ・・・！」

すると、牙城のフィールドに2体目の『ブラック・テイラノ暗黒恐獣』が現れる。

「なっ・・・2体目・・・！」

状況がさらに最悪になる。

「所詮はガキか・・・2体の『ブラック・テイラノ暗黒恐獣』でダイレクトアタック！」

2体の『ブラック・テイラノ暗黒恐獣』が俺目掛けて突進してくる。

そして、1体目の『ブラック・テイラノ暗黒恐獣』が遊介に踏みつけの攻撃を仕掛ける

ズドオオオンとその重い後ろ足が叩きつけられる。  
砂埃が舞い遊介のフィールド全体を被う

「ぐあ・・・！」

LP4000 1400

辛うじて無事のようにだが、上を見上げると2体目の攻撃が行われる  
ところだった

「リッ、・・・」

ズドオオオンとまた重い後ろ足の攻撃が炸裂した

「ああっ！」

思わずネネが悲鳴を上げる。

「・・・」

迷些はその光景を目の当たりにして固まる

「どうしよう負けちゃいましたよ・・・これで遊介君は停学になっ  
ちやっただよ・・・」

ネネはおどおどし始め

「さようなら、仲良くなれと思ったのに・・・」

迷些はすでにさよならの言葉を放っていた

しかし、利樹は

「決め付けるのは早いと思つよ」

自信ありげに言った

「「え？」」

二人の言葉が重なる

すると、ステージにいた牙城の驚く声がした

「どづいつことだ!？」

目の前で起こっている事に戸惑う牙城。なぜなら2体目の『ブラック・テ暗黒恐  
獣』イラノの攻撃を遊介のフィールドのモンスターが防いでいたからだ

「あぶねえあぶねえ危うく負けるところだったぜ」

LP1400

「!なぜお前のライフポイントが減っていないんだ!！」

そう質問する牙城に遊介は人差し指を自分の隣にあるカードを指差す  
磁石の戦士たちが三角形の形で陣取り、半透明の膜のようなものを  
張っているイラストのカードの名は『デルタ・フォース・バリア』

「このカードの効果はライフが2000以下の場合に発動できて、  
モンスターの攻撃力合計数値より低いモンスターの攻撃によって受  
ける数値を0に出来る効果だ」

牙城は舌打ちしたが



「だが『デルタ・フォース・バリア』にはモンスターが2体以下になった瞬間、自身を破壊する効果を持っている！なら、次のターンその3体の内の1体を葬ってやる！ターンエンドだ！」

「俺のターン。ドロ。・・・ターンエンド。そして、この瞬間『エレメントT タイムウォーリアー』の効果を発動。このターンにモンスターの召喚を行わなかった時、タイムウォーリアーにTカウンターを一つ置く」

タイムウォーリアーの持っている時計が一つ光る

(Tカウンター?)

疑問符が上がる牙城だが気にする暇はなかった

「私のターン、ドロ」

(『デルタ・フォース・バリア』には、確か私のフィールド上に存在する攻撃力の高いモンスターの攻撃を封じ、さらに、同名モンスターもその効果を受けるはずだったな・・・)

ドロカードを確認すると、牙城は舌打ちした

(こいつか・・・このデュエルでは必要ないカードだな)

「ターンエンド」

「俺のターン！ドロー！」

(くっ、ちがう！今俺がほしいカードはこれじゃない・・・)

「カードを二枚伏せてターン終了」

タイムウォーリアーの時計がまた光る

「何もできずか・・・」

眼鏡をクイツとあげながら牙城は言った

「私のターン！ドロー！」

大進化薬が3ターン過ぎたので破壊される

「フフ、いいカードを引いたぞ魔法カード発動『化石調査』を発動。  
」

赤・青・黄・緑の人間らしき人物たちが化石の調査をしているイラ  
ストのカードが現れる

「このカードの効果によりデッキに眠るレベル6以下の恐竜族を手  
札に加える。」

すると、ディスクがカードを1枚自動選出する

「私が選ぶカードは『ハイパーハンマーヘッド』だ。そして、召喚  
！『ハイパーハンマーヘッド』！」

頭がハンマーのような恐竜が現れる

ATK 1500  
DEF 1200

「バトル！ハンマーヘッドで『エレメントS スノウ』に攻撃！」  
牙城のモンスターがスノウ目掛け突進する

「くっ、リバーオープン！『死合い』！」

戦士族モンスター2体が戦闘するイラストのカードが表向きになる

「このターンのバトルを1回のみにし、お互いは戦闘を行うモンスターを選び、攻撃表示に変更する！俺がこの効果で選ぶのは『エレメントT タイムウオーリアー』！」

タイムウオーリアーが攻撃表示になり、鞘に納まっていた剣を出す

「小ざかしいマネを！『デルタ・フォース・バリア』効果によって攻撃力が最も高い『ブラック・ティラン暗黒恐獣』は選択できない、よって私は攻撃宣言をした『ハイパーハンマーヘッド』だ！」

タイムウオーリアーの剣がハイパーハンマーヘッドの首を斬り、ハンマーヘッドの首と胴体は別離したが、ハンマーヘッドの攻撃を喰らったタイムウオーリアーの胸は大きく凹み両者共に爆発する  
そして、爆風の中から二つの懐中時計が飛んできて遊介の空いているフィールドに落ちる

「くっ・・・タイムウオーリアーの効果、こいつに乗っていたカウンターをフィールドの空いているゾーンに置き、その置かれたゾーンは使用不可能になる。さらに、『死合い』の効果でモンスターを

戦闘で破壊した場合デッキからカードを1枚ドロウする」

「チツ、ターンエンドだ……」

(フウ……何とか切り抜けたが『デルタ・フォース・バリア』の維持に必要なモンスターの数が足らなくなって破壊されちまった……次のターンやっとモンスターの召喚できるようになるが状況はまだ悪い……このドロウに賭けるしかねえ！)

「……俺の……ターン!!!!」

体が捻じ切れんばかりに体を捻ると、その周りを囲むように風が吹く

(来た！)

「俺はレベル3『エレメントW ウォーター・ルミネ』にレベル3『エレメントS スノウ』をチューニング！降り注ぐ光の結晶が悪を凍えつかせる！シンクロ召喚！」

スノウの体から3つの輪が現れ、レミネを中心に降り、光に包まれる

「降臨せよ！『エレメントEX エクストラ フリージングナイト』！」

マントを羽織り、溶けない氷で出来た甲冑を身に纏い、大きな剣を振るう女戦士が現れる

ATK 2000  
DEF 1800

「くっ、スノウはチューナーだったのか！」

シンクロ召喚で高レベルのモンスターを召喚された牙城は忌々しそ  
うに言う

「だが、その攻撃力では私の『ブラック・ティラノ暗黒恐獣』を倒すことは出来ない！」

「そう焦るなつて先生！フリージングナイトの効果発動！シンクロ  
召喚に成功した時、フィールド上の魔法・罫をこのターン使用不可  
能にし、このカード以外のモンスターの攻撃力を300ダウンさせ  
る！フリージングFreezing アットmoment！」

フリージングナイトが剣を横に振るうとそこから全体が吹雪のよう  
な冷気が吹く

すると、牙城のモンスター2体の足が凍りつき、セットされたカー  
ドが2枚氷の中に閉じこまれる

「くつ、まだだ！『ブラック・ティラノ暗黒恐獣』の攻撃力はフリージングナイトを上  
回っている！」

「墓地のタイムウォーリアーの効果発動！」

「何!？」

「手札を一枚捨て、フィールドのTカウンターを全て取り除き、取  
り除いた数×300ポイント俺のモンスター1体に注ぐ！」

フィールドに置いてあった懐中時計が独りでに浮かびフリージング  
ナイトの体の中に消える

「ハアアアア」

ATK2000 2600

「行くぜ！バトル！『エレメントEX フリージングナイト』で『ブラック・ティラノ暗黒恐獣』に攻撃！アイスコールドブレイク！」

牙城のモンスターの体全身が凍り、遊介のモンスターの剣で斬られ粉々になる

「ぐうううう！」

LP 4000 3700

「カードを一枚伏せてターン終了」

エンド宣言と同時に凍り付いていたカードが解凍される

「私のターン！ドロー！」

（くっ、まさかライフが削られてしまうとは・・・もう手加減などするものか！）

「私は『大進化薬』発動！このカードの効果によりフィールドの『ブラック・ティラノ暗黒恐獣』をリリース！手札のレベル7以上の恐竜族モンスターのリリースなしで召喚！現れる！『エヴォリユーション・ティラノ革命恐獣』！」

巨大な翼を持った3つの頭を持ち、両方の前足にそれぞれにキャノン砲とガトリングを装備した恐竜が現れる

ATK 4000

DEF 4000

「何だあのモンスターは!？」



「しかし、この効果を使用した時、相手はカードを1枚ドロウするが、もう関係ない・・・これでとどめだああ!!」

牙城のモンスターのキャノン砲とガトリングの照準が遊介に合わせられ、発射される  
舞う砂埃遊介の辺りが見えなくなる

「ふはははは私の勝ちだアア!!」

牙城がそう叫びと

「それはどうかな」

爆風の中からそんな遊介の声がする

中には遊介が立っていて、遊介の盾になるように2体の半透明のモンスターもいた

そのモンスターとは胸にHを刻んだヴァレスとタイムウォーリアーだった

そして、遊介のライフはまだ100ポイントのままだった

「なッ、何故だ・・・」

訳の分からないものを見るように呟く

「速攻魔法『残留思念』墓地のモンスターを2体ゲームから除外して発動。このターンのダメージを全て0にする！」

「くっ・・・」



本当に忌々しそうに遊介を睨みつける

(だが、私の『レヴォリユーション・ティラノ革命恐獣』はそう簡単には倒せないはずだ！)

「ターンエンド！」

「行くぜ・・・俺のターン」

(『レヴォリユーション・ティラノ革命恐獣』か・・・牙城が作ったカード・・・だが！勝つのは俺だ！！)

「手札からシンクロリバイヴ発動！墓地のシンクロモンスター1体選択する。その後、選択したシンクロモンスターのシンクロ素材に使用したモンスターをゲームから除外し選択したモンスターを特殊召喚する！復活しろ！フリージングナイト！！」

墓地から再び女戦士が現れた

「行くぜ！魔法カード発動！『シンクロ・オブ・シンクロ』！」

ジャンクウォーリアーとライトニングウォーリアーが一体化したよ  
うなイラストのカードが現れる

「効果によりフィールドのフリージングナイトとエクストラデッキ  
のフェニックスナイトを選択し、このターン選択したモンスターの  
攻撃力と効果を自分フィールドのモンスターに与える！受け取れフ  
リージングナイト！燃え上がる戦士の力を！」

炎に包まれたフェニックスナイトがフィールドのフリージングナイ  
トの剣に炎を注ぐ

「フン!!」

ATK 2000 4800

「バトル！フリージングナイトで『レボリューション・テイラー革命恐獣』に攻撃！グレードブ  
레이크!!」

炎と氷の力を宿した剣を振りかぶり切り裂き、すると2つに分かれたモンスターは半身が燃え、残り半身が凍り爆発する

「ぐうぐう」

LP 3700 2900

「さらに、フェニックスナイトの効果とフリージングナイトの効果発動！ダイヤモンドナイトがモンスターを戦闘で破壊した時、ゲームから除外されたモンスター×300ポイントのダメージとフェニックスナイトの戦闘破壊したモンスターの攻撃力の半分のダメージを与える効果！」

牙城の目の前に降り立ったフリージングナイトと半透明になり現れた背中に羽のような炎のマントを付けたフェニックスナイトが同時に剣を上げ、牙城を切り裂いた

「そんなバカなアアアア!!」

LP 2900 0

そんな牙城の嘆きと共にライフポイントは0になった

「やった！遊介君の勝ちだ!!」

遊介の勝利を喜ぶ観客席にいる女二人  
そんな遊介の勝利にガツクリとうなだれている牙城がいきなり立ち  
上がり

「くっ、こんなデュエルは無効だ!!」

と叫びだした

「あきらめてください。先生、あなたの負けです」

利樹も座席から立ち上がりステージ近くの席に移動して言う

「そうですよ牙城先生、あなたは負けたんですよ」

ホールの出入り口付近から教師用制服を着たボサボサの髪の教師が  
現れた

「・・・学園長・・・」

牙城はそう呟いた

「炎城遊介君、君のデュエル見させていただきました」

学園長が俺の近くまで来て握手しようとして手を出す

「は、はあ・・・」

とりあえず握手する俺

「エレメントでしたっけ？君の使うデッキのカードは」

「まあ、そうですね……」

なぜそんなことを聞くのだろうと思うと

「エレメントのカードは確かAからZの26種類カードがあったはずですが、君は今何枚持ってますか？」

「えっ？ちよつと待ってください……」

急いでデッキのカードを見る遊介に学園長は1枚のカードを渡した

「わかっていますよ。まだ、全てのカードは揃えていないことは・  
・そして、このカードは君の持っていないエレメントの1枚”J”  
のカードだ。受け取りたまえ」

差し出されたカードを受け取る遊介

「そのカードは君のデッキにとって重要な役目を果たすはずだ」

遊介は貰ったカード表替えしてみると、真っ黒な姿をし、右肩の部分にJの文字を刻んだ戦士のイラストが描かれたカード  
その名は

「『エレメントJ ジョーカー・ジャスティス』……」

「そのカードでデッキに入れて、またがんばりたまえ」

学園長はそう言って牙城の元へ向かっていった  
すると、ホールの出入り口からまた走る音がする

出てきたのは利樹に迷些、ネネだった

「遊介！」

ステージに上がると利樹と俺はハイタッチをした

「やったな」

「ああ」

俺たちはそれだけ言葉を交わす

「何この超熱血青春ドラマの1シーンみたいな・・・」

ネネがやつとのおもいでステージに上がり、そうつつこみ4人で笑った

その後、俺たち4人はホールを後にした

〈デュエルアカデミア校門前〉

「くっ離せ！」

牙城は学園長からこれまで牙城がしてきた不正について問い詰められ、教師の免許を剥奪、警察に御用となる羽目になった

（くそっ、なぜだ！私の秘密は福山先生にしか・・・ハッ、まさか）

福山先生が密告したのかと結論づけるとタイミングよく福山先生が現れた

「福山貴様アアアア!!!」

福山を見つけ暴れだす牙城

そんな牙城を見て福山は小さい声で一言

「・・・マインドクラッシュ」

ドクン

「・・・」

急に力が入らなくなる牙城

そして、そのまま警察に連れて行かれるのだった

「フフこれが負けたものの末路ですよ、牙城先生」

## 第2話 遊介vs牙城教諭（後書き）

いかかでしょうか？

前回より質が下がってしまったっていませんか？

これでも面白いと言ってくれるのなら心の底からありがとございます！

次回は利樹君の初デュエル！

使用しているモンスターがあるアニメに似すぎていますが心の中に閉まってやっってください  
お願いします

感想お待ちしております

**番外編 1 オリカ紹介前編（前書き）**

オリカの紹介です



## 番外編 1 オリカ紹介前編

「2話でオリカの紹介って早くね？」

何もない空間で二つ用意したあつた椅子の一つに主人公・炎城遊介<sup>えんじよごうすけ</sup>は言う

「番外編なのにこんな細かい描写はいらないと思うぞ作者」

メタ発言する利樹

「直すつもりはないらしいな・・・まっ、いいか俺らには関係ねえーし」

「今回は題名でわかるようにオリカの紹介だ」

「じゃあ始めるぜ」

エレメントH ヒート・ヴァレス

レベル4：炎：戦士族：チューナー

ATK1700

DEF1000

効果：自分フィールド上に表側表示で存在する「エレメント」と名のつくモンスター数×200ポイントアップする

エレメントW - ウォータールミネ

レベル3：水：魔法使い族

ATK1200

DEF 900

効果：このカードの特殊召喚に成功した時、相手フィールド上のモンスター1体を手札に戻す

エレメントR ロックマン

レベル4：地：戦士族

ATK1600

DEF1600

効果：このカードは1ターン一度、戦闘によって破壊されない

エレメントS スノウ

レベル3：水：魔法使い族

ATK1000

DEF1500

このカードの召喚に成功した時、相手フィールド上の魔法・罫を1

枚選択する。選択したカードはこのカードがフィールド上に存在する限り、カードの発動及び効果の発動を行えない

エレメントT タイムウォーリアー

レベル4：地：戦士族

ATK1500

DEF1500

効果：自分ターンのエンドフェイズ時までに関分モンスター召喚・反転召喚・特殊召喚をしなかつた場合、このカードにTカウンターを一つ置く(最大5つ)

このカードがフィールドから墓地に送られた時、このカードに乗っていたTカウンターを自分フィールド上の空いているゾーンに置く(この効果でTカウンターを置いたゾーンは使用不可能になる)

このカードが墓地に存在する時、フィールドのモンスターを1体選択し手札のカードを1枚墓地に送ること関分フィールド上に存在するTカウンターを全て取り除き、選択したモンスターの攻撃力をエンドフェイズ時まで取り除いたTカウンターの数×300ポイント攻撃力をアップする

エレメントEX フェニックスナイト

レベル8：炎：戦士族/シンクロ

ATK2800

DEF2300

エレメントと名の付くチューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

効果：自分のターンのバトルフェイズ中、このカードはカード効果によって破壊されない

このカードが戦闘によってモンスターを破壊した時、その破壊したモンスターの攻撃力の半分のダメージを相手ライフに与える  
????

「何これ？」

「フェニックスナイトの3つ目の効果は公開できないんだってよ」

「これからの楽しみと言いたいんだろな・・・次」

エレメントEX フリージングナイト

レベル6：水：戦士族/シンクロ

ATK2000

DEF1800

効果：このカードがシンクロ召喚に成功した時、このターン中フィールド上に存在する魔法・罫のカードの発動及び効果の発動を無効にし、このカード以外のモンスターの攻撃力を300ポイントダウンする

このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地に送った時、ゲームから除外されたモンスターカードの数×300ポイントのダメージを与える

「えつーと次からは俺の使った魔法・罠のカードの数々だな」

エレメント・チェンジ

通常罠

自分フィールド上で表側表示で存在する「エレメント」と名の付くモンスターをリリースして発動する

リリースしたモンスターのレベル以下のレベルの「エレメント」と名の付くモンスターをリリースしたモンスターを同じ表示形式で特殊召喚する

傷だらけの生還

通常魔法

ライフを半分支払い発動する

自分の墓地に存在するモンスターを1体特殊召喚する

この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃力が0になる

エレメントフォース

速攻魔法

フィールド上のモンスター1体を選択する

このターンそのモンスターの攻撃力は墓地に存在する「エレメント」と名の付くモンスターの数×200ポイントアップする

エレメントバースト

## 通常罾

フィールド上に存在する「エレメント」と名の付くシンクロモンスターをリリースして発動する

リリースしたモンスターのレベル×200ポイントのダメージを相手ライフに与える

## 召喚士の暴走

### 通常魔法

自分の手札の通常召喚可能なモンスターを全て召喚する

この効果で召喚したモンスターの数×1ターン自分は召喚・反転召喚・特殊召喚を行えない

## デルタ・フォース・バリア

### 永續罾

自分のライフが2000以下の場合発動できる

自分フィールド上の表側表示モンスターの攻撃力の合計より下のモンスターによるダメージは無効になる

相手フィールド上の攻撃力の高いモンスターは攻撃宣言を行えない。フィールド上に同名モンスターも存在する場合、そのモンスターも同様の効果を受ける

自分フィールド上にモンスターが2体以下になった時、このカードを破壊する

死合い

通常罾

相手もしくは自分の攻撃宣言の時に発動可能

このバトルフェイズ中戦闘を行える回数を1回にし、お互いはフィールド上のモンスターを1体選択する

選択したモンスターを攻撃表示にし、相手の選択したモンスターと戦闘する

このカードの戦闘によって自分モンスターが戦闘によって破壊された時、デッキからカードを1枚ドロウする

バスターショットストップ

通常罾

自分フィールド上のモンスターをリリースして発動

このターンのバトルフェイズを終了する

このカードは相手のターンのみ発動可能

残留思念

速攻魔法

墓地に存在するモンスターカードを2枚ゲームから除外し、このターン中に発生した戦闘ダメージを0にする

## シンクロリバイヴ

### 永続魔法

自分の墓地に存在するシンクロモンスターを1体選択し、そのモンスターはシンクロ召喚のために使用したのモンスターをゲームから除外し、選択したモンスターを特殊召喚する  
このカードがフィールドから離れた時、この効果で特殊召喚したモンスターを破壊する

## シンクロ・オブ・シンクロ

### 通常魔法

自分フィールド上に存在するシンクロモンスターとエクストラデッキに存在するシンクロモンスターを1体ずつ選択し、フィールド上の選択したモンスターにエクストラデッキで選択したモンスターの攻撃力と効果をこのターンのエンドフェイズ時まで与える

「これで終わったな・・・」

「ただだぞ遊介、お前以外のオリカの紹介もしなくちゃならないぞ」

「ちよっ、おまつ、待て！たった2話でこんだけのオリカの量だぞ！他のも載せたらやばいって！」

「よし次」



「お願い待って！もう前項編でいいや！次の紹介は後編で！いつ投稿するかは知らんがとりあえずここで終わりだ！！」

**番外編 1 オリカ紹介前編（後書き）**

番外編でも前項編か・・・自分でも言うのは何だけどおかしいよねこれ・・・

ちなみに次は絶対番外編オリカ紹介後編になるかはわかりませんが作者の気分しだいです

**第3話 奇跡の戦士降臨！（前書き）**

今回は初デュエルをする利樹様の回です！

### 第3話 奇跡の戦士降臨！

く?????

暗闇の中からバン！とスポットライトの光が灯る

そこに髪をカール巻きにしている女子生徒がスポットライトの中心に現れ叫ぶ

「皆の者！ここはどこだ！！」

すると、周りの席に座っていた女子たちが一斉に叫ぶ

『利樹様のための！』

『利樹様に捧げる！！』

『利樹様の会！！！！』

打ち合わせでもしたのかというくらい息ピッタリな掛け声にロール巻きの彼女はウンウンとうなずく

「よろしい！では最初に重大発表をしたいと思えますわ！」

重大発表？と疑問に思う女子生徒たち

カール巻きは続けてこう述べる

「利樹様がこの学校に入学して1週間も経っています。学校にも馴染めてきたはずです。ですからもう我々がお守りする必要はないと思っただのです・・・同時にこう思いました。我々の万全なお守りが

なくなった時の利樹様の安全を・・・そして、私は思いついたので  
す！我々の中から一人、利樹様の側近に就かせることを！！」

その言葉に集まっていた女子生徒が全員ワー！！と盛り上がり、我  
先にと利樹様の隣を歩くのは私が適任ですとアピールし始める  
しかし、カール巻きはそんな彼女たちに向かって叫んだ

「お黙りなさい！！！」

その言葉でシンと静まり返る場

静かになった場で彼女は再び口を開く

「皆さん・・・ここはデュエルアカデミアですよ？ならば、自らが  
利樹様の隣に歩くことが出来ると言っならばデュエルで示しなさい  
！そして、今ここに私わたくしシャルル・リサーナは宣言いたします！2週  
間後にここで利樹様争奪決定戦を開くことを！」

くデュエルアカデミア校門近くく

「2週間後の利樹様争奪決定戦か」

ツインテールの背の低い前田ネネは親友の黒崎迷些に言う  
今二人は学生寮に帰っている途中だったが

「どっつしたの迷些？」

さっきから黙っている黒崎迷些にネネは聴く

「ん？あつ、ごめん！ネネ・・・えつと、なんだっけ？」

どうやら何かを考えていたらしくて私の話は聞いていないのか・・・

「もしかして迷些三って・・・」

「そそそんなことはないぞ！！」

「まだ何も言っていないじゃん」

「はっ！！」

再び口を閉じる迷些三

しばらくの間、迷些は黙っていたが、意を決したのが再び口を開き始めた迷些三

「私・・・遊介君のことが気になってたの」

「恋愛がらみで？」

そうからかってみると「違う」と即答する

顔も赤くないから本当だろう

「じゃあどうして気になってるの？」

「今日のデュエルを見て彼と闘ってみたいって思ったの」

「へえ、めずらしいね迷些三から倒したいだなんて・・・確かこれで  
3人目ぐらいだよな」

うんと答える迷些

ちなみに、3人のうちの一人には利樹様も入っている

「明日にでもデュエル申し込んだら？」

思い立ったら吉日って言うしね」と言い足したネネに

「うん、そうするよ」

迷些は一言で答えた

（翌日）

「……」

俺は目の前の光景を見てまだ夢の中にいるのかという錯覚に陥った  
その理由は利樹がめずらしく女子たちに囲まれていないこととなぜ  
か露出を多めの服装（一応学校だから制服）を着る女子生徒、しか  
も一人だけではないクラスの連中のほぼ全員だったからだ

「……どゆこと？」

俺の精一杯の言葉だ

「おはよ！遊介君！」

（ん？この元気のいい声は背の低いツインテールのネネか？）

その声の正体を確かめるため後ろを振り向くと、確かに背の低いツ

インテールの前田ネネだったが・・・

「・・・ハァー」

「ちよっ！？なんで溜息！？どうして！？」

訳がわからないという顔でギャーギャー騒ぐネネ

「ごめんごめん、でもYシャツのボタンぐらい閉めような」

多分着け忘れたのだろつと無理やり自分を納得させ、ポンポンとネネの頭を軽く叩く

「なんかもう子ども扱いしてない？」

「してないしてない」

しかし、ネネに目を合わせない俺だった

それを怪しいものを見る目で俺を睨むネネから俺はさっさと逃げた

「利樹・・・女子たちのこの行動一体なんだ？」

本を片手に持って本を読む親友上条利樹に聴く  
すると、えっ？という顔で俺の方を見た

「知らないのか遊介？2週間後にミスデュエルアカデミアを決める  
イベントが行われるんだぞ」



「だからみんな点数稼ぎで制服を露出多めにしてるのか・・・つか早くないかそういうイベント？」

そんなことは学校に聴いてくれと答える利樹

そんな話をしていた俺たちにある男子生徒が近寄ってきた

「君が上条利樹だね？」

四角い眼鏡をかけた角刈りの男子生徒が現れた

「ああそうだ」

角刈りの生徒に利樹は答える

「君ってこの学年で一番強いとか言われてたよね？」

「僕にとっては興味のないことだけどね」

テキストに眼鏡の生徒の言葉を返していく

「それで一度僕とデュエルしなてくれないか？」

なぜそうなると利樹は答える

「僕は一度君の強さをこの身で受けて自分の信じるデッキをより強くしていきたいんだ」

羽田からすればデュエル熱心だなと思う人も多いたろうが利樹は目も合わせずに言った

「断る」

「……どうして？」

「僕は極力学校の授業や大会以外でデュエルしないようにしているからね」

眼鏡の生徒はしばらく黙った後

「ここでデュエルを拒否したことを後で後悔しろ……」

そう呟いてその場を去ったのである

くデュエルアカデミア校門近くく

現在時刻は5時過ぎ

デュエルアカデミアの正門近くに女子寮に帰宅しようとする迷些とネネの姿があった

「やっぱりおかしいのかなこの背でこの格好は……」

ネネは俯いて一人呟く

「まあ、その背でもでる部分でてるし……」

そう言って迷些は両手を胸に当てネネのものと見比べ「やっぱり私の方が小さいな……ハハ」と笑っていたがその目は全く笑ってはいなかった

「大丈夫？迷些？」

心配そうにネネが聴くこうとすると

「ソウダヨネ・・・アノヒクイセデアノロシユツノジャ・・・ネ・・・ハハハ」

言葉が急に片言に変わり

「迷些・・・どうしたの？・・・やつ、止めてよ！その目で見ないで〜！！」

怖くなったネネは逃げ出す

それを笑いながら追いかける迷些

そんな二人の行動を物陰からこっそりと観察する者がいた

「あれが上条の近くにいる女子生徒か・・・」

妙な覆面を被った男は誰でも見て分かるように笑った

「ケケケケ！」

もはや人の言語を喋っていない迷些はネネを追い回し続けていた

「だっ、誰か助けて〜！」

と叫びつつ近くの物陰へと逃げ込むネネ

しかし、逃げ込んだ場所は彼女にとって最悪な場所だった

「フフ最初の関門をクリアです」

覆面の男は懐からスタンガンを取り出し、物陰から外の様子を見て  
いるネネの首筋にやり、電源をONにする

「!！」

バチツと小さな音を立てた後、ネネは地面に崩れ落ちた

〈男子寮のとある1室〉

ここデュエルアカデミアの学生寮は2人1組形式の部屋割りであり、  
俺こと炎城遊介は上条利樹と同じ部屋に住んでいた

「ぷはー風呂気持ちいいぜ」

今俺は腰にタオルを巻き、冷蔵庫から牛乳を出して一気飲みをして  
いたところだった

「遊介、口の周りに白い牛乳の輪が出来てるぞ」

そう言ってジャージ姿の利樹は俺に指摘する

「おおっと、ありがとうよ」

「はあー、お前な今の今まで生徒手帳の起動を僕に任せて風呂に入  
って牛乳飲んでって・・・僕はお前の母親じゃないぞ」

「いや、最初の風呂はお前に譲ったんだからどちらかというとお父



「大丈夫じゃないじゃん」

俺は寝室から顔だけを出して言った

「・・・そうだな」

利樹の力のない声が聞こえた

数十分後

「・・・ん」

意識が戻った迷些は辺りを見渡した

あるのはソファとテレビ

そして今、遊介君と利樹様はソファの前に置いた生徒手帳のことで  
口論していた

「なんでこんな簡単なことができないんだ！」

「天才と凡人を一緒にするな！」

口論する原因がわからない私は聴く事にした

「何やってるんですか？」

「ん、起きたのか？」

ジャージ姿の遊介君が私に尋ねてくる

「うん、おかげさまでところで何やってるの？」

「今、遊介の生徒手帳の起動とシステムの細かい設定をしている」

「えっ、どういのですか？」

（システムの細かい設定か・・・私やったことないからおもしろう  
そうだな）

利樹様が持っていた生徒手帳の画面を見るとデュエルディスクとの  
リンク設定だったらしい

「こんな難しいことも利樹様はやるんですね」

リンク設定は第2段階まで終わっているようでこれから第3段階の  
工程に移ろうとしていたところだった

「でもこれって、特別な行事があるまで先生から動かすなって言っ  
てませんでしたっけ」

ピタリと利樹の動きが止まる

「利樹・・・お前まさか・・・」

「聞いてなかった・・・」

「利樹様にもこんなお茶目なところが会ったんですね」

アハハハと3人で笑い、遊介君はあることに気付いた

「あれ？そういえばどうして迷些はここに来たんだ？」

「ん、それはね・・・あああああああああああ！！！！」  
いきなり叫んだ私にうわっ！とビックリする遊介君

「こんなことをしてる場合じゃないんだ！助けてください利樹様！」

「ど、どうしたんだ？」

珍しくうろたえる利樹に迷些は涙目で訴えていた

「ネネが！ネネが・・・うあああああん！！」

子供みたいに泣き出す迷些をあやすのに数分かかりました

「何！？ネネが攫われた！？」

迷些をあやして数分後、事情を聞いた俺は、驚きの声を上げた

「うん・・・変な男がそう言ってネネを連れて行ったの・・・」

「午後7時にデュエルアカデミア近くの港に来いか・・・」

迷些が渡されたというカードを見て利樹は呟いた

「どつする？目的はお前を誘き出すよつだぜ」

「・・・」



無言で黙る利樹

「やっぱり行くしかないだろ！利樹！！」

そう言っただち上がる俺

「……」

それでも何も言わない利樹に苛立ちながら静かに呟いた

「どうせお前一人で行くつもりだったんだろ？一人二人増えようがどうってことはねえだろ？」

フツ、口元が笑う利樹

「敵の数は分からないし、もしかしたら大人数かもしれない、そうしたら僕は遊介たちを庇いながら戦うのは出来なくなるそれでもいいか？」

「もちろん！そんなときは俺に任せとけ！！」

がっちりと手を組んだ二人の様子を私は見ながら

「熱いなあ」

と言っただけだった

「デュエルアカデミア近くの港」

時刻はもうすぐ7時になろうとしていた

「来たか」

覆面を被った男は、港の倉庫近くから3人組が現れた影を見つけて行った

「ネネ！」

迷些が叫ぶとロープで縛られていたネネが目を覚ます

「！迷些！？ここどこ！？」

今の今まで気絶したままだったのか場の状況についていけない  
ネネは騒ぎ始める

「おい！ネネに何か変なことしてねえーだろうな！！」

遊介が誘拐犯に聴く

「そんなことはしてないよ、僕の興味のあることは利樹君、君との  
デュエルだけだ」

覆面の男が何かを投げる

地面に落ちた物はデュエルディスク

「それを付ける」

何の感情もない声で言う

「おい！それ変な細工とか・・・」

遊介が言い終わる前に僕が手で遮り、無言でディスクを腕に付ける

「フフ、付けたな・・・そうすればこいつはもう用なしだ」

ポケットからナイフを出してネネのロープを切る

「迷些！！」

自由になると迷些の元に走ってゆく

「どうして人質のネネを開放するんだ？」

相手の行動を見て疑問に思う俺だったが、利樹は無言で立ったまま答えた

「ディスクに細工がしてあるんだろ」

「！？」

さらっと問題発言する利樹  
そして、再び口を開く利樹

「多分、奴が用意したディスクにライフの減少と同時に電流を流すように細工がしていて、奴からある一定の距離から離れると電流が流れる仕組みだろう」

そして、覆面男に向かってこう聞いた

「こつやって気を緩くさせて何人を罠にはめた？」

多少の怒りが混じった利樹の言葉に迷些とネネは少しビクツとしたが黙って成り行きを見守っている

「さすがに優等生過ぎる奴に引つ掛からないか・・・まあいいわかつてるならデュエルは逃れられないぜ」

覆面の男が面白くなさそうに言う  
海の方から風が吹く  
そして

「デュエル！！」

「俺の先攻！！」

覆面男の先攻から決闘は始まった

「モンスターセット！カードを2枚伏せてターンエンドだ！！」

「初歩的な様子見か・・・ドロー」

カードをドローするとまた風が吹く

「僕は『牛魔王アレフィスト』を召喚」

全身緑の両腕が馬鹿でかい機械のようなモンスターが現れた

ATK 1800  
DEF 1600

「さらに、手札から魔法カード『抹殺の使徒』を発動」

カードが発動すると絵の中から剣を持った戦士が覆面のフィールドのモンスターを切り裂く

そして、斬られたカードは切れ端からサアアアと消えていく

「『抹殺の使徒』の効果はフィールド上の裏側表示のモンスターを破壊しゲームから除外する」

「チツ、俺のモンスターは『魂を削る死霊』だッ！」

「バトルフェイズに移行、アレフィストでダイレクトアタック直接攻撃」

アレフィストが覆面男目掛けて突進する

「そんな単調な攻撃が通るか！リバースカードオープン！！」

覆面男が宣言するが、伏せられたカードは表向きにならない

「無駄だ、アレフィストが攻撃した時、相手はダメージ計算終了時まで罠の発動はできない」

（何ッ！？）

気付くと目の前に重く太い腕が今まさに振り下ろされようとする瞬間だった

「バッファロークラッシュ」

静かに呟くとアレフィストの重く太い腕が地面に当たり鈍い音がするのだった

「くっ、・・・」

LP4000 2200

覆面男が忌々しそうに利樹を睨みつけるが当の本人は気にするつもりもなく淡々と次の行動に移った

「メインフェイズ2に移行、カードを2枚伏せてターンエンド」

「俺のターン！ドロー！！」

デッキから乱暴にカードを引く

「魔法発動！『成金ゴブリン』！！」

（相手ライフを回復させて自分はデッキからドローするカードか・・・  
・ならあの伏せカードにはあれがあるな）

利樹の予想通り覆面男は『成金ゴブリン』の発動にチェーンして伏せカードを発動した

「リバースカードオープン『シモツチの副作用』！」

「そのカードの発動に僕もチェーンして速攻魔法を発動『サイクロン』」

その魔法カードが発動すると竜巻が発生して覆面男のフィールドを襲う

「『サイクロン』の効果はフィールド上の魔法・罫を1枚破壊する効果・・・よってチェーン2で発動した永続罫『シモツチの副作用』を破壊する」

覆面男のカードが竜巻に飲み込まれ破壊される

「チェーン1で発動した『成金ゴブリン』の効果により僕はライフポイントを回復」

LP 4000 5000

「俺はデッキから1枚ドロ・・・」

(くっ、だがまだだ！)

「俺は『アメーバ』を召喚！さらに、魔法カード『シエンの間者』！！」

スライムのようなモンスターが現れる

ATK 300

DEF 350

「リバースカードオープン『魔宮の賄賂』、このカードの効果によって『シエンの間者』の発動を無効にし破壊する」

相手の発動したカードが破壊される

「くっ、カードをドローする」

(なんなんだ？あいつはおれの行動が読めてるって言うのか!?)

立て続けに自分のカードが破壊される覆面男

(ともかく守りを固める!)

「リバースカードを1枚セットしてターン終了だッ！」

焦りのようなものが周りに伝わるほどの大声で叫ぶ

「僕のターン、ドローカード」

対して利樹には焦りも気の緩みを感じさせなかった

(あの伏せカード……)

利樹は手札のカードを見る

「……カードを3枚伏せてターン終了」

そう言ってカードを3枚出してターンを終了した

「」「!?!」「」

この場にいた全員が驚愕する

「お前このままターンエンドでいいのか?」



覆面男がそう聴くと

「ああ」

「利樹様……」

不安そうに見つめるネネと迷些

「利樹の奴、一体何考えてんだ？」

（デュエル余裕で俺にハンデでもやったつもりか？ならその顔を後悔の色に変えてやる！！）

「俺は装備魔法『進化する人類』を『アメーバ』に装備！」

猿、人、宇宙人が彫られた石版のイラストのカードが発動する  
そして、このカードを装備したアメーバはグニヤグニヤと体が蠢き、  
某小説の神人しんじんのような形になった

「自分のライフが相手より低い場合『進化する人類』を装備したモンスターは攻撃力は2400になる！」

「……」

うるたえる遊介たち

しかし、利樹はそれでも顔色一つ変えない

（攻撃力2400の『アメーバ』を気にしてねえ……なら、あの伏せカードは攻撃の際に発動するカードか？）

「俺はカードを3枚伏せる」

フィールドに裏側で3枚のカードが出現する

「?何でここで伏せカードを伏せるの?」

「今からその答えを見せてやるよ」

そんなネネの問いに覆面男はそう答え

「手札のカード全て捨て、さらに、フィールド上の攻撃力2000以上のモンスターを1体リリース!」

「この召喚方法って・・・」

「『炎獄魔人ヘル・バーナー』・・・」

迷些がその名前を口にするとアメーバが炎の柱に飲み込まれ、アメーバが悲痛な叫びを上げる  
そして、覆面男が1枚のカードを掲げて叫ぶ

「アドバンス召喚!『炎獄魔人ヘル・バーナー』!!!」

炎の柱の下から地面を突き破り現れたヘル・バーナー

ATK 2800

DEF 1800

「ヘル・バーナーの効果!相手フィールド上のモンスター1体につき攻撃力を200ポイントアップする!」

「グオオオオ!!!」

ATK 2800 3000

雄叫びを上げるヘル・バーナー

しかしこの状況でも利樹は、

「・・・」

無言でしかも顔色も変えていなかった

「チツ！バトルだア!!!ヘル・バーナーでアレフィストに攻撃!!!」

ヘル・バーナーがアレフィストにのしかかり攻撃を仕掛けてくる

そして、今まで沈黙を突き通していた利樹が動き出した

「リバースカードオープン!!!『平等戦闘』!」

切り込み隊長と戦士ラーズが鏝迫り合いをするイラストのカードが発動される

「『平等戦闘』の効果!モンスターの攻撃宣言時に戦闘を行う2体のモンスターの攻撃力の差の分だけ攻撃力の低いモンスターの攻撃力をアップする」

「ウウウウ!」

ATK 1800 3000

アレフィストは肩にある2つの角をぶつからせて相手の攻撃に備える  
そして、ヘル・バーナーののしかかり攻撃を真正面から受け止める

が手足が破損し爆発する  
しかし、ヘル・バーナーもアレフィストのデカイ角が突き刺さり破  
壊された

「相打ちか……」

ネネが残念そうに言うと

「リバースカードオープン!!!」

利樹の力ある声が聞こえた

「畏カード『世界の声』!」

巫女が手を合わせて祈るイラストのカードが発動する

「このカードは自分のモンスターが戦闘によって破壊された時発動  
することができる!その効果によってデッキ・手札より『奇跡の戦  
士タウバーン』を特殊召喚!!!」

その声と共に利樹が背を向けている方向の空間にひびが入る

「やりたいこととやるべきことが一致する時、世界の声が聞こえる  
!!!」

空間が割れ真っ白な空間に1体の白を基調とした機械が1体佇んで  
いた

そして、その白い体の機械が真っ白な空間から利樹のフィールドに  
飛び出すと、腰に付いていた細長いものが展開し、胸部の丸い水晶  
状の物体が淡い青色を輝かせる

ATK 2800  
DEF 2300

「なん・・・だと・・・」

覆面男の顔が引きつる

「すごい・・・」

ネネと迷些はそれだけ言う

「まさかあいつこの展開を予想してたのか？」

遊介は利樹の背中を見つめ

（すげえぜ・・・利樹、・・・お前もどんどん強くなっていったるんだな・・・）

両手を握り締めて遊介は思う

（おもしろくなってぜ！）

そして、遊介は笑うのだった

（くっ、・・・ヘル・バーナーの召喚のために手札を捨てちゃった・・・それに俺の伏せカードの『奈落の落とし穴』が腐っちゃまった！まさか、あいつが自分のモンスターを破壊させるのが目的だなんて・・・しかも俺と違ってライフを5000もあるじゃねえか・・・）

覆面男が焦り始め利樹のモンスターの対策について考えていると

「もう十分じゃないか？」

不意に利樹が覆面男に話しかけた

「なんだと？」

もうデュエルで勝ち目はないと宣言するつもりなのかと思った覆面男はその余裕っぷりに怒りを覚えたが利樹の次に放った言葉は予想とは違うものだった

「折原節也、なぜこんなことをする」

「、」

覆面で顔の分からないはずの男の名前を出した利樹に覆面男は黙る

「折原節也？誰それ？」

遊介が隣の迷些に聴くがさあと言って答える

「いつから分かった僕のこと・・・」

一人称が俺から僕に替わる

覆面を脱ぐ折原節也

「会ったときからだ」

覆面を取った折原を見ると遊介があー！！と指差し叫ぶ

角刈りされた頭で眼鏡をかけた生徒

今朝利樹にデュエルを申し込みあっさり断られた男だった

「でもどうしてそんな格好してるんだ？」

「僕は・・・僕を見下した奴に仕返ししたかったんだ・・・」

小さい声でそう言った

「色々な奴らが僕のことを『弱い』、『時間の無駄だった』、『力の無駄遣いだ』とかいろいろ言ってたんだ。許せなかった、だけどデュエルでもケンカでも勝てないただ怒りだけが日に日に募っていた・・・そんな時に会ったんだ！」

「？誰に？」

「仮面を付けた男にだ。そして、彼はこう言った『許せない相手がいるなら容赦はするな。このデッキをつかえば、君の望む勝利と力を与えられる』って」

そう折原節也が言った

「確かに君の味わった苦しみは苦しかったかもしれない。だが、こんなことをしていい理由にはならない！」

改造ディスクを節也に見せ付けるように突き出す

「君は他人から与えられたデッキで勝利を掴み取ったのか？こんなデュエルで相手をボロボロにしたのか？違うだろ！君がここに入った時の思いはもつと純粹で輝いていた勝利のはずだ！お互

いに精一杯がんばる楽しいデュエルをしたかったはずだ！」

そんな利樹の言葉を聞いた節也が呆然と立ちすくむ  
彼の目には涙がこぼれていた

「これで一件落着かな」

やっと安堵の息を洩らした利樹

「完璧なデュエルかつ胸を刺すような心ある説教・・・美しいです  
利樹様・・・」

女子二人は何か変なオーラのようなものが感じられた  
それを近くにいた遊介は

「まっ、これはこれでいいか」

そう言つて利樹に親指を立てた  
利樹も同じように返した

これで何もかも終わったと思っていたが彼らは気づいていなかった  
これから起こる異変について

『闘え』

節也はその声を聞いた

しかし、その場には目の前にいる彼ら以外いなかった  
しかし、声は繰り返し続ける

『闘え』





ネネと迷些にそんな症状が現れる

「くそっ！どうなってやがる！！」

この場で正常なのは俺と利樹だけだったらしい

『その女子達おなごたちを助けたければ私に勝つがことだ』

（もつとも勝てるかどうかは無理の話だがな・・・）

「くっ、いいだろう。僕のターン！ドロー！！」

（このままタウバーンダイレクトアタックで直接攻撃を決めれば勝てるかもしれないがあの伏せカード・・・）

そう思案する利樹にタトゥーの男は新たな行動を見せた

『永続畏発動！』『リビングデットの呼び声』！このカードの効果で私は墓地の『炎獄魔人ヘル・バーナー』を特殊召喚！！』

再びヘル・バーナーがフィールドに姿を現した

『さらに畏発動！』『墮獄』！』

両目をから血を流す人のイラストのカードが発動する

『このカードの効果はフィールド上の『炎獄魔人ヘル・バーナー』をリリースし、デッキから『墮獄魔神たこくましんデス・バーナー』を特殊召喚する！』

ヘル・バーナーの周りから魔方阵のようなものが発生するとヘル・バーナーが黒い炎に飲み込まれる

『地獄の底に潜みし、邪悪なる魔物よ・・・この地に姿を見せよ！』

黒い炎の中から羽が生えたデス・バーナーが現れた

ATK 3000

DEF 2800

『です・バーナーの効果！相手モンスター1体につき攻撃力を1000ポイントアップする』

「アアアアアア！！」

ATK3000 4000

デス・バーナーの叫びと共に地震が起こる

「！！なんだよこれ！？」

あまりの地震の強さに立っていることが困難になる

『さらにデス・バーナーには相手モンスターに対する強制攻撃効果も持っている』

「そんな！これじゃ無理矢理自滅させられてると一緒じゃない！」

ネネがそう叫ぶ

その声に遊介は片膝をつきながら言う

「大丈夫だ、利樹のタウバーンがこんなことで負けはしないし、むしろ……」

遊介は敢えてこの先の言葉を言わない

(見せてやれ！利樹！タウバーンの力を！！)

「バトルフェイズ！タウバーンで『墮獄魔神デス・バーナー』に攻撃！」

タウバーンが足の裏のジェットを噴射させて相手モンスターに突っ込む

『そのモンスターを除去してしまえば私の勝ちだア！フォーールドウンプレス！！』

デス・バーナーが黒い炎を吐き、タウバーンを包み込む

『フハハハ！！死ねタウバーン！！』

完全に勝ったと思っているタトウの男  
しかし

「フッ、」

今も笑みを浮かべ続ける利樹がいた

「言ったはずだこのデュエルは僕の勝ちだ！」

黒い炎の中から青白く光るタウバーンが現れる

「なっ、なぜタウバーンがまだ破壊されていない!?」

目の前の意味不明な状況に驚くしか出来ないタトウの男

「ディスクの機能を使ってカードのテキストを見るべきだったな！  
タウバーンの効果！タウバーンが攻撃を行った時、戦闘を行うモンスター  
の攻撃力が元々の数値より変化していた場合その変化した数値に500ポイント足した数値をタウバーンの攻撃力に加える！つまり  
今のタウバーンの攻撃力は4300！これで『墮獄魔神デス・バーナー』  
の攻撃力を上回った!！」

手のひらから2つの剣を出し構える

「いくぞ！豪快！銀河十文字斬り!!！」

タウバーンが跳び上がりデス・バーナーの眼前で剣を十字状に斬る

「グオオオオオオ!!！」

LP2100 1800

「まだまだ！リバーオープン！『連撃』！」

切り込み隊長が二つの剣で2体のモンスターを切り裂くイラストの  
カードが発動する

「自分モンスターが相手モンスター戦闘で破壊した時、戦闘で相手  
モンスターを破壊したモンスターは相手に直接攻撃できる!！」  
ダイレクトアタック

「なんだと!?!」

タワーは剣を消し、両手の手の平を胸の前で構える  
すると、球体状のエネルギーが集まる

「今助け出すぞ!炸裂!タワー銀河ビーム!」

球体状のエネルギーから光線が出てタワーの男に浴びせる

「ギャアアアアアアア!」

LP18000

タワーの折原が負けると同時にデッキが風に流されていった

〈港 3番倉庫〉

3と書かれた倉庫の天辺に座る男がいた  
ふざけた仮面を付けた男の手には風で飛んできたカードが元の持ち  
主の所に戻るように綺麗に重なっていく

「これが暴走ですか・・・」

その男は利樹と折原のデュエルを観戦し1つの答えに行き着いた

(「ロストシリーズ」のカードは持ち主の精神が適するかどうかを  
見定める・・・もしカードに適さない精神だったならばカードはそ  
の人間の人格の主導権を奪い乗っ取るというところか・・・)

風流れてきたカードを上着のポケットに入れると畳んであった仮面の男の全身を被いつくせる程のマントを被る  
すると、自分に被せたマントは風に飛ばされていったがその場に仮面の男の姿はなかった

### 第3話 奇跡の戦士降臨！（後書き）

今回の最強カード

奇跡の戦士タワー

レベル7：光：機械族

ATK 2800

DEF 2600

効果：このカードが相手モンスターに攻撃する時、相手モンスターの元々の攻撃力が変動していた場合、その変動した数値+500ポイントの数値をこのカードの攻撃力に加える。このカードが戦闘で破壊される時、墓地の機械族モンスターをゲームから除外することでこのカードの破壊を無効にする。このカードは「戦士族」としても扱う。

今回から『今回の最強カード』のコーナーを開始します（忘れてしまっただけかもしれませんが・・・）  
いかがだったでしょうか今回は・・・

・・・利樹の操るモンスターたち・・・わかる人にはわかる名前です  
ね・・・



番外編 1 オリカ紹介後編（前書き）

今回は番外編です

## 番外編1 オリカ紹介後編

「やっと後編だな」

「そうだな」

「元気ないぞ〜遊君」

「つてお前！ワ・・・ムゲウウ！」

「遊介・・・彼女はまだ話の本編に出てきてないんだぞ？ネタバレになるから名前だけでもいいから伏せておいてくれ」

「そうそう、私は七話ぐらいから来る転校生、そしてこの小説のメインヒロインです！」

「その発言で今これを読んでいる読者みんな迷些じゃないの！？という疑問が浮かんだらうがそうだメインヒロインは迷些じゃなくてこの帰国子女だ」

「遊君、人を指差しちゃいけないよ？」

ボキッ

「アガガガガ！！指がああ俺の人差し指がアアア！！！」

「まあそこでのたうち回る主人公を描いておいて前回のオリカ紹介では紹介と言っておいてただオリカのテキスト説明だけで終わっていたから今回からはちゃんと僕たちのコメントを載せておいておく

よ・・・あと、番外編のみ他作品の名台詞やそのことで話してしま  
うことがあるが了承していてくれでは、・・・綺羅・・・」

「言わせるかアアアア!!!」

牛魔王 アレフィスト

レベル4：地：機械族

ATK 1800

DEF 1600

効果：このカードが攻撃した時、ダメージステップ終了時まで相手  
は罨カードを発動できない。このカードは獣戦士族としても扱う。

「初めて利樹が召喚したモンスターだな」

「ああ、某アニメの1話目でも登場したがあまり活躍はせずに、主  
人公メカのチョップで沈んだ最初の敵だな」

「作者って相当なスタドラ好きだよな」

「まあそれが登場人物である僕たちにも反映されてるくらいだから  
な」

「すると?」

「遊介なら某アニメの主人公タクトと同じ性格とはいかないが髪型  
が一緒だな」

「トシ君ならスガタで私はワコだもんねえ」

「みんなちなみにトシ君とは利樹のことな」

「というかあんまりカードの説明をしていない気がするんだが……」

「そつだな、次はがんばおうぜ」

「そつだそつだ」

「……」

奇跡の戦士 タウバーン

レベル7：光：機械族

ATK 2800  
DEF 2600

効果：このカードが相手モンスターを攻撃した時、攻撃した相手モンスターの元々の攻撃力が変化していた場合、その変化した分の数値+500ポイントの数値をターン終了時までこのカードの攻撃力に加える。このカードが戦闘によって破壊される時、自分の墓地に存在する機械族モンスターをゲームから除外することで破壊を無効にする。このカードは機械族としても扱う。

「利樹のエースモンスターか……つか少くないかモンスター？」

「相手のレベルに応じてモンスターの召喚を行っているからな」

「ほほうつまり、手札には何枚かモンスターカードを引いていたの  
かね？利樹君？」

「残念ながらあの時は手札事故を起こしてしまっていたからモンス  
ターカードは一枚だけだったよ」

「それにしてもタウバーンは結構強い効果もってるよな。相手の元  
々の攻撃力が変化したら攻撃力アップに加えて戦闘での破壊耐性  
効果もちの2種族モンスターか・・・アンチノミーを思い出すな・・・」

「ブルウウウノオオオオオオ！！！」

「こら笑いのネタに使うんじゃない、彼らも必死にがんばっていた  
んだぞ」

「「ハイ」」

平等戦闘

畏カード

モンスターの攻撃宣言時、戦闘を行うモンスターの攻撃力がどちら  
か低い方の攻撃力を高い方の攻撃力を同じにする。

「相打ちするにはピッタリなカードだな」

「このカードは主に『世界の声』と一緒に使うことが多いカードだ  
ね」

世界の声

罨カード

自分フィールド上のモンスターが戦闘破壊された時発動できる。自分のデッキ・手札にある「奇跡の戦士 タウバーン」を特殊召喚する。

「颯爽登場！」

「なにが？」

「真面目にやれ遊介」

地獄の奴隷商人ニフナ

レベル4：闇：悪魔族

ATK 1700  
DEF 300

効果：1ターンに一度、自分の墓地に存在するモンスターカードを選択し、そのレベル×100ポイント支払うことで表側守備表示で特殊召喚できる。ただし、特殊召喚したモンスターの表示形式を変更することはできず、アドバンス召喚の為のリリースにできず、シンクロ召喚の素材にも使用できない。

「記念すべきEX最初のオリカモンスターです！」

「このカードは自分ターンにモンスターの蘇生を行えるモンスターで活用法はいくつもあるな」

「例えばエクシーズ召喚の素材集めや特殊召喚条件を持つモンスターのリリース要員集めとか（おもにラビエル）しかも攻撃力が1700と高めで結構役に立つカードだね」

地獄の番犬オルトロス

レベル4：闇：獣族

ATK 1800  
DEF 300

効果；相手モンスターが自分モンスターに攻撃対象にした時、その攻撃対象をこのカードに変更する。

「本編では効果は使用されなかったモンスターだな」

「一応『絶対服従魔人』の戦闘破壊を阻止するために召喚したらしいが結局、罨カードで攻撃自体を出来なくさせたから意味がなかったな」

混沌なる儀式

儀式魔法

自分フィールド上に存在するレベル10の闇属性・悪魔族モンスターとレベル1の光属性・天使族をリリースして「混沌の帝 ベルフェウス」を特殊召喚する。この効果で特殊召喚に成功したモンス

ターこのカードが墓地に存在する限り、カード効果を受けない。

混沌の帝 ベルフエレウス

レベル10：光：悪魔族

ATK 3200

DEF 3000

効果：このカードは通常召喚できない。「混沌なる儀式」の効果のみで降臨。1ターンに一度相手フィールド上のモンスターを全て破壊する。

「『サンダーボルト』の効果の内蔵した儀式モンスターか・・・」

「正直こいつはあぶなかったな。『混沌なる儀式』が墓地にある限り効果破壊できないし、上級モンスターの召喚のためのモンスターを揃えようとしても次のターンフィールドを一掃されちまうしホント危なかったぜ」

「でも勝てたのは主人公補正のおかげだよな」

「まあこの小説の主人公は俺だからな」

「そうか・・・よし次いくぞ」

「いくぞ、いくぞ〜！」

「えっ、スルーですか！？ねえ！ちよつとお！！！」



レベル9：闇・恐竜族

ATK 4000

DEF 4000

効果：このカードは特殊召喚できない。自分フィールド上にセットされたカードを全て墓地に送り、相手の発動した魔法・罠効果モンスターの効果が無効にする。その後、相手ライフを100ポイントにする。

「でたなチートモンスター・・・」

「セットカード全部捨てると相手のライフを100にするの・・・よくこんなの使う相手に勝てたね・・・」

「まああの時『残留思念』を伏せておいてたおかげで助かったからな・・・これもあぶなかった・・・」

「遊介の戦う相手はいつもこんなチートみたいな効果をもってるモンスターを操ってる人ばかりだな」

「それが相手じゃないとストーリーがすすまねえーだろ」

墮落

罠カード

フィールド上の「炎獄魔人ヘル・バーナー」をリリースしてデッキ・

手札・墓地から「墮獄魔神デス・バーナー」を特殊召喚する。

墮獄魔神だごくまじんデス・バーナー

レベル8：炎：悪魔族

ATK 3000  
DEF 2800

このカードは通常召喚できない。「墮落」の効果のみで特殊召喚できる。このカードの攻撃力は相手フィールド上のモンスターの数×1000ポイントアップする、また、自分フィールド上にモンスターが存在する場合、自分フィールド上のモンスターを1体リリースすることで相手モンスターの攻撃力をリリースしたモンスターの元々の攻撃力分ダウンさせる。このカードがフィールドに存在する限り、相手モンスターは可能ならば攻撃しなければならない。

「これはトシ君が戦った時に相手が使ったモンスター？」

「その通りだ」

「相手が利樹じゃあどんなチート効果持ちのカード使っても勝てるはずねえーけど・・・」

「そんなことはないさ」

「笑いながらそんなこと言っても無理あるぞ」

「さてこれで全部だな」

「次回は第五話『ミスアカデミアコンテスト！後編』お楽しみにね  
！私も初登場！」

「ねえ！二人して無視しないでそして終わるな！！！」

**番外編 1 オリカ紹介後編（後書き）**

いかがだったでしょうか？

知らないキャラが出てたって？

さて今回はカオスな回の続き第五話です。  
お楽しみに！

感想お待ちしております

#### 第4話 ミスアカデミアコンテスト！（前書き）

今回の話は1度掲載した4話を消して後編だったものと合体しただけのものです

増えたページ数は3ページ・・・なぜあの時、前編と後編に分けてまいったんだ！！

ちなみに、後書きは掲載してあった第4話と変わりませんので無視してもいいです

## 第4話 ミスアカデミアコンテスト！

2週間という時間はあっという間に過ぎていった

く利樹様の会々

「ついにこの日が来ました・・・」

場に緊張の空気が漂う

そして、カール巻きのシャルルは高らかに宣言した

「私たちの中から誰が一番美しいかを決める日が！！」

その言葉をきっかけに集まっていた女子生徒たちが一斉にワァッ！と騒ぎ出す

「さらに、今日は利樹様の会主催の利樹様争奪大会も開かれますわ  
！」

さらに、活気づく利樹様の会の女子生徒たちだった

くデュエルアカデミア

体育館々

『ついにこの日が来ました！！』

いくつものデュエルフィールドが描かれた会場にマイクを片手に

握った男子生徒がテンション高く叫ぶ

『第54回！ミスデュエルアカデミアコンテスト！！ここに開幕だあ〜！！』

その声に合わせて体育館内の階段状の席に座っていたほぼ全員の生徒がワー！！と大きく叫ぶ

そんなテンションの高い生徒たちの中、つまらなそうにする一人の男子生徒がいた

「わかんねえ・・・」

その声を洩らすのは炎城遊介えんじょううすけだった

「なんでこんなことに時間を割かなきゃ〜なんねえんだよ・・・」

いつもならこの時間はカードショップで掘り出し物のカードを探しているはずなのだが、今日に限っては生徒全員参加のこのイベントだと言われ運営委員会に両腕捕まれここまで引きずられて来たのである

「は〜」

盛り上がっている体育館の中一人溜息を吐く遊介だった

『では、この2週間の間に行った第一次予選の結果からいきたいと思います』

司会者はそう言って上着ポケットに入っていた紙を取り出す

『え、これから呼ばれます、女子生徒は第一次予選を通過した生徒たちです』

その後、次々に第一予選を通過した人たちの名前が言われていった

『・・・ではこれで第一予選を通過した人の発表を終わります。ではこの後、予選通過の皆様は体操服に着替えてきてください』

何で着替える必要があるんだ？と思う遊介だが、面倒だから言つのを止めた

（女子更衣室）

「やったね！迷些！！」

周りが着替え始めている中で前田ネネは喜びに満ちた表情でこれから着替えようとしている親友の黒崎迷些に言った

「そうだね」

つまらなそうに返す迷些

「迷些、いくら人前に出るのが嫌でももっとやる気だしていこうよ」

「人前に出るのは嫌じゃないけど、ただこつという行事はあまり好きじゃないだけだよ」

そう言って着替え始めた



（体育館）

『では、第二次予選の開幕です！！』

その声に合わせて第一次予選を通過した女子生徒たちが会場に登場する

みなそれぞれの表情を浮かべていた

『それでは第二次予選を行ないたいと思います』

司会者が第二次予選で行なう競技を説明する

『まず最初にこの会場に用意された障害物を攻略する。可愛いからって甘く見ないで！走り抜ける！障害物リレー』、次に学園長と教頭先生が審判を務める『手作り！美女で美味な料理対決！』、そして最後に『美しいだけじゃあダメ！常識クイズ！！』の3つで進めていきたいと思えます。さらに、これらの競技には脱落もありますのでがんばってください！』

何だこのネーミング・・・と思う遊介だった

そして、ふと思うのだった

「あれ？利樹どこいった？」

この会場に遊介の親友の姿がないことに気付いたのはこの時だった

『制限時間は30分ですそれでにゴールできなければ失格になるの

でがんばってください！それでは選手の皆様位置について……よーい・ドンー！』

司会者の一声により走り出す女子生徒たち  
私もその中に紛れて走る

みんな無言で走るが、その中で異様に目立つ生徒がいた

「オーホッホッホッホー！遅いですわよ皆様！」

先頭にいるシャルル先輩が叫ぶ

「そんなに声出しているとすぐにはてるよー！」

その後ろの集団からネネの声が聞こえる

どうやら余裕そうな声を出しているシャルル先輩に苛立っていたのだらうと私は思った

そして、進む方向を示した看板通りに走り、体育館を出る

〈デュエルアカデミア

グラウンド〉

場所は変わりグラウンドになった

そこには数々の障害物らしきものが待ち構えていた

「む、あれが障害物リレーの障害物ですわね」

目の前にあるのは平均台、その隣には平均台を渡るにあたってと書かれた看板があった

〈体育館〉

俺は今体育館でテンションの高すぎる司会と実況を務めている生徒の熱いシャウトを軽く聞き流しながらグラウンドを走る女子生徒の様子を見ていた

『おお〜つと！最初の障害物、平均台だあ！！』

なぜ平均台をシャウトすると思う遊介だった

くグラウンドく

体育館からグラウンドに入る場所には平均台が数十台も並べてあったそこに私たちは我先にと空いている平均台を見つけてはそこを渡っているが

「やあ！」

「えっ！？」

先に行かせまいと平均台を渡っている生徒たちを横から押して平均台からわざと落とし先に進もうとするが、その後ろの子も渡ろうとする生徒を横に押して落とすという一生終わらないようなことばかりしていた

ちなみに私は4回落ちている

「あつ、落ち……る……！くつ、覚えていなさい！！」

隣の台にはシャルル先輩が渡っているところで横から押されて落ちたらしく、その押した子に怒りの念を込めた言葉を叫んでいた

「やつ、やつと着いたああ」

その声を聞いて後ろを振り返るとスタート直後から列の最後尾に追いやられたはずのネネがいた

「くううう覚えてるよーあのデカ乳女あ!!!」

どうやら何かの妨害にあっていたらしく遅れたのだろう

「ん？迷些、どうしたの？」

「なんでもないよ」

(そんなことを考えていても仕方がない速くこの平均台を渡っていかなくちゃ)

次から落とされないようにどうするか考え始める私

「あつ、平均台だ。久しぶりだな」

呑気なことを言っているネネ

だが、迷些はその言葉に何か引つ掛かった

(ネネに・・・平均台・・・?)

「迷些！次行かないなら私行くよ！」

もう順番がきたらしいが考え事をしていた私  
すると、ネネは私の横を通っていった

そして、そこで思い出した

ネネは昔、新体操で平均台を使った技をやっていたことに

「よつと・・・まだまだ鈍ってないねえ」

ネネは綺麗に平均台の上で側転をする

「なつ、なんですかのあれは!？」

オリンピックの選手顔負けの技で一瞬にして平均台の障害物を渡っていったネネ

その光景を目の当たりにした生徒たちは固まっている

「・・・」

その際に平均台を渡っていった私だった

〈体育館〉

『すごいぞおー!!ネネ選手!見事な技で華麗に平均台を渡っていったあー!!』

そんなテンションの高いシャウトを聞き流しながら次の障害物は何か利樹に調整してもらった生徒手帳で確認する

「次は・・・パン食いか・・・つか、なんで障害物にパン食い?」

〈グラウンド〉

我に戻り始めた生徒たちが次々に平均台を渡り始め、私の後を追う様に来る

しかし、私とネネの差はそう速くは埋まらず、私たちは新しい障害物に当たった

私の目の前には棒に吊るされたドローパーンがあった

「ドローパーンを手を使わずに取れか・・・よっ、・・・とお」

私はちよつとジャンプしてパンを口に銜える

そして、後ろを振り向くと、

「このお！このお！」

パンを必死に銜えようとジャンプをするが取れないネネの姿があった・・・

というか一応触れているのだが糸が切れないでいる

「なによ！この糸丈夫過ぎよ！」

再びジャンプしては取れないという繰り返しが続き私は「ネネごめん」と言っつて先を急いだ

走りながらパンを食べていると口の中に硬いものの感触がした

私はそれを確かめるとカードだった

「『覚醒戦士クーパーリン』？」

レベル4の儀式モンスターだ

何でこのカード？と思いつながら走っていくと私の隣をものすごい速さで何かが駆け抜けた

「オーホッホッホッホー、お先に行かせてもらいますわ!!」

さっきまで平均台で妨害に会っていたシャルル先輩が走っていく手にはカードがあった

〈体育館〉

『シャルルリサーナさんの怒涛の追いあげだあ!!』

何か考えるのが面倒くさくなってきた俺はしばらく寝ることにした

〈グラウンド〉

今現在の順位は1位にシャルル先輩、2位に私、3位には2年生と  
思われる女子生徒がいた

今私たちがいる場所はグラウンド校舎近くだった

そこには数人の男子生徒がいた

順序ではあそこを通るはずなんだけど・・・

「ここは一体何の為に設けられた場所ですか？」

シャルル先輩がそう男子生徒に聴く

「ここは障害物リレーの最後の障害、借り物競争の借りるものを決める場所です」

何で障害物リレーに借り物競争という別の競技を混ぜるかを放っておいて説明を聞く

「先ほどドロopan食いをして出てきたカードを見せてください」

その説明を聞いてシャルル先輩、私、2年生らしい生徒がカードを出す

「『FGD』に『フマキ覚醒戦士クーフリーン』、そして、『ザクリエーター』ですか……」

すると、その男子生徒は 1、2、 4、 8と書かれた箱を机に置いた

「自分が引いたカードのレベルの箱から一つお題が書かれた紙が入ったカプセルと出してください」

私たちはそれぞれの箱からカプセルを一つ取り出す

「その中に書いてあるお題を持って体育館のゴールラインを通過すればこの競技はクリアしたことになりますのでがんばってください」

私はカプセルを開けた。中には説明された通り紙が1枚入っていたそれを見ると私はすぐにある場所へと向かって言った

（体育館）

俺はさっきまでの間、寝ていたのだが委員に見つかってしまい起こされてしまった

再び寝ようにも目が覚めてしまい眠れない



「抜け出すか」

そう思った瞬間

体育館2階横の扉が思いっきり開いた

何事だ！？と周りの男子生徒たちが叫び立ち上がる

俺もそつちの方を向くと見覚えのある顔つきの女子生徒が現れた

「遊介君！ちよつと来て！」

「！迷些！？わっ、ちよ、襟掴んで引きずるな！！自分で歩くから  
！！！」

訳の分からないまま連れて行かれた俺だった

『ゴオ〜〜ルウ！！』

そんなテンションの高い叫びと共に私と遊介君はゴールテープを切った

『最初のゴールを決めたのは黒崎迷些選手！彼女に盛大な拍手を！』

ワー！！

「迷些・・・そろそろなんで俺を連れてきたか教えてくれないか？」

「あっ、うん・・・これなんだけど」

私は一枚の紙を遊介君に渡す

「『隠れイケメン』・・・」

そうそれが私のお題だった

「これって喜んでいいのか？それとも涙を流して泣いたほうがいいのか？」

「喜んでいいんじゃないのか？遊介」

すると、私の後ろから利樹様が現れた  
ボツと顔が一気に赤く熱くなる私

「おい利樹今までドコにいたんだ」

「ああ、食堂のテラスで本を読んでいたら委員会の生徒たちが僕の腕を掴んでここまで連れてきたんだ」

「食堂テラスか・・・くそっ、俺もそこにいりゃあよかった・・・  
てか、なんで食堂よりカードショップが先に委員会がくるんだ！普通逆だろ！？」

「遊介・・・ここはデュエルアカデミアだぞ？生徒の大半はデュエル好きで出来ているんだ、なら委員会はそっちを捕まえに行くだろ」

「そんな曖昧な理由で大丈夫なのかこの学校・・・」

「大丈夫だ。問題ないだろう」

そんなことを言いながら席のある2階に向かおうとする利樹様

「なあ迷些、俺も戻っていいか？」

そんなことを聞いてくる遊介君

「うん大丈夫だよ」

「そっかわかったぜ」

そう言つて走つて利樹様の後を追つていった

数十分後

『そこまでです！』

ピーというブザー音と共に最初の競技が終わつた

『それではここまでの第一競技突破者は1位黒崎迷些選手！2位シヤルリリサーナ選手3位長江紅葉選手もみじとその他27名の合計30名が第一競技突破者です！では次の競技に移りたいと思いますので準備の間休憩を挟みたいと思います。ちなみに、女子生徒の皆様は体操服から着替えておいてください』

こうして波乱(?)の第1競技が終わつた

〈体育館〉

『それでは第2競技を行いたいと思います！』

そんな司会者の周りには調理器具や食材がいくつも並べられていた  
そして、いくつもある調理台の1つに迷些はいた

〈体育館2階 観覧席〉

「しくしくしくしくしく」 ネネ

「やっと始まるな・・・」 遊介

「そうだな」 利樹

「まさか・・・パン食いの場所で失格になるなんて・・・」 パ  
ン食いでパンを取れなかったおかげで失格になったネネ

「なあ利樹この台詞の後に付くってなに？」 メタ発言する遊介

「さあな」

そう言っている利樹の手の中にはへし折れた があった

「・・・いつまでこの手抜き感が続くんだ・・・」

そんな力のない遊介の声が活気あふれた会場の声に消えていった

〈体育館1階〉

『ルールは簡単！制限時間内に各々の持てる最大限の料理術を駆使  
し、学園長と教頭の二人を美味しいと言わせれば合格です！では、ス

「タアアアトオオオ!!」

司会者の声に合わせゴングのような音が鳴る  
そして、一斉に料理を開始する女子生徒一同

彼女たちの燃える目の中には優勝の2文字ありはしかなかった

〈体育館2階 観覧席〉

「そついや迷些つて料理できたのか？」

ふと疑問に思った俺は泣き止んだネネに聞いた

「まあそこそこかな」

「へえ、食べてみたいな」

そんな雑談をしながら彼女たちを見守っていた

〈空港〉

黄色のショートカットの16歳ぐらいの少女は空港の出入り口から  
街に入った

「10年ぶりか」

重そうな荷物を地面に置き、長い時間曲げていた背中を伸ばす

「ん〜ん、10年の間でこの町も変わったな〜」

街には道路を走るD・ホイールやセキュリティではなくなり警察と

なった人たちが市内をパトロールしていたりする光景が目の前に広がっていた

「ただいま、ネオドミノシティ・・・」

そう言って再び重そうな荷物を持ち、近くのタクシーに乗り込んだ

「お嬢ちゃん、どこに行くんだい」

「ネオドミノシティの昔サテライトって呼ばれてた場所にあるデユエルアカデミアまでお願い」

「ハイよ」

走り出したタクシーはネオダイダロスブリッジを通り旧サテライト地区に向かって行った

（体育館）

『そこまで！！』

ゴングの音と共に料理対決が終了した

『ではこれより完成した料理を学園長と教頭のお二方に食べていただきます。では、最初の競技で1位通過の黒崎迷些さん料理を持ってきてください』

簡易的に作られたテーブルの椅子に二人の男性が座っていた  
教頭と学園長だ

「楽しみですね〜」

「どんな料理が出てくるんだ？」

期待の眼差しで私の料理の入った皿の蓋を開ける

「ほう、親子丼ですか」

「おいしそうですね」

ムシャムシャモグモグ

「タレが効いてますね」

「美味しいです」

二人とも笑みを浮かべながら言った

『迷世選手好印象です！！では続いてシャルル選手！』

「私の料理はこれですわ！！」  
わたくし

料理の蓋を開けると

「また親子丼ですか・・・」

「偶然ですね〜」

ムシャムシャモグモグ

「肉が柔らかくていいですね」

「これもまた美味しいです」

『これの親子丼も好印象です!』

「当然ですわ!」

『では続きまして長江紅葉選手ながえ もみじお願いします!』

「・・・はい」

ポニーテールの物静かな女子生徒が料理を運び料理の蓋を開けた

「・・・またですか・・・」

「・・・」

皿の上には親子丼がのっていた

『え〜と・・・一応ですが1位から3位までの方々になぜこの料理を作ったか理由を教えてくださいませんか?』

その言葉に3人は顔を見合わせて言った

「」「学園長が貧弱そうだからです」「」

バダン!!

「学園長!?!」



「・・・私が貧弱?・・・」

その言葉を最後に意識を失った学園長だった

『・・・え〜つと・・・第3競技にそのまま移りたいと思います』

こうして誰も脱落者のいないまま第3競技へとコマを進める一同だった

しかし、会場の人たちはみなこの展開に追いつくことができなかった

十分後

体育館に何十台にも及ぶテーブルとイスが用意され、そこに第2競技を潜り抜けてきた(?)生徒たちが座っていた

『ではこれよりミスアカデミアコンテスト最終競技!』美しいだけじゃあダメ!常識クイズ!』

オオー!!!!

会場が再び活気溢れる

「これでやつと最後か・・・」

そう思うと疲れが一気にドツとくる感じがした遊介だったがネネの目は違った

「これが終われがアレを決める大会が開かれる・・・必ず勝つ!」

と言ってデッキの調整を شدした

『ええ〜ではルール説明をさせていただきます。ルールはサドンデス方式！一問間違えますとそこで失格、最終的に一人になった時点で第54代ミスアカデミアとなります！』

オオー！！

『では参りたいと思います！第1問！調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量の軽いのでマグネシウムに選んだのだが、調理を始めるのと問題が発生した。さて、その問題とは一体なんでしょう！』

一斉に配られていたフリップに答えを書き出す一同

そして、10分もしないうちに答えが上がる

そして、回答を確認する司会者、そして、マイクを持ち言う

『第1問目の正解者は30人中24人です！』

すると、不正解者の人は委員会の人たちが肩を叩いて退場させていた

『では続きまして第2問！日本にキリスト教が伝来した年は？』

再びフリップに答えを書き出す一同

そして、答えを見せ司会者がそれを見るその繰り返しが続いた

『では第19問目の正解者は10人中3人です』

10問目で一気に一桁に絞られた

『残るは上位3人！黒崎迷些さんとシャルルリサーナさん、長江紅

葉さんです!』

オオー!!!

大会のクライマックスにつれ、さらに活気付く会場

『では第20問目!硫酸銅五水和物を塩化バリウム水溶液にくわえて加熱すると、何が生成されるか答えなさい!但し、硫酸銅五和水物と塩化バリウム水溶液は全て反応したものとします!』

少し考えたのち一斉に答えを書き始める3人

そして、自信ありげな顔でフリップをバン!と置く

『硫酸バリウム・塩化銅・水』 迷些

『硫酸バリウム・塩化銅・水』 シャルル

『デミグラスソース』 紅葉

「.....」

.....

『.....えっ?』

場がしばらく沈黙に包まれていた

そんな観客のとある席に座っていた背の高い男子生徒が呆れ顔で珍回答な答えを書いた幼馴染みを見ていた

「紅葉.....」

『え〜と.....紅葉選手以外は正解です』

「なっ、・・・!?」

なぜか衝撃を受け、そのままの状態で白くなる紅葉だった

『では、・・・気を取り直して第21問目!』

大会を進行する司会者だが、その後ろからスタッフもとい委員会の係が後ろから小さい声で司会者に何かを言っていた

『え〜と・・・本当に申し訳ないんですけど問題数が20問までしか用意してないらしくこれ以上のクイズの継続はできませんのでどうしたらいいのでしょうか・・・』

緊急事態に弱い司会者が観客席の生徒たちに聴くが会場も黙ってしまふのだった

バン!!

何かを叩く音が会場に響く

そして、シャルルリサーナが立ち上がり司会者のマイクを奪い生徒全員に提案をした

『最後の決着はデュエルで決めましょう!』

「はい?」

隣にいた司会者は訳が分からないと言う顔でいるが、会場はちがったワァー!!!と再び活気に満ち溢れる

「おっ、デュエルか!おもしろそうだな!」

さっきまで帰りたと言っていた遊介は顔がキラキラ輝きだす  
そして、当の本人も

（シャルル先輩とデュエルか・・・おもしろい！）

マイクを司会者に渡すシャルルは迷些の視線を感じ睨み返した  
お互いに負けるつもりはないという感じだ

『ええ〜と、満場一致のようですねので最終競技は黒崎迷些選手と  
シャルルリサーナ選手によるデュエルで今回のミスデュエルアカデ  
ミアを決定したいと思います！』

こうして先輩と後輩によるNo.1の座を賭けた決闘デュエルが始まるので  
あった

#### 第4話 ミスアカデミアコンテスト！（後書き）

いかがだったでしょう？

今回はデュエルシーンがないということで詰まりました・・・

いろいろな場所でおかしい展開ばかりになってカオスな回になってしまいました  
すいません

次はちゃんとがんばりたいのですがデュエルが入らないと調子が狂ってしまうので次回もカオスな回になるかもしれません  
すみません

感想待ってます

オリカのカードも募集します

君の考えたカードがロストシリーズのカードになるかも！？

## 第5話 迷些vsシャルル(前書き)

だいぶ更新が遅れましたすいません！

途中おかしな展開になってるかもしれないですが、また目を瞑って  
ください・・・

## 第5話 迷些vsシャルル

〈デュエルアカデミア

公式大会用ホール〉

会場には生徒全員が座っていた

そして、ホールのステージに立っているのは1年生の中でも2、3を争うデュエルタクティクスの黒崎迷些と2年生の学年主席シャルルがいた

お互いに用意されたデュエルディスクを構え展開する

そして、・・・

「『決闘！』！』」  
「『デュエル

そのかけ声と共に会場がワー！と騒ぎ出す

「私のターンですわ！ドロー！自分フィールド上にモンスターが存在しないときこのモンスターは特殊召喚できる！おいでなさい！』  
『薔薇の歌姫』！』」

すると、美しい歌と共にドレスを着た女性型モンスターが現れた

ATK 1400  
DEF 1000

「『薔薇の歌姫』の効果発動！召喚時、デッキ・手札より植物族モンスターを1枚墓地に送りますわ」

デッキから1枚のカードが選出される



「私の選ぶカードは『凜天使クイーン・オブ・ローズ』！」

そう宣言し墓地にカードを1枚送る

「カードを二枚伏せターンエンド！」

「私のターン、ドロー！」

「そういえば迷些ってどんなデッキ使った？」

会場でデュエルを見る遊介はネネに聴いた

「見てのお楽しみだよ」

「ふん」

（攻撃力の低い『薔薇の歌姫』を攻撃表示ということは伏せカードには罠が張ってあるのか・・・）

「なら・・・私は手札から『氷ノ鷹』を墓地に送り効果発動！このターン相手は魔法・罠を発動することはできなくなる！」

カードを墓地に送ると半透明な鳥が現れ、風を起こすと、伏せられたカードが凍り付いていった

「・・・っ！」

苦虫を噛むんだ様な顔をして迷些を睨むが迷些はその目を見なかった。単純に怖かったから

「私は『氷ノ騎士』を召喚！」

氷でできた大きな盾に大きなスピアを持った氷の騎士が現れる

ATK 1700

DEF 800

「行け！『氷ノ騎士』で『薔薇の歌姫』に攻撃！」

氷ノ騎士がフィールドを滑り相手モンスターに攻撃を仕掛ける

「グッ！」

LP4000 3700

「カードを1枚伏せてターンエンド」

「私のターンですわ！ドロー！この瞬間、墓地の『薔薇の歌姫』の効果発動！墓地のこのカードをゲームから除外することでこのカードの効果によつて墓地に送ったカードを手札に加えますわ！」

「なっ！？まさか、リバースカードはブラフ！？」

「あら今更気付きましたの？」

迷些の思考を読んでいたような言い草だった

「まあ、私としてはブラフを張った覚えはありませんがね……リバースカードオープン！『即時成長』！」

種からテイタニアルに急速に成長するイラストの罫カードが発動する

「このカードは効果によって墓地から手札に植物族モンスターが手札に加わった時発動。手札に加えたモンスターを特殊召喚！さあ、天界よりおいでなさい！」凛天使クイーン・オブ・ローズりんてんし！」

天井から光が大量に降り注ぎ、その中からドレスのような物を着た薔薇の花で出来た羽に仮面を付けたの女性型モンスターが現れる

ATK 2400  
DEF 1300

「さあバトルですわ！『凛天使クイーン・オブ・ローズ』で『氷ノ騎士』に攻撃ですわ！」

薔薇の羽を大きく広げ飛びだし、氷ノ騎士目掛けて剣を振り下ろしながら降下する

すると、氷ノ騎士は真つ二つに綺麗に分かれ、粉々になりその破片が迷些を襲う

「キヤアア！！」  
LP4000 3200

「すごい・・・」

会場の観客席でデュエルを見守るネネは呟いた

「まさに一進一退の攻防だな」

利樹もそのデュエルを見て呟いていた

「私はこれでターンを終了しますわ」

攻撃を終了したクイーン・オブ・ローズは場に戻りシャルルの隣に立つ

「私のターン！」

(引いたカードは『氷ノ結界師』！これなら・・・)

「私は『氷ノ結界師』を守備表示で召喚！」

氷で出来た杖を片手に持った顔を目だけ見えるように隠した術師が現れる

ATK 1200

DEF 2000

「フツ、そんなモンスターで時間稼ぎをしようとしても無駄ですわ。私の『凜天使クイーン・オブ・ローズ』には自分のターンのスタンバイフェイズ時に攻撃力の最も低いモンスターを排除する効果を持っていますのよ」

オーホツホツホツホと高笑いするシャルルに迷些はフツと笑うすると、その余裕な感じが癪に障り笑いが止まる

「何か隠し玉でもありますか？」

「その通り！『氷ノ結界師』にはカード効果によっては破壊されない効果が備わっている！これで『クイーン・オブ・ローズ』の効果

で破壊されない！ターン終了！」

（これならたとえどんなモンスターを召喚してもこの伏せカードと壁モンスターがある限り、次のターンでライフが0になることはない！）

「わたくし私のターン、ドロー」

ドローカードを手札に加えるとシャルルは溜息を吐いて迷些を言う

「その程度でまだ大丈夫と思うならばその驕りを敗北という屈辱によって消し去ってあげますわ。私は<sup>あわたくし</sup>『パーフェクトコピープラント』を召喚！」

植物の根っこのようなものを体にしたモンスターが現れる

ATK 0  
DEF 0

「『パーフェクトコピープラント』効果発動！1ターンに一度、フィールドの植物族モンスターをコピーする！」

そう宣言するとパーフェクトコピープラントは体を捻ったり、伸ばしたりし姿がクイーン・オブ・ローズと瓜二つになる

「これで準備完了ですわ……」

2体のモンスターが剣を構える

「では……イきますわよ！バトル！」『パーフェクトコピープラン

ト』で『氷ノ結界師』に攻撃！」

クイーン・オブ・ローズの姿のパーフェクトコピープラントが氷ノ結界師に襲い掛かる

結界師は杖から出る冷気で防御するがそれをもろともしないパーフェクトコピープラントは持っていた剣で横一閃、結界師は上下二つに切り裂かれ消滅

「まずは壁モンスターを撃破」

人差し指を立ててわざわざ迷些に言う

「・・・」

しかし、迷些は一言も喋らない

周りからはもう諦めてしまったのかと思い始めていたが、彼女はただそうではなかった

（あれはまだ勝機があると信じている目ですわね・・・つまり、あの伏せカードに何らかの罠のはず・・・しかし、甘いですわ）

「『凜<sup>りん</sup>天使クイーン・オブ・ローズ』で攻撃！薔薇<sup>ローズトリマー</sup>剪定斬！！」

薔薇の翼を大きく広げ剣を振りかぶる

「リバースカードオープン！『凍結<sup>とうけつふうせき</sup>封札』」

コールドエンテーターによって足を凍らされたモンスターのイラストが表側になる

「自分フィールド上の水属性モンスターが破壊されたターン、相手フィールドのモンスター一体を選択しこのカードを装備！装備されたモンスターの攻撃力は1000ポイントダウンし、攻撃も行えず、私のターンが来るごとに相手に500ポイントダメージを与える」

足から順に凍り付くクイーン・オブ・ローズ

(よし！これで凄い・・・)

そう思った瞬間、迷些の胸に剣が突き刺さる

「!?!」

一瞬そのことに意識がついていけなかった  
そして、ようやく意識が今起こっていることをようやく理解し始めた時、胸に刺さった剣は私の胸を斜めに切り裂く

「うう・・・」

LP3200 800

攻撃はソリッドビジョンなので痛みはないはずだが実際にやられると痛みのようなものを感じる

(それよりもなぜ動きを封じたはずのクイーン・オブ・ローズが私を攻撃をしてきたのがわからない)

「なぜ・・・クイーン・オブ・ローズが・・・?」

するとシャルルは得意げに口を開く

「貴女が封じたクイーン・オブ・ローズは本当にクイーン・オブ・ローズですか？」

えっ？とシャルルのフィールドをよくもう一度見る

体を氷付けにされたクイーン・オブ・ローズと迷些に攻撃したクイーン・オブ・ローズ

すると、ある事に気付く

「まさか・・・『凍結封札』を受けたクイーン・オブ・ローズは・・・」

「そのとおり、『パーフェクトコピープラント』ですわ」

すると、氷付けのクイーン・オブ・ローズの体が徐々に崩れ、数秒後には木の根っこが体のようなモンスターに変わる

「『パーフェクトコピープラント』の効果。このカードの効果の対象にしたモンスターがカード効果の対象にされた時、その対象をこのカードに入れ替えることができる」

（まさか、・・・私のリバーズカードまで計算して『パーフェクトコピープラント』を・・・！）

「私のメインフェイズ2。『凍結封札』・・・貴女ターンがくる度に私のライフを削っていくカードですか・・・はっきり言って邪魔ですわね」

既に決着は着いたと言わんばかりの余裕の声が聞こえる

「あら偶然いいカードを持っていましたわ」



すると、魔法カードが発動し、パーフェクトコピープラントは破壊される

「『フレグランスストーム』。カードの説明はしなくてもよろしくて?」

そう聴くが迷些は顔を俯かせ無言のままだった

「ドロー。わたくし私の引いたカードはモンスター『薔薇の妖精』ですわ。  
『フレグランスストーム』の効果でさらにドローし、『薔薇の妖精』の効果により自身を特殊召喚」

全身がピンクで頭に薔薇の花を咲かせたモンスターが現れる

ATK 600  
DEF 1200

「カードをさらに3枚伏せてターンエンドですわ」

完全に窮地に立たされた迷些  
次のカードを引く力も入らない

(完敗だ・・・先輩は・・・強い・・・!)

迷些は昔からデュエルで右にでる者はいないぐらい強く、そして、自分でもそう思っていたがたシャルル先輩や遊介君、利樹様のような自分以上に強い相手が世界中にまだたくさんいることを今更ながら痛感する

（バカみたい・・・心の底では自分も利樹様と肩を並べるぐらい強いと思うなんて・・・実力が1年生の中では上位だったかもしれない・・・だけど、遊介君や利樹様のレベルはもっと上、井の中の蛙の私よりもずっと強い・・・）

もう終わりにしよう・・・勝てはしない、もう誰にも・・・

デュエルディスクを群れより下辺りに構えデッキに右手を被せようとす

サレンダー（降参）

彼女は自らが敗北の道を選ぼうとした時

「迷些！！」

会場の観客席からネネの声が聞こえる

「・・・！」

その声のする方を向くと

「負けんじゃないわよ！！あんなそれでも決闘者デュエリストなの！」

迷些は無言のまま親友の声を聞く

「あんな程度で心折らすな！迷些！！！」

「・・・ネネ・・・」

小学校の頃から一緒だった私達

引っ込みじあいだった私に唯一接してくれてデュエルでいくら負かそうとしても私の傍から離れようとせず、ただ好きな子の話とか本当の友達だからできる話とかいろいろしてくれた私にとってかけがえのない親友が今まさに友人を励ますべく恥ずかしさを惜しまず叫び続ける

「そろそろ言っちゃったらどうだ利樹？」

観客席でネネの利樹、遊介の三人で座る場所で、迷些のためにエールを送り続けるネネの隣で二人は話をしていた

「僕より遊介がいいんじゃないのかこういうことは柄じゃないんだ」

「言ってる場合かよ。俺たちは迷些の友達なんだぜ？」

「・・・フツ、しょうがないな、友達のために」

「ああ、友達のためにだ」

そう言っつて利樹は席から立ち上がり大きな声で

「あきらめるな！迷些！！」

凜とした声で迷些に叫ぶ

「利樹様・・・？」

「たとえ状況が絶望的でもカードを引くことを止めるな！信じ続けるんだ！自分のデッキを、自分のカードを、君の背中を見守り続ける友たちを！！」

「・・・」

ディスクにセットされたデッキと迷些を友達と認めてくれる人たちを見る迷些

「そんな利樹様が彼女のことを応援するだなんて」

いつ間にかハンカチを口にくわえ、涙を流すシャルル  
そんな彼女に向かい合うように立ち直し、デッキの上に指を置く

「・・・私の・・・」

（あきらめない・・・こんな私を友達と認めてくれた人たちのために・・・私は闘う！！）

「ターン！！」

勢いよくカードを引く迷些に驚くシャルル

（まさか、あの状況から立ち直るだなんて！さすが利樹様のお力！）

（ありがとう、みんな。私に力を貸してくれて私はこのデュエル必ず勝つ！！）

「私は『氷ノ彫刻家』を召喚！」

髭を生やした老人が現れる

ATK 500  
DEF 300

「『氷ノ彫刻家』の効果、ライフコスト500支払うことで『彫刻  
トークン』を特殊召喚！」

LP 800 300

フィールドに氷の柱がいきなり現れ、髭を生やした老人がそれに飛  
びつくように跳び、手に持っていた道具で一気にモンスターの形を  
模<sup>かたど</sup>る

ATK 0  
DEF 500

(この状況で2体の低レベルモンスター・・・クイーン・オブ・ロ  
ーズの効果と攻撃を防ぐ役割を持つ壁モンスター・・・いや、ちが  
う。あの顔はこの状況をひっくり返そうとする目・・・面白いです  
わ！これだからデュエルはやめられない！！)

「さらに、『<sup>デュアルサモン</sup>二重召喚』発動！このターン中、2度まで通常召喚を  
可能にする！」

迷些の場に渦を巻く穴が出現する

「そして、フィールドのモンスター2体をリリース！『氷ノ白姫』  
をアドバンス召喚！！」

渦を巻く穴が2体のモンスターの足元まで広がり、2体のモンスター

ーを取り込む

そして、渦の中から大きな氷の杖を持ち、頭に王冠らしき物をのせた純白のドレスを着た女性型モンスターが現れる

ATK 2800

DEF 2300

「『氷ノ白姫』の効果！このカードが召喚に成功した時、相手フィールド上のカードの発動及び効果の発動ができず、相手モンスターの攻撃力・守備力を500ポイントダウンする！『白夜氷結』！」

氷ノ女王が両手を大きく広げた瞬間、フィールド全体を吹雪が襲うすると、伏せカードとモンスター2体は凍りつく

凜天使クイーン・オブ・ローズ

ATK2400 1900

薔薇の妖精

ATK600 100

「さらに、『氷ノ白姫』の効果発動！私は『薔薇の妖精』を選択墓地から同レベルの『氷ノ彫刻家』をゲームから除外し、『薔薇の妖精』の表示形式を変更する！」

「なんですって!？」

その驚く叫びと共に薔薇の妖精は表示形式が守備表示から攻撃表示に替わる

「バトル!『氷ノ白姫』で『薔薇の妖精』に攻撃!聖なる零氷<sup>れいひょう</sup>!」

氷の白姫が薔薇の妖精に杖を向けると薔薇の妖精の体は瞬時に凍りつき粉々に砕ける

「くううう」

LP 3700 1000

「さらに、手札より速攻魔法発動！『連撃』！このカードは自分モンスターが戦闘によって相手モンスターを破壊した時、その戦闘をした自分のモンスターはもう一度攻撃することができる！」

「で、ですがまだ私のライフは残りますわ！」

「それも計算済み！墓地の『氷ノ結界師』の効果発動！自分フィールド上のモンスターが2回目の攻撃を行う場合、そのモンスターの攻撃力を300ポイントアップする！」

半透明の結界師が白姫の背後から呪術を唱える  
すると、杖の先端が変化し槍状に変わる

「行け！『氷ノ白姫』で攻撃！聖なる零氷斬れいひょうざん！！！」

クイーン・オブ・ローズに槍を突き刺す

そして、クイーン・オブ・ローズの体が凍りつき砕ける

「.....」

LP 1000 0

『ついに、.....決まったアアア！！第54回ミスアカデミアは1年生、黒崎迷些さんだああああ！！！！』

くデュエルアカデミア

体育館出入り口く

デュエルアカデミア全体の色は今、夕日の色に変わりその中に4人の男女がいた

「はあくまさが、利樹様の応援1つで大会は行つて必要ないとか言つて大会は中止になるだなんて」

ネネが残念そうな声を上げているがその顔にはなぜか笑顔が浮かんでいた

「まあこの後何があつたかは知らねえけど優勝おめでとう。迷些」

「ううん、みんなの声援のおかげだよ。あのままだったらあのデュエルどころかデュエルモンスターズさえ止めてたかもしれないから」

「そっか。じゃあ明日も早いし帰るとするか」

そう言つて遊介君は歩き出したが、その足はすぐに止まった

なぜなら、夕日の空でオレンジ色になった校舎の近くに金髪のショートカットでワンピースを着た女の子がいたからだ

普通なら通り越すはずなのに遊介君はそっちの方をずっと見ていた

「十二見惚れてるのく？遊く介く」



からかったつもりなのに、遊介君はその声を聞いていないらしく黙ったままだった  
そして

「輪子<sup>わこ</sup>か・・・？」

## 第5話 迷些vsシャルル(後書き)

今回の最強カード

氷ノ白姫

水属性：魔法使い族：レベル8

効果：このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、このカード以外のカードの効果の発動、効果の使用をこのターン無効にし、相手表側表示モンスターを500ポイントダウンする。相手フィールド上の表側表示モンスターを1体選択し、選択したモンスターと同じレベルの水属性モンスターを墓地から除外し、選択したモンスターの表示形式を変更する。

ATK 2800  
DEF 2300

今回どうだったでしょうか・・・  
自分としては久しぶりのデュエルパートではりきって書いていたんですけど、・・・詰まりましたね  
この話を書いている間もなぜか先の話の展開ばかり、考えついてしまつて・・・ページ数も少ないし、手抜き感も増大してるような感じで・・・次からがんばりたいと思います  
応援よろしくお願いします

感想もお待ちしております

**第6話 転校生は幼馴染み！（前書き）**

第6話です！

ついに、メインヒロインの登場です！

## 第6話 転校生は幼馴染み！

くデュエルアカデミア

1年生の教室く

大学の教室のように席が設置された教室の最新鋭のディスプレイの教卓の前で金髪のショートカットで美少女という言葉がぴったり合うような女子生徒がいた

「桜井輪子です。よろしくお願ひします」

クラスの男子がオオくと騒ぐ

「桜井さんは久しぶりにイギリスから日本に帰国したので何かと分からないことがあるかもしれませんが、みさなさんで協力してくださいね。じゃあ席は空いてる席にでも・・・」

ある程度の紹介を終えると桜井輪子の座る席を決めようとする。すると、

「くくくくくよろしくお願ひします！！！！」

いきなり教室の二人以外の男子が立ち上がり叫んだ

「・・・えくと、どうしますか？桜井さん」

面倒なことになったと思い、決定権を桜井に譲る  
うとくと考える輪子は全ての席を見回し

「これって2人座ってる席の空いている場所に座っても大丈夫ですか？」

「大丈夫ですよ」

じゃあと云つてある席を指さし「じゃああそこで」と云つ

そして、男たちの視線はその指の先の席に注がれる

そこには、学園の中で一番美貌を持つ美少年・上条利樹の席を指していた

「……」またお前か！！」「」「」

男子全員の嘆きが教室内でこだまするのであった

「じゃあみなさん席に着いたところで今日の予定の話をしたいと思  
います」

そうして担任の先生が話を進めていると輪子は隣に座っている遊介  
に話しかけた

「10年ぶりだね、遊介」

ニツコリ顔で遊介に云つがつまらなそうにする返す遊介

「8年だろ。それより利樹と話をしろよ。俺に話しかけてくるなよ」

「なんで〜」

ブーブーと輪子は云つが全く聞いていない遊介に利樹が

「8年ぶりに3人揃ったんだぞ。少しは喜べよ遊介」

どこか嬉しそうな顔をしている利樹に

「そんなに清ましてていいのか？8年ぶりに想い人がしかも同じクラスの隣の席にいるのに」

「ぶっ！？ゆゆゆ遊介！！それは終わった話だ！今は関係ない！」

「おやおや学年一クールでかつこついい上条利樹君がそんな動揺するなんて珍しいことだっただってあるんですねえ」

「うっ、うるさい！僕はもう、輪子のことは・・・と、とにかく昔のことだ！」

「あの～上条君に炎城君、今はホームルーム中なのでそういうことは後にしてくれませんか？」

「あっ、すみません」

珍しく動揺した利樹だった

くデュエルアカデミア

食堂

午前中の授業が終わり多くの人でこった返す

ここデュエルアカデミアの食堂

そこには、日ごろからみんなに元気を与える、おばさんもおねーさんがせつせとみんなのために学食を日々つくっているのだった

そんな多くの人でこつた返し、一人の囁き声では話を聞き取れないくらいうるさい食堂でひときは大きな声が食堂に響く声があった

「「幼馴染みくく!!?!?」」

「そうだよ。何か文句あるか？」

遊介君がラーメンを食べながら答えた  
すると、

「遊介く」

そんな声が聞こえると否や遊介君は凍った

「おろ?」

遊介君、私、ネネの順に見た後いきなり又フッフと笑い出し

「お主モテモテですな」

「お前・・・全然かわってないな」

遊介君がそう言うつと桜井輪子さんは遊介君の隣に座る  
すると、その反対側から遊介君の肩に手を置いて現れた利樹様  
二人とも座り終わると桜井さんが口を開き自己紹介を始める

「私は桜井輪子。遊介と利樹の幼馴染みです。どうぞよろしく」

「ご丁寧な挨拶に何か引つ掛かりつつも

「黒崎迷些です」

「前田ネネです」

私たちも自己紹介をする

そして、私たちは何事もなく昼食を食べたのだった

おかしい・・・

輪子がこのまま普通の女の子のように食事を終えるだなんて・・・  
この俺、炎城遊介は思う

学校に転校してきてもう半日を過ぎようとしているのに、輪子は未だに何もしない（何もしなければそれはそれで被害が大きくなるないからいいが）なんておかしすぎる

「・・・・・・・・」

俺たち二人を抜いてガールズトークに花咲かせる3人だが、俺は1秒も気を抜けない

チラツと利樹の方も見ると気付かれないレベルで輪子に視線を向けつついつでも動けるように準備をしている

（なんだ？この食事をしながら戦場の最前線で戦っているような感じは？クソツ！離れてえ！！今すぐここから飛び立ちてえ！！I can fly!!）

そうこうしながらやっとな食事を済ました俺は逃げるようにその場を跡にしようとするが俺は床に転がる何か踏んづけてしまった

さらに、最悪な事に踏んづけたものは、ぬるりとした感じで踏んづけた靴が滑り、床に転ぶ



すると、その音に気付いた輪子は俺を起こそうとして席を立とうとすると、見計らったのか輪子も俺と同じものを滑ってこける  
そして、その体はそのまま俺の真上に被さるように遊介の背中の上に落ちる

もうお分かりいただけただけだろうか？

桜井輪子を警戒する理由は一つ

彼女が重度なドジッ娘だからだ

「イテテテ・・・大丈夫？遊介」

「・・・い・・・」

「ん？何言ってるか聞こえないんだけど・・・」

「重い」

バキゴキメキ

「何言ってるか聞こえ・・・ない・・・よ」

「ああああああ！！腕が！折れる！面白い方向に折り曲げられそうっ！！」

俺は初めて女の子の腕力の強さを身をもって知りました

テーブルの方では「自業自得だな」「うんうん」と言う声が聞こえる

そして、どうにか腕を開放してもらうと床に落ちていたシュウマイを見つけた

何かで踏まれた後があり、中身が散乱していた

「あつ、私の落としたシューマイだ」

「食べるなよ」

「たつ、食べないよ！中身が飛び出たシューマイを誰・・・が・・・食べる・・・も・・・の！」

素早くシューマイへ手が伸びる輪子

それを最初から解っていた遊介はコンマ1秒の差で拾い、口の中に押し込む

「あああああああ！！私のシューマイが・・・」

涙目になり、こちらをジッと見る輪子

（食い意地はるから悪いんだよ）

口の中でゴリゴリ言わせながら思う  
しかし、俺はあることに気付いた

（俺、ナニ口に入れて食ってるんだ？）

さっき俺と輪子で踏んづけ中身が飛び出たシューマイを俺は今飲み込んだ・・・

サアアアと顔が青ざめ始める遊介

周りを見ると（輪子以外）お気の毒にという顔をしていた  
その後、俺の意識は彼方へと飛んでいったのだった

くデュエルアカデミア

保健室

目を覚ますと俺はベットの上に横になっていた

「あら起きましたか？」

そこには眼鏡をかけたショートカットの女性がいた

「ここは？」

「保健室ですよ」

(そうかあのシューマイを食べた後、意識がなくなったのか・・・)

そういうことを考えていると保健室の先生が口を開く

「君を連れてきた女の子に感謝しなさいよ」

「ん？女の子？」とふと疑問に思うが同時に嫌な予感がした

「なんたって、全身ずぶ濡れになったあなたたちがいきなり保健室に入ってきて少しビックリしたわ」

(輪子の奴・・・俺を連れて行く途中で水でも被りやがったな・・・)

そう推測を立てる遊介だが、実際にはこうだった

輪子がなぜか気を失った遊介を抱えて保健室に向おうとする途中にたまたま清掃しに来たおばさんのモップつまり転倒、その後、運ぶのに疲れて学校の玄関口のロッカーに疲れたからもたれると、な

ぜかそこにバケツがあり、もたれた時の小さな振動でそのバケツが落下、結果として輪子と遊介はずぶ濡れになったのだ  
ちなみに、利樹なども止めるようには言ったのだが輪子はそれを聞き入れなかったでこうなっただである

「もう大丈夫そうだから、連れてきた子にありがとっつて言ってきなさい」

そうやって原因も知らない保健室の先生は追い出すように遊介を部屋から出した

「・・・まあ一応言っとくか」

くデュエルアカデミア

体育館く

「では、初回のデュエルは・・・上条！黒崎！出て来い！」

担当の先生の声によって利樹と迷些が先生の近くに行く

「最初はお前たちがデュエルをしろ」

「はい、解りました」

「は、はい」

まあ、学年1の実力者の利樹とミスデュエルアカデミアで2年生の主席を倒した迷些が呼ばれても誰も文句を言えないよな

「このデュエル楽しみだな・・・」

「ねえ、遊介。あの迷些つて子、強いのか？」

いつ間にか俺の隣にいる輪子がそう聴く

「まあな、なんたってミスデュエルアカデミア。利樹が相手だったら迷些も限界以上のデュエルを見せてくれるはずだ」

「へえ」

利樹と迷些が所定の位置に着くとお互いにデッキをディスクにセットし『決闘！』の合図でデュエルが始まる

「先攻は君に譲るよ」

「じゃあ私のターン！ドロー」

（よし手札の揃いがいい！）

「私は『氷ノ白虎』を召喚！」

白い毛並みの虎が現れる

ATK 1600

DEF 1200

「さらに、永続魔法カード『アイスヴェール』！このカードは相手のターンを数えて3ターン自分フィールド上のレベル4以下の水属性モンスターの破壊を無効にする！そして、カードを1枚伏せてタ

「ターン終了！」

「僕のターン！ドロー！」

（戦闘破壊を無効にする『アイスヴェール』・・・しかし、あれには発動する際に自分のモンスターが全て表側攻撃表示でなければならなかったはず、つまり、あの伏せカードはダメージを軽減するカードか・・・）

「僕は手札から魔法カード『レベルクラッシュ！！』を発動！このカードは手札のモンスターレベルを一つ下げ、お互いのプレイヤーは100ポイントのダメージを受ける。この効果でレベルを下げる対象は『幻影の投影者ヘーゲント』」

すると、ヘーゲントのレベルスターが一つフィールドに現れ、ひとりでに粉碎し回りに飛び散る

「まだまだ・・・」

LP 4000 3900

「そして、僕はレベル5から4に下がった『幻影の投影者ヘーゲント』を守備表示で召喚！」

LP 4000 3900

全身が白色のロボットのようなモンスターが現れる

DEF 2300

ATK 1900

「ヘーゲントの効果発動！このターンこのカードの攻撃を放棄する

代わりに相手フィールド上のカード効果を無効にする！『ヴィジヨングレード』！」

ヘーゲントの体の各部分が開き、赤い球体が光を放つ  
すると、迷些のカードが赤い電流のようなもので守られてしまい、  
カードに触れられなくなる

「さらに、手札から『デュアルサモン二重召喚』を発動。このターンの通常召喚を  
もう一度行っ」

利樹の空いているゾーンに渦のようなものが発生する

「そして、『暴走雷神テトリオート』召喚」

猫背で両手をだらりと構えた頭に突起物のある全身が暗い紫色のモ  
ンスターが現れる

ATK 1700

DEF 1800

「バトル！テトリオートで『氷ノ白虎』に攻撃！ソーサリング！」

テトリオートの両手の間に光る輪っかのようなものが発生し、テト  
リオートはそれを敵に投げつける

氷ノ白虎にその光の輪っかを受けると爆発が起こる

「くううう・・・」

LP3900 3800

「さらに、ヘーゲント効果発動！このカードが守備表示で存在する  
限り、相手モンスターは1度まで戦闘破壊されない」

テトリオートの攻撃によって爆発が起こった場所に氷ノ白虎が現れる

「・・・！なんでわざわざ相手が有利になるような効果が・・・？」

「その理由はこれで分かるぞ！テトリオート効果発動！テトリオートの攻撃終了後、相手フィールド上にモンスター存在する場合、もう一度テトリオートは攻撃を行うことが出来る！ソーサリング2！」

両手にそれぞれ光る輪っかが出現し、それを敵に投げつける

一回目の爆発が起こると、遅れて輪っかがその中に入り、さらに爆発する

「ううう・・・！」

LP3800 3500

攻撃を受けてライフのダメージ計算が終了すると迷些はあることに気付く

「ライフの減りがおかしい・・・」

（そんなヘーゲントの効果で戦闘では1度は破壊されない効果を得ても攻撃力を下がらないはず・・・）

なぜライフの減りがさっきよりおかしいのか分からず、ディスクの機能を使い調べる  
すると

（テトリオート・・・このカードが相手に戦闘ダメージを与えた時、



このカードの攻撃力を300ポイントアップすることが出来る。これか！)

「さらに、僕はカードを1枚伏せてターンエンド」

(まさか、『アイスヴェール』を越えて私のモンスターが破壊されるなんてやっぱり強い！)

「私のターン！」

(『氷の女王』！だけど、今私のフィールドにリリース素材となるモンスターは一体もない、このカードは使えないか・・・)

「私は手札から『トレード・イン』を発動！手札のレベル8モンスターを墓地に送り、デッキからカードを2枚ドロロー！」

手札の『氷の女王』を捨てる、カードを二枚引く迷些に利樹が

「リバーストラップオープン！『偵察』！このカードは相手が効果によってカードをドロローした時、僕もデッキからカードを1枚ドロローする。その後、デッキの一番上のカードを墓地に送る」

まさに、手札を増強させることを見透かしたようにピンポイントの効果を発動する

「わ、私は『氷ノ盾持ち』を召喚！守備表示！」

氷で出来た大きな盾を持つモンスターが現れる

DEF 2100

ATK 1000

「これでターンエンドです」

「僕のターン、ドロー」

「装備魔法『スター・ソード星の剣』をヘーゲントに装備。『スター・ソード星の剣』の効果によりヘーゲントの攻撃力を300ポイントアップ」

ヘーゲントの手からピンク色の剣の形をした物が発生する

「・・・」

ATK1900 2200

「ヘーゲントを攻撃表示にし、バトルフェイズ！ヘーゲントで『氷ノ盾持ち』に攻撃！」

表示形式が守備表示から攻撃表示に変更され、立ち上がると手に持った剣を両手で包み敵に突進し、突き刺す

盾ごと貫かれたモンスターは悲痛な悲鳴を上げて消滅する

「続けてテトリオートで攻撃！ソーサリング！」

テトリオートの手の中でエネルギーの輪が発生し、それを迷些目掛けて投げつける

「ダメージステップ時にトラップ発動！『ガードブロック』」

エネルギーの輪が突如発生したカードに攻撃を阻まれる

「このカードは戦闘ダメージを1度だけ0にし、その後デッキからカードを1枚ドロウする」

「利樹も黒崎さんもお互いに一步も引かない状況だね」

「だけど、確実に利樹が有利な状況だな」

「迷些くがんばれ〜!!」

そんな迷些に対する声援に応えようと必死に策を巡らせ出た答えは

(このドロウに賭ける!)

「私の・・・ターン!」

気合い入ったドロウに周りが黙って見守る  
そして

「魔法カード発動! 『ドロップドロウ!』手札の『氷ノ白姫』を墓地に送り、デッキからカードを一枚ドロウする! さらに、墓地送ったモンスターのレベルが7以上のため、さらに二枚ドロウ!」

「ここで強力なカードを引いてきたか・・・」

(この手札・・・いける!)

「私の墓地に水属性モンスターが3枚以上ある時、このカードは手札から特殊召喚できる! 来て! 『氷ノ龍』!」

地面から巨大な氷の柱が現れたと思うと、その柱を破壊して中から体全身に氷のように透き通った龍が現れた

ATK 3000  
DEF 2500

「出た迷些のデッキの最強モンスター！」

「さらに、手札からフィールド魔法発動！『絶対零度空間』！」

迷些の足元の床から段々と氷が広がる

そして、周囲に氷の柱が出現する

「このカードの効果は自分フィールド上に水属性モンスター以外のモンスターの効果を無効にし、攻撃力を500ポイント下げる！」

「!!!」

利樹のフィールドのモンスターたちの足が凍りつく

テトリオート

ATK 2000 1500

ヘーゲント

ATK 2200 1700

「『氷ノ龍』の攻撃！聖なる氷息！」

氷ノ龍がその大きな羽を広げると冷たい冷気が辺りを満たす

そして、龍が口を開けるとテトリオートに向かって吹雪にも似た攻撃が炸裂する

その強力な一撃はテトリオートの体全身を凍りつかせ、その凍った姿も襲い掛かる吹雪の攻撃に耐え切れず粉々に粉碎される

「・・・」

LP3900 2400

「さらに、『氷ノ龍』の効果！相手プレイヤーにダメージを与えた時、相手の表側表示の魔法・罠カードを破壊できる！衝撃の咆哮！」  
氷ノ龍が吼えるとフィールド上の表側になっていた利樹の装備魔法が破壊される

「『<sup>スター</sup>星の剣』の効果！このカードが破壊され墓地に送られた瞬間、自分のライフを500支払うことでこのカードを手札に加える！」  
LP2400 1900

（なんで自分のライフを下げて『<sup>スター</sup>星の剣』を手札に加えたの？）

「カードを2枚伏せてターンエンド」

「黒崎さん・・・君も強いデュエリストだ」

「利樹様・・・」

利樹に寝められ顔が赤くなる迷些

「だが、勝つのは僕だ！僕のターンドロー！」

（タウバーン・・・！）

引いたカードがタウバーンでさらに自分の勝利を確信する

「僕はカードを2枚伏せる！そして、手札から『天よりの宝札』を発動！」

空から落ちてくる硬貨を兵士は自分の兜で取るうとするイラストカードが発動する

「このカードの効果はお互いの手札が6枚になるようにドローする効果！僕の手札は1枚よって5枚のドロー！」

「私も1枚です！5枚ドロー！」

「リバースマジック発動！『ハリケーン』！」

暴風が町を襲っているイラストのカードが現れる

「『ハリケーン』の効果！フィールドの全魔法・罫を手札に加える！」

暴風によって伏せられたカードも発動されているフィールド魔法も全て巻き上げられていく

「さらに、手札の『抹殺の使徒』を墓地に送り、魔法カード『コストダウン』を発動！その効果によって手札のモンスターレベルを全て2下げる！そして、ヘーゲントをリリース！」

ヘーゲントの体が裂けさまざまな色に光る球体が現れる

（行くぞ！タウバーン！）

手札からタウバーンを抜き取るとフィールドのヘーゲントのカード入れ替えるが利樹はこの時気付いていなかった少しながらもタウバーンのカードが光っていたことを

「アドバンス召喚！ 現れよ『奇跡の戦士タウバーン』」

さまざまな色に光る球体が天辺から裂けると中から白を基調としたパイルと呼ばれる細長い物を腰に着けたモンスターが現れる

ATK 2800  
DEF 2600

「さらに、装備魔法『スターソード星の剣』をタウバーンに装備！」

タウバーンの両手に青い色の剣と緑色の剣が出現する

ATK 2800 3800

「攻撃力3800・・・！」

「なんでヘーゲントと違ってタウバーンの方が攻撃力の数値が変化がおかしいよ！」

ネネがそう叫ぶと

「『スターソード星の剣』にはタウバーンに装備した時、攻撃力を1000ポイント上げる効果があるんだ」

利樹の代わりに遊介がカードの解説をした

「バトル！タウバーンで『氷ノ龍』に攻撃！豪快！  
字斬り」  
銀河！十文

タウバーンの足の裏の噴射口から勢いよく炎が出る。一気に氷ノ龍との間合いを詰め、膝を曲げて跳ぶ。そして、体を回転させながら両手に持った剣で十字に氷ノ龍を斬る

「……ッ！」

LP3500 2700

「手札から速攻魔法発動！『連撃』！」

「……！」

「同じカードを使っている君なら知っているな？」

タウバーンの胸の水晶が輝き始める  
いつでも発射可能だといっているように

「……楽しいデュエルでした」

悔しいという感情が迷些の中から溢れ出る

「僕もだ」

その言葉の後、タウバーンの攻撃は迷些に炸裂した

「……」

LP2700 0



「やっぱり強いです利樹様は」

デュエルを終え利樹の所まで歩いてきた迷些が言う

「いい加減止めてくれないかその呼び方」

「えっ、……じゃあなんて呼べば……」

「利樹と呼んでくれ。僕も君のことを迷些と呼ぶから」

「ハイ！利樹……君……」

様ではなくなり君というまた一歩利樹に近づけたと思った迷些は顔が真っ赤にして俯く  
そこに先生が来て言う

「いちゃいちゃするな、ませガキ共が。元の位置に戻れ」

何故か苛立っている先生の言葉に従い再び整列させた生徒の中に戻る二人

「ではデモンストレーションも終わったところで今回からこのように先生が呼び出した二人はデュエルを行い、授業終了後に各々のデスクに内蔵されたメモリーチップを提出する分かったな！」

ハイと生徒全員が答える

「今回は実技デュエルは一回目だからな。今回は各々の好きな相手とデュエルするがいい」

そう言うとハイ解散と言ってどこかへ行くのだった

20秒後

まあなんだ、俺こと炎城遊介はデュエルもせずに体育館の隅っこに座っているんだが・・・

（誰も相手をしてくれない。というか誰も他の人間に見向きもしない）

ただそこには人気バーゲンセールが始まって我先にとという闘いを繰り広げているおばさんたちのように我先にと女子は利樹、男子は輪子、迷些を取り合って人だかりを生んでいた

「・・・なんつーか不幸だ〜」

あの黒髪ツンツンの少年の言葉を借り言うのであった  
すると、目の前にさっきまで男子生徒に囲まれていた輪子がいた

「ナニ一人でふて腐れてるの？」

「なんでこの世には”美”が付くだけでこんなに扱いの差が違うのかという不条理に打ちのめされてただけだ」

「ふーん、それよりも私とデュエルしない？」

「唐突だな。一応理由を聞いといてやる」

「酷ーい。それがデュエルを申し込まれた人の態度？ エラソー」

「むぐつ、わつ、分かりました。有り難くそのデュエル受けさせていただきます」

「よろしい。では、ついてきなさい」

「ははー」

何やってんだ俺？と思いつながら輪子の後をついていく遊介  
途中迷些とネネがデュエルをしているところを見て

（ははーん、コイツあまりにも男子たちがしつこいから俺とやった方がいと思ってるな）

ちなみに、利樹はクラスの女子全員を一人一人相手をするという気が大変必要になる荒業をしていた

「さてと、八年ぶりの遊介とのデュエル！楽しんでいこう！」

「手加減なしでいくぜ！輪子！」

「「<sup>デュエル</sup>決闘！！」」

## 第6話 転校生は幼馴染み！（後書き）

今回の最強カード

氷ノ龍

水属性：ドラゴン族：レベル9

効果：墓地の水属性モンスターが3体以上の場合特殊召喚できる。  
このカードが戦闘によって相手プレイヤーにダメージを与えた時、  
相手フィールド上の表側表示になっている魔法・罫を1枚破壊できる。  
このカードの攻撃力は自分フィールド上に存在する水属性モンスター×200ポイントアップする

ATK 3000

DEF 2500

いかがだったでしょうか？

今回から登場のメインヒロインの桜井輪子

当初の設定の中では迷些がメインヒロインだったんだけど、小説を書いているうちにメインヒロインが輪子に摩り替わっていました

迷些涙目

今回は久しぶりの遊介のデュエル！

新たなエレメントJの力はいかに！？

次回も読んでくれると嬉しいです

感想・オリカお待ちしております

第7話 切り札！（前書き）

やっとこの回で遊介のエース登場！

## 第7話 切り札！

「デュエル  
決闘！！」

お互いにデュエルディスクを構えてデュエルをしようとする二人だが

「・・・の前に！ちよつと待ったー！！」

「ズゴーツ！」

勢いがいきなり止められそこに転びそうになるが、必死に堪え輪子  
聴く

「で、なんだよ？何か不備でもあるのか？」

一息おいて輪子は言った

「恥じらいもせずに

「このデュエルディスクってどうやって使うの？」

その問いに目が点になる遊介

「は？ナニ言ってるのですか？アナタハ」

「だつて～～私の通ってたイギリスのデュエルアカデミアはデュエ  
ルリングしか使わなかったもん」

「今の時代ありえなくね？」

「あるんだからしょうがないでしょ!!」

なんか勝手にキレた輪子がドコから出したかわからないパイプ椅子を遊介に照準を合わせて投げようとする  
そんな物投げられて当たったらシャレにならないから大人しく教えることにした

〈デュエルディスクの基本的な指導中〉

「ほうほう。このボタンで・・・っと」

教えられたボタンを押した輪子のデュエルディスクは展開する

「よし、準備完了!いくわよ!」

「<sup>デュエル</sup>決闘!!」

「私の先攻!ドロー!」

「私は<sup>ホワイトナイト</sup>『<sup>ソーザン</sup>白騎士団の剣士』を召喚!」

白い鎧を着た騎士が現れた

ATK 1500

DEF 1200

「<sup>ホワイトナイト</sup>『<sup>ソーザン</sup>白騎士団の剣士』の効果!自分フィールド上に『<sup>白騎士団</sup>』と名のついたモンスターの数×100ポイント攻撃力をアップする!」

ホワイナイト  
白騎士団の剣士

ATK 1500 1600

「さらに、手札から魔法カード『進軍』発動！この効果によって手札からレベル4以下の戦士族を特殊召喚する！私は『白騎士団の槍持ち』を特殊召喚！」

白い鎧を着た槍を持った騎士が現れる

ATK 1600

DEF 1300

「さらに、『白騎士団の剣士』の効果！攻撃力がさらに1000ポイントアップする」

ホワイナイト  
白騎士団の剣士

ATK 1600 1700

「カードを一枚伏せてターンエンド」

「俺のターン！ドロー！」

（白騎士は場に揃えば揃うほどめんどくさい効果が発動するモンスターたちが多かったはずだ。なら、・・・）

「チューナーモンスター『エレメントD ダイヤモンドナイト』を攻撃表示で召喚！」

外国の甲冑を来た肩と頭にダイヤモンドを装備したモンスターが現れた



ATK 1700  
DEF 1500

「さらに、手札から魔法カード『エレメントバース』発動！このカードの効果はデッキからモンスターがでるまでめぐり、その後、ドロートしたカードが『エレメント』と名のつくモンスターならば特殊召喚し、それ以外のモンスターだった場合、手札に加える。その後、モンスターカード以外のカードは墓地に送るいくぜ！1枚目魔法カード『シンクロ・オブ・シンクロ』、2枚目罫カード『エレメントバースト』、3枚目魔法カード『召喚師の暴走』、4枚目モンスターカード『エレメントT タイムウォリアー』よって、『エレメントT タイムウォリアー』を特殊召喚！そして、それ以外のカードを墓地に送る」

懐中時計を大量に装備した剣士が現れる

ATK 1500  
DEF 1200

「さらに、レベル4の『エレメントT タイムウォリアー』にレベル4の『エレメントD ダイヤモンドナイト』をチューニング！大地に眠りし巨人よ！その大いなる力を奮い我を導け！シンクロ召喚！ 『エレメントEX ガイアゴーレム』」

ドデカイ両腕をぶら下げ若干地面から浮いているモンスターが現れる

ATK 3000  
DEF 2300

「さらに、ガイアゴーレムのシンクロ召喚に成功した時、チューナー以外のシンクロ素材のモンスターを特殊召喚する！現れる！『エレメントT タイムウォーリアー』！」

「1ターンでシンクロに効果モンスターを場に残してきたか・・・」  
輪子が状況的に不利な形になっていると思いつながら手札のカードを見て打開策を練る

（最初に攻撃するべきは『ホワイナイト白騎士団の剣士ソーゼン』だな。これ以上『ホワイナイト白騎士団イッ』を増やされて攻撃力を上げられたら堪ったもんじゃないからな）

「『ホワイナイトエレメントEX ガイアゴーレム』で『ホワイナイト白騎士団の剣士ソーゼン』を攻撃！ジェットスタンプ！」

ガイアゴーレムはホワイナイト白騎士団の剣士ソーゼンに照準を定めると、両腕の肘辺りからスチームが噴出し、腕の部分がホワイナイト白騎士団の剣士ソーゼンに向かって飛んでいき、当たると同時に爆発する

「くうううう・・・！」

LP4000 2700

「よし！『ホワイナイト白騎士団の剣士ソーゼン』撃破！」

「だけど、浮かれるのはまだ早いよ！リバーズカードオープン！『魂の綱』」

人が細い紐のようなもので繋がれたイラストの罨カードが発動する

「このカードはモンスターが破壊された時にコスト1000ポイントを支払うことでデッキからレベル4以下のモンスターを特殊召喚できる！」

LP 2700 1700

すると、デッキから1枚のカードが選出される

「私の選ぶカードはこれ！『白騎士団の見習い戦士』！」

小型の剣を構えた白い鎧を着た小さい戦士が現れた

DEF 800

ATK 500

「『白騎士団の見習い戦士』の効果発動！このカードが特殊召喚に成功した時、デッキから任意の枚数『白騎士団の見習い戦士』を特殊召喚できる！」

小型の剣を構えた小さい戦士が3人に増える

「ゲツ、増えやがった！なら、タイムウォーリアーで『白騎士団の見習い戦士』に攻撃！」

2つの剣で白騎士の見習い戦士を両断する

「だけど、見習い戦士は守備表示ダメージはない！」

「これでターンエンド」

「私のターン！ドロー！」

(よし・・・！)

「私は見習い戦士をリリース！」「ホワイトナイト 白騎士団の主人ロード」をアドバンス召喚！」

チェーンが付いた先端にウニのようなとげがある球体状の武器（ボール・アンド・チェインと言らしい）を構え、マントを翻して、目隠しのような物を着けた騎士のモンスターが現れる

ATK 2000  
DEF 2000

「だが、『エレメントEX ガイアゴーレム』の効果は相手モンスターの攻撃対象がこのモンスターしか選べない効果だ！攻撃力2000の『ホワイトナイト 白騎士団の主人ロード』じゃあガイアゴーレムの攻撃力3000に届かないぜ」

「なら、魔法カード『ユニオンアタック』発動！この効果によって私のフィールド上のモンスターの攻撃力を全て『ホワイトナイト 白騎士団の主人ロード』に集結させる！ただし、相手に与える戦闘ダメージは0になる！」

ロード 主人の前に立ち見習い戦士と槍持ちが武器を構える

「バトル！」「ホワイトナイト 白騎士団の主人ロード」で『エレメントEX ガイアゴーレム』に攻撃！ 白騎士団の総撃！」

見習いの戦士と槍持ちがガイアゴーレムを斬りつける

そして、主人が斬られた部分に主人のとげの付いたボールのようなものがガイアゴーレムの斬られた部分を貫通し、遊介のすぐ隣に落

ちる

「さらに、主人の<sup>ロード</sup>効果発動！主人が相手モンスターを戦闘破壊した時、相手に300ポイントダメージを与える！」

宙に浮いている主人が塚の部分を引き戻す

すると、チエーンに引つ張られて地面に埋まっていたとげの付いたボール状のものが主人に戻っていく  
そして、その途中に遊介の体を貫く

「うあつ・・・！」

LP4000 3700

「『<sup>ホフイナイト</sup>白騎士団の槍持ち』<sup>ランサー</sup>を守備表示に変更しターンエンド」

「俺のターン！ドロー！」

(輪子のライフは残り1700・・・このまま押し切る！)

「チューナーモンスター『エレメントC サイクロンコマンダー』  
召喚！」

緑色のロングゴートを着た右目しか見えていないモンスターが現れる

ATK 1500

DEF 1200

「レベル4『エレメントT タイムウォリアー』にレベル3『エレメントC サイクロンコマンダー』をチューニング！大いなる疾風を身に纏いし戦士よ！我を勝利へ導け！シンクロ召喚！吹き荒れ

よ！『エレメントEX セルトルネード』」

漆黒のスーツを着て両手に風を纏っているモンスターが現れる

ATK 2600

DEF 2300

「『エレメントEX セルトルネード』で『ホワイトナイト白騎士団主人』ロードに攻撃！ ビックタイフーン！！」

セルトルネードが両腕を前に突き出すと両腕に纏っていた風が一つになって主人を襲う  
しかし、主人は破壊されない

「主人は戦闘で破壊できない」

「だけど、ダメージは受けるぜ」

「・・・」

LP1700 1100

(よし、あともう少しだ！)

「カードを1枚伏せてターンエンド」

「私のターン、ドロー」

「私はライフを1000支払い手札から『スター・ブラスト』発動。この効果によって払ったライフ500ポイントにつき、レベルを1下げる。私は手札の『ホワイトナイト白騎士団の騎士王』パラディキングのレベルを8から6へ下

げる」

LP1100 100

(わざわざ自分のライフを下げた? どういうことだ)

「私は『ホワイトナイト白騎士団の槍持ち』をリリース! 『ホワイトナイト白騎士団の騎士王』を  
アドバンス召喚!」

白馬に乗った巨大な剣を装備した白い騎士が現れた

ATK2600

DEF1300

「セルトルネードと同じ攻撃力・・・相打ち狙いか?」

「甘いよ! 『ホワイトナイト白騎士団の騎士王』の効果発動! 自分のライフポイントが相手よりも低い時、その差分の数値を攻撃力に加える!そして、私と遊介の差は3600! 攻撃力3600ポイントアップ!」

ホワイトナイト 白騎士団の騎士王

ATK2600 6200

「攻撃力6200!?!」

「こんなことにも気づかないなんて遊介もまだ詰めが甘いね」

「冗談じゃなくヤバイって」

『ホワイトナイト白騎士団騎士王』で『ホワイトナイトエレメントEX・セルトルネード』  
に攻撃!」

何かを纏わり付かせている巨大な剣でセルトルネードを一刀両断する

「うわああああああああああああ！！！」

LP3700 100

「とどめよ！『ホワイナイト白騎士団の主人』カードで直接攻撃！」

「まだだ！！リバーズカードオープン！『残留思念』！」

無人の部屋に半透明の豪華なドレスを着た女性がたたずむイラストのカードが発動する

「このカードは俺がダイレクトアタック直接攻撃を受ける時、自分の墓地のモンスターを2体をゲームから除外してこのターンのダメージ0にする！」

半透明のダイヤモンドナイトとサイクロンコマンダーが主人の攻撃の盾になる

「なら私はカードを1枚伏せてターンエンド」

（やばいな。俺のライフと輪子のライフは共に1000・・・俺が守備モンスターで場をかためても主人のカード効果で300ポイントのダメージを受けて終わり、例えばいつのモンスターの攻撃力を超えているモンスターを召喚してもあの伏せカードが攻撃破壊のカードだったら終わり・・・なんにせよ、このドローで決まる！）

（私の伏せカードは『聖なるバリア ミラーフォース』、どんな強力なモンスターでも一網打尽よ！）

「いくぜ！俺のターン！ドロー！！！」



遊介がカードを引いた時、視界の隅にカードのある字が見えた

(……!こいつは!)

改めてカードを見直す

これはエレメントシリーズの中でも希少なレベル7のモンスター  
エレメント」

「……<sup>ジョーカー</sup>切り札……いいぜ……この力を試させてもらっぜ!」

表情に余裕のようなものを感じた輪子は遊介の行動を警戒する

(何を引いたの?遊介……)

「俺は手札の『エレメントE インデックスマジシャン』を墓地に  
送り、『エレメント』ジョーカージャスティス』を特殊召喚!」

〈デュエルアカデミア

体育館 第2デュエルゾーン〉

「『エレメント』ジョーカージャスティス』を特殊召喚!」

このクラス最後の女子生徒とのデュエル中に僕の耳に聞こえた遊介  
の声

少しデュエルを中断してもらってそっちの方を向くと見覚えのない  
モンスターが遊介のフィールドに立っていた

(なんだ?あのモンスター……)

そして、輪子の方にも目を向けると遊介の新しいモンスターに若干驚きつつも余裕の表情を崩さないでいるようだ

（僕もデュエルを早めに切り上げて遊介たちのデュエルを見に行くか）

そう思った後、遊介たちの方から女子生徒の方に体の向きを変える

「すまなかった。じゃあデュエルの続きをしよう」

〈デュエルアカデミア

体育館 第30デュエルゾーン〉

「エレメント」・・・」

子供の頃には見たことのないモンスター  
漆黒のコートのようなものを身に付け左の拳にJの文字を刻んだそのモンスターは異様な気配を発していた

「これが俺のデッキの新しいエース！『エレメント』 ジョーカー  
ジャスティス』だ！」

腕を組んだままの姿勢で佇むジョーカー  
それを体育館2階の物陰から見下ろす先生がいた

「エレメント」か・・・」

そう呟いた後、小型の連絡用端末を取り出しどこかにつなげ、その小型端末を2階の座席に置き立ち去る

そして、その端末に付いたレンズの目はしっかりと遊介を見ていた  
「さらに、手札から『サイクロン』発動！フィールドの魔法・罫力  
カードを破壊！」

突如フィールドに竜巻が発生する

「させない！」ホワイナイツ 白騎士団の騎士王バラディキング『の効果発動！相手の発動した魔法・罫を1ターンに1度だけ無効にする！』

バラディキング 騎士王が剣を横に振ると竜巻が二つに裂けて勢いが消えてなくなる  
「なら『エレメントJ』 ジョーカージャステイス』の効果発動！墓地のエレメントと名のつくモンスターをゲームから除外しその効果を  
を得る！」

すると、ジョーカーの拳の文字がIに変化する

「墓地から取り除くモンスターは『エレメントI インデックスマジシャン』！その効果は手札のカード1枚をコストに墓地から魔法カードを手札に加える！ただし、そのカードの発動後、ゲームから除外する。その効果で墓地の『サイクロン』を手札に加える！」

ジョーカーの足元から魔法陣が発生し、その中心部分から1枚のカードが出てくる

「そして、手札に今加えた『サイクロン』発動！」

再び吹き荒れる竜巻は輪子の場に伏せてあったカードを破壊する

「これで終わりだ！『エレメント』 ジョーカージャスティス』で  
『<sup>ホワイトナイト</sup>白騎士団の主人に攻撃！』」

ジョーカーの拳が主人の顔面<sup>ロード</sup>を殴り飛ばす

「……………」

LP1000

↓デュエルアカデミア

校庭↓

今俺たちは学校での授業を終え寮に帰る道にいた  
ちなみに、一緒に帰っているメンバーは俺に利樹、輪子、迷些にネ  
ネだ

「まさか、デュエルアカデミアで最初のデュエルの勝敗が黒星だな  
んて……、私の全勝無敗伝説がいきなりエンディングを迎えてい  
るよ」

輪子がそんなことを言いながら俺たちの2、3歩先に歩き振り返り、  
俺に人差し指を向けて言った

「でも楽しいデュエルだったからよし」

そして、8年ぶりの輪子の満面の笑みを見た

「まっ、まあまた今度相手してやるよ」

俺は少しその笑顔に動揺しながら答えた

「よし今度はもっとすごいコンボを考えて遊介をコテンパンテンにしてやる!」

そして、うーんと言いながら立ち止まって考えるすると、あることに気付いた

「そういえば遊介のお父さんにだけまだこっちに帰ってきたって伝えてないや」

今の話題ではどうでもいいことだったが遊介たちの場合は少し事情が違う

「ねえ遊介、遊介のお父さんが眠ってる墓地ってどこにあるの?」

く????

真つ暗な空間に男らしきシルエットの人間が一人座っていた

「エレメントか・・・」

真つ暗な空間には今どこかで録画された映像がながれていた

「ふふ間違いない、あれこそ我が崇めし神の産物。オリジナルの口ストシリーズ・・・」

そんな一人ぼつちの空間に新たに現れたシルエット  
遊介たちの行動を影から観察する男だ

「主よ。彼の力はまだ完全に口ストシリーズのカードを扱いきれて

いません。今あれをするのは早過ぎるか」と

「エキゾチックスター、私も馬鹿ではない。奴にあのカードを扱うにふさわしいかどうかはこれから決めること、メディック！」

真つ暗な空間にさらに人が増える

漆黒のマントを被ったそれは言う

「お呼びでしょうか、マスター」

絶対なる忠実心がそれからひしひしと感じられた

「炎城遊介、この者と直ちにデュエルし、私の計画に相応しき者がどうか見極める」

「ハッ」

シュバッという音が聞こえると思うとそこにはもう誰もいなかった

「メディックでよろしいのですか？ 奴は強すぎる忠誠心ゆえに自らの家族も殺した者です。もし、主に対して危険だと判断されれば炎城遊介の命は……」

「フッ、それもまた面白い。そうでなければ退屈しのぎにならん」

男は笑う

## 第7話 切り札！（後書き）

今回の最強カード

エレメントJ ジョーカージャスティス

レベル7：闇属性：戦士族

効果：自分の手札の「エレメント」と名のつくモンスターを墓地に送ることで特殊召喚できる。この効果でこのカードが特殊召喚に成功した時、墓地に送ったモンスターのレベル分このカードのレベルを下げる。さらに、そのカードがチューナーだった場合、このカードをチューナーとして扱うことだできる。1ターンに一度墓地の「エレメント」と名のつくシンクロモンスター以外のカードをゲームから除外して発動する。そのターン、この効果で除外したモンスターの効果をこのカードの効果として使用できる。このカードを素材としてシンクロ召喚を行うとき「エレメント」と名のつくシンクロ素材にしか使用できない。

ATK 2500

DEF 2000

番外編2 ネネの部屋 その1

ルルルル  
ルルルルルル  
ルルルルルルルルルル

「はじめまして司会進行役を勤めさせていただきます。前田ネネです」

「ここネネの部屋では本編での主要キャラたちの設定などを紹介していくというそういうような番組です」

「では早速ゲストの方に登場してもらいましょう。作者のテキストな設定のおかげで最近キャラがブレまくりの本編での主人公、炎城遊介」

「好きでキャラがぶれてんじゃねえー!!」

「うおっ！いきなり作画崩壊を起こして登場ですか」

「いやっ、小説なんだから絵ないし、というかどうかでもいいながら顔すんな!!」

「まあまあお茶でも飲んで気分を変えましょう」

「あっどうもってちがう!」

「では場も和んだところで、続いてのゲストです。みんなの王子様その名も上条利樹様です」



「やあ」

「くそつ、シカトされたうえに他のゲスト紹介をしゃがった」

「まだまだ続きますよ、続いてのゲストは信号機コンビの最後の一人、本編のメインヒロイン・桜井輪子さんです。」

「信号機の黄色役をしています。桜井輪子ですってなんでやねーん！」

「おお、いきなりのノリツッコミ・・・おぬしお笑いの素質があるかもしれぬぞよ」

「ほほう、それは嬉しい褒め言葉ですな」

「余談だがなぜ輪子が信号機コンビの一人という紹介文だったかという僕の髪の色が青で、」

「俺が赤だからだ」

「補足説明ありがとうございます。では最後のゲストです。私の大親友、黒崎迷些です。」

「どつ、どつも、黒崎迷些です」

「では現在の主要キャラ全員のキャラ設定をしていきましょう!」

「なあ、利樹」

「なんだ?」

「キャラ設定って最初にやるものじゃね？」

「それを言ったらおしまいだ」

「では最初のキャラ設定は主人公の炎城遊介です！」

「 Bannon! 」

「いやフリップをおもいつきり見せられても小説なんだから誰も見れないぞ」

「大丈夫。このフリップ関係ないから」

「じゃあ何のために出したの！（最後声高め）」

炎城遊介

15歳

O型

二月生まれ

明るい性格でクラスの中で利樹の次に人気がある。輪子とは家族ぐるみの付き合い、利樹とは小学校に入ってから知り合う。その後、輪子がヨーロッパのイギリスに引っ越すまでいつも三人で行動していた。遊介の持つ本人にも出所不明の「エレメント」のカードは子供のころカードデザイナーである父から貰い現在にいたる

「へえ〜こういう経緯でそのカードを手に入れたんだ・・・では、次は利樹様です！」

「あれ？興味薄くない？俺かりにも主人公だよ？」

上条利樹

15歳

A型

五月生まれ

幼少の頃から頭が良かったため小学一年生の半年間はイジメを受けていたが、遊介たちとの出会いを期にデュエルモンスターズを始める。輪子に対しては子供の頃に好意を持ち、告白してみるも返事を先送りにされ、事実上フラれた。家系は母方の叔父が真道流拳術の道場を営み、輪子が引越した後、真剣に武術に打ち込み、弱冠13歳で真道流拳術を極めた。その記念に利樹の父親から亡くなった遊介の父がデザイン、制作した銀河をテーマとしたカードを譲り受ける。

「利樹様にはこんな過去があっただんですか？」

「よし！次は私！桜井輪子のターンです！」

桜井輪子

15歳

O型

7月生まれ

活発的な性格で目が大きく金髪に近い黄色の髪色でスレンダーな体形の美少女。何も無いところで滑って転ぶのではなく、何も無いところで滑って空中で回転してから転ぶという有り得ないことを現実に引き起こしてしまう超ドジっ娘。日本から引越した後の8年間をイギリスで過ごす。イギリスのデュエルアカデミアでは学年上位に食い込むほどのデュエルタクティクスをもつ（番外編にて輪子を

軸にしたイギリスデュエルアカデミアでの話をいつか制作予定)。

ホワイナイト  
「白騎士団」のカードは日本からイギリスへ発つ直前に遊介の父より貰う。

「遊介のお父さん・・・活躍し過ぎてない?・・・」

「ストーリーに関係しまくる人だからな」

「いろんな意味ですごいお父さんを持つたんだね」

黒崎迷些

16歳

O型

4月生まれ

設定上ハッキリものを言う性格で押しに強く受けが弱すぎるガラスのハートの持ち主。黒髪のロングヘアで裏でファンクラブがあってもおかしくない美少女。デュエルでの強さもそこでドロウ力が遊介たちよりも上。「氷ノ」で名前のつくカードはジュニア大会優勝の時に贈呈された(余談だがそのカードのデザイナーはやっぱり遊介の父)。

「「「遊介(君)のお父さん活躍し過ぎ(だ)!!!」」」

「知るかよ父さんいつも家にいなかったし」

「まあ遊介のお父さんは有能なカードデザイナーだったから無理ないし、業界の中では第二のペガサスって言われてるくらいだからな」

「利樹・・・なんでそんなに詳しいんだ?俺の知らないことばっかりだぞ・・・」

「まあ勉強したからな」

「まあ、これで全員のキャラ設定も終わったしまた新しいキャラが出た時にまたお会いしましょう。さよなら」

「オイ待て。ナニ自分のキャラ設定だけ紹介せずに閉めようとする」

「ギクツ!!」

「あつ、こんな所にネネのキャラ設定が（棒読み）」

「まつ、M A T T E !」

「元キンに走るな。迷些、ネネを頼む」

「任せておけ」

「ちよつ!? 迷些!? 離して! 私のキャラ設定は公開しないで! お願ひ!!」

前田ネネ

15歳

A型

八月生まれ

元気な性格。背が小学生並に低いが以外と出るところは出ている。自分の背丈の半分はある紙をリボンで縛ったツインテール。他の登場キャラとは違いオリカを使わないデッキ（中身の構造は不明というより決まっていない）。空気。

「・・・うわ・・・」

「桜井さん・・・そんな可哀相な目で見ないで・・・」

「最後の空気って・・・無しだろ」

「ネネ乙」

ルールル

ルルルルルル

ルルルルルルルルルル

「あつ、エンディングだ」

「じゃあ次回から遊戯王EX（仮）から遊戯王LOSTにタイトルが変わるから気をつけてね」

「今まで題名が決まらずEXで突き通していたけど、やっと決まったおかげでよりいっそう頑張れる気がするな」

「私って・・・必要ないのかな・・・」

「「「」ではこれからの遊戯王LOSTをヨロシクお願いします！

！「「「」

「私の存在って何なんだああ！！！！」

番外編2 ネネの部屋 その1（後書き）

今回の使用曲

「徹子の部屋」でオープニングとエンディングに流れるあれです

第8話 闇のデュエル！ メディックvs遊介 前編（前書き）

後編書いてたらこの部分前編と繋げてもよくな？と思ったので追加しました



## 第8話 闇のデュエル！ メディックvs遊介 前編

デュエルアカデミアに入学して早くも一ヶ月を過ぎようとしていた

現在時刻は4時を過ぎたぐらいだ

そして、この小説のキャラ設定が甘かったせいでキャラがブレていた主人公・俺こと炎城遊介はデュエルアカデミアのグラウンドでサッカーのゴールキーパーをしていた

なぜかって？

部活の体験入学だからだよ

今俺が守っているゴールにボールを叩き込まんとする超美形男子・上条利樹は背中中で桃色の声援を受けながらゴールを目指しボールを容赦なく蹴る

ボールはものすごい勢いで飛んでくる

俺は両手を構え待ち受ける

ズドオオ！！

利樹の蹴りが強すぎてギュルギュルと音を上げながら回転を止めようとしないうちにボールに対して俺は俺自身の持てる力を使ってボールを止める

そして、俺の顔にボールがめり込んだ

そのままゴール

キヤー！！という女子生徒の声と共に利樹は額に伝う汗を拭いた

くデュエルアカデミア

校門前く

神様は俺を嫌っているのか？

そんなことを今日何回思ったか・・・

バスケットをしようものなら腹にボールがクリーンヒットし、野球ではなぜかキャッチャーのミットではなく俺の体にボールが全て当たり、書道では部員が足を滑らし、持っていた墨汁が後ろにいた俺の頭から豪快にかかったり、もう今日が厄日なのではないのか？思うほどトラブルにみままれ、利樹と言えば不幸の嵐が吹き荒れる俺を放って置いてダंकシュートやらホームランやらなんやら女子の視線を自分に集中させる出来事ばかり起こしていた

「すまない、着替えるのに手間取った」

そう言って走ってくる利樹の両手にスポーツドリンクを持って、さらには紙袋のようなものまで両腕にぶら下げていた

「もういいよ・・・」

もう俺はあきらめますよ

利樹には女子に囲まれたハーレム

俺には不幸に囲まれたハーレム

もう割り切りますよ

ハアとため息をつく

「ドーン！」

後ろから輪子が飛びついてきた

「おぬし暗いですぞ〜明るくいこうではないか！」

やけにハイテンションな輪子は俺の背中にまたがりながら

「遊介、利樹、一緒に帰ろー！」

〜学生寮への通学路〜

俺たちは輪子のイギリスでの生活の思い出話を聞いていたが

「それでね。ステファニーがね、こう言うの「あのストーカーはこんなパンツの趣味な輪子を好きになるだなんておかしい」ってひどくない!？」

イギリスでの思い出はいつの間にか愚痴になっていた

「お前、思い出の一つや二つ愚痴に変えずに言えないのか？」

「まあ、確かに私の趣味は若干子供っぽいけど、いいじゃん!今も動物イラストのパンツ穿いてても！」

「オイッ!さっきまでイギリスの友達の愚痴だったのに今は変なカミングアウトが始まったぞ!?!しかも人の話を聞けえー!!！」

そんな話をしていると無言のまま歩いていた利樹の足が止まったそれにつられて俺と輪子も足を止める

そして、どうしたんだ?と聞くと

「こんなところに銭湯なんてあったか？」

は？と思いい利樹の視線の方に目を向けると大きなドーム状の施設の看板にデカデカと銭湯と書いてあった

「あつ！ここ新サテライトパンフレットに載ってた”秘湯を全て集めてみました”がキャッチフレーズの銭湯だ！」

「そのキャッチフレーズには何か作為的な何かを感じるな」

「そうだな」

ちなみに、こんなキャッチフレーズで大丈夫か？と聞いてやりたかったがこの二人は何のネタかわからないだろうなと思いいそれを口にしなかった遊介だった

「秘湯の温泉がこんな所で味わえるだなんて・・・もうこれは行くしかないね！」

輪子が銭湯に入ろうとすると、後ろの二人がガシツと輪子の肩を掴み引き戻す

「なつ、何するのさ！？二人とも！私の秘湯巡りを邪魔しないで！」

肩を捕まれたままジタバタし続ける輪子に

「別に銭湯に行くなって訳じゃないが時間を考えろ」

えっ？と言つて輪子は腕時計の針が指す時間を確認すると、時刻はもう少しで6時になるところだった

そして、遊介たちの通うデュエルアカデミアの寮の夕食の時間が6時からだった

「銭湯に行くなら食った後な」

そう言つて遊介たちは、輪子の制服の襟元を摘み引きずる

「は〜い・・・」

頬を膨らませ輪子は引きずれて行つた

くサテライト

秘湯巡りだよ全員集合〜！！銭湯前〜

「いざゆかん！我が<sup>パラダイス</sup>楽園へ！！」

桶を片手に持って輪子は高らかにそう叫んだ

ちなみに、輪子は無類のお風呂好きなのでこんなにテンションが異常になる

「まあ輪子のことはいいとして・・・良かったのか？こんなのに二人を付き合わせちまつて」

俺が振り向いて後ろの二人に聞く

ちなみに、二人とは迷些とネネのことだ

「ん？別にいいよ。銭湯とかつて入ったことないから興味あるし」

と頭に桶を乗せてバランスを保とうとしているネネが言った

「迷些もか？」

「うん」

輪子ほつたらかしにして迷些とネネと話していると

「ドリルミルキイーパアアーンチ!!!」

その叫びとともに輪子の固く握られた拳が俺の鳩尾に食い込み俺の体が近くの壁まで吹き飛ばされる

一瞬何が起きたかわからずにいると、胃から夕食食べた物が逆流してくるのを感じ両手で口を抑え吐くの耐える

そして、そんなことお構い無しに輪子がゆっくりと近づいてきて、俺の胸倉を掴み持ち上げる

「人がせつかくお風呂の成り立ちから現在に至るまで歴史を語って  
いたっていうのに女とイチヤイチャしてるって・・・ドワイウコト  
？」

「輪子さん？声のトーンが低くなって瞳に宿る光が消えてもうヤン  
デレ状態で怖い！お願い！俺にも弁解の余地をください！」

土下座でもなんでもしますから！！と遊介が叫ぶと「そう」と素っ  
気なく言って

「私が満足するまで遊介もお風呂に入ってもらおうから・・・遊介が  
のぼせてもね」

それって死刑じゃね？と思ったが今の状況が解かれるならなんでも  
いいと思う遊介だった

く 銭湯

更衣室く

「いててて・・・輪子の奴、本気で殴りやがって・・・」

着替えながらお腹をおさえてる遊介

「妬いてるんだよ。輪子は」

クールにそんなことを言っているが、妬いている？あいつが？

「ないない、それは絶対ない」

あつはつはつはつはと無理に笑ったおかげでまたお腹が痛みだした

く 銭湯内く

着替えを終えた俺と利樹は輪子、迷些、ネネが来るのを待っていた  
ちなみに、俺達は学校指定の水着を着ている

「オーイ！遊介に利樹様く」

向こうからスクール水着を着たネネたちがやってきた

「じゃあ早速、風呂に入ろうぜ」

こうして遊介たち五人はお風呂に入ったのだが、遊介たちは気づいていなかった

物影から遊介たちをのぞき見ている者がいることを

灰色に近い色のマントを着た者の眼光は鋭く獲物を狙う猛獣のよう

にある少年を視界に捕らえていた  
そして、ポツリ一言呟いた

「炎城・・・遊介」

熱い・・・

体中が真っ赤になり、頭がクラクラしている遊介の前に子供のよう  
にお風呂の中を泳ぎまわる輪子がいた

(クソツ利樹と迷些とネネめ・・・さっさと出ていきやがって・・・  
やばい、考え事をし始めると、意識がとぶ・・・ぶくぶくぶくぶく  
ぶく)

とうとうのぼせてしまいお湯に沈んだそのとき

キヤアアアアア！！！！

その叫びを聞いた遊介はお風呂から体を起こす

のぼせていたせいか強烈な目眩で一瞬視界が閉ざされ、体がふらつ  
いたが何とか踏ん張り、叫びのした方へ目を向けると

灰色に近いマントを纏った男がいた

だが、遊介にとって重要なのはその男の姿ではなく男の抱えている  
少女だった

気を失いぐったりした水着の少女

黄色に近い金髪のショートカットの少女を俺は知っている



「輪子……？」

遊介の中から沸々と怒りが煮えたぎる  
そして、その矛先は当然、気絶した輪子を脇に抱えたマントの男に注がれた

「テメエ……輪子に何をした！！」

今にでも噛み付きそうな声でマントの男に言う

「大したことはしていない。炎城遊介、この女を返してほしいか？」

遊介の目が一段と険しくなる

それを見たマントの男は布で覆われた口が歪む

「なら、この銭湯近くの廃工場に来るがいい」

そう言うと輪子を抱えていないほうの腕をお風呂の底に突き刺す  
ズドオオ！！と音を上げて水柱が立った

大量のお湯が遊介に降り注ぐ  
それを両腕で防ぎ水しぶきが治まると、さっきまでいたはずのマントの男が忽然として姿を消していた

静かにマントの男が言っていたことを思い出し、心のなかで決意した

（輪子……必ず助ける！）

（銭湯内）

（自販機前）

「プハ〜」

世の中には、不思議なことで溢れている  
それをしみじみと思わせる現象が私の目の前で起きていた

「ネネ・・・一言いい?」

「何?」

牛乳を飲んだ後が口の周りについたまま迷些に聞き返す

「ネネが大食いってことは昔から知ってるけど・・・」

「うん」

カポツと学校の給食で出てくるような牛乳瓶の紙の蓋を開け、ゴキ  
ユゴキユツと飲み始める  
それを見て少しの間待つ  
そして、牛乳を一本飲み終えたところで迷些は言う

「飲み過ぎじゃない?」

「えっ、そう?」

そんなキョトンした顔のネネの後ろには、牛乳瓶による城が築かれ  
ていた

「これくらい普通だけど」(ゴキユゴキユ)「

「普通の人間のキャパシティじゃあそんな城は築かれたりは出来ない……」  
そこで迷些の口が止まる

（待てよ……まさかネネの胸がこんなに大きいのは、牛乳をいつもこれくらい飲んでるから!?）

「お〜い迷些〜？ドス黒いオーラが体から滲み出てるよ……」

まさか、あのとときの狂戦士ハイサーカーに!?と一人戦慄するネネたちの目の前をものすごい剣幕顔で遊介が走り抜けて行った

「あれ？遊介？」

一体どうしたのだろうか？と思ったが、狂戦士化ハイサーカーした迷些を止めることにいつぱいになり、深くは考えなかった

〜新サテライト

廃工場

今遊介のいるこの廃工場はその昔ネオドミノシティとサテライトがダイダロスブリッジによって結ばれる以前にサテライトの住民がゴミの分別を行っていた場所だ  
止まってしまったベルトコンベアの間を遊介が歩いて行く  
すると、広い空間に出た

広い空間の真ん中は、くりぬかれていて多分ゴミをベルトコンベアで運び、再生可能な物とそうでない物と区別して再生が出来ない物をその空間に捨てていたのだろう

しかし、今の遊介にはそのことなどどうでもよかった問題なのはその真ん中がくりぬかれた空間の真ん中に鎖で巻かれた輪子が吊る

されていたことだった

「輪子!!」

手すりに手を置き乗り出しが届かないどこかに鎖を操作する機械があるはずだと推測し辺りを見渡す

すると、この空間の向かい側にコントロールパネルのような物を見つけたそこに向かおうと、走り出そうとすると

バチイイイ!

行く手を電流で阻まれた

「なっ……!?!」

電流が流れた床を見ると、コンクリートに刺のような物がついた首輪が刺さっていた

(あれは確か……デスベルトか!)

そして、反対側の通路も見ると、あれと同じ物がコンクリートに突き刺さっていた

(どっちゃんでも向こう側に行けないってか?)

すると、向こう側の奥に何かが続いているであろう通路から

「来たか……」

という声が響く

すると、遊介の近くから何かが落ちた音がする  
そっちの方を見ると、大量のデュエルディスクが鎖で巻いた

「その中から一つ選べ」

そう言って自分の腕に装着したデュエルディスクを展開させた

「デメエ……どういっつもりだ」

「見ての通り、貴様にデュエルを申し込んでいる」

「ふざけるな！そんなことのために輪子を攫ったのか！」

「貴様を本気にさせるには必要なことだからだ。心配する必要もない。私に勝てばその女は解放してやる。」

「！本当か!？」

「もちろんだ。しかし、負けた場合は、二人とも死んでもらうがな」

「いいぜ……そのデュエル受けてたつ!?!」

第9話 闇のデュエル！ メディックvs遊介 後編（前書き）

更新が遅れすぎた

すみません！！

書く気力が起こらなかったり、後編でデュエルを終わらせようと思ったのですが無理でした・・・

まあ、これで一応収まりいいかなと思って区切りました

第9話 闇のデュエル！ メディックvs遊介 後編

「私のターン、ドロー」

(・・・まずは小手調べとさせてもらおう)

「私はモンスターをセット。さらに、カードを1枚伏せてターンエンド」

「俺のターンドロー！」

(チンタラやってる暇はない！速攻で倒す！)

「このカードは相手フィールド上にモンスターが存在し、俺のフィールドにモンスターが存在しないとき手札から特殊召喚できる！」  
『エレメントB - ボーンファイヤー』を特殊召喚！」

炎に包まれた額にBの文字を刻んだ骸骨が現れる

ATK 300  
DEF 100

「『エレメントB - ボーンファイヤー』の効果！このカードの召喚・特殊召喚に成功した時、相手プレイヤーに500ポイントのダメージを与える！喰らえ！呪縛炎！！」

骸骨の指先がマントの男目掛けて放たれる

そして、着弾部分が小爆発を起こす

「ぐあ……」

LP4000 3500

威力自体はそこまでではないが当たった部分がバラバラだったため後ろに足が下がる

「まだだ！『エレメントB・ボーンファイヤー』をリリース！『エレメントQ・クイーンブロッサム』をアドバンス召喚！」

淡いピンク色のドレスを着たモンスターが現れる

ATK2300

DEF1200

「バトル！クイーンブロッサムでお前の伏せモンスターを攻撃！！」

クイーンブロッサムが手をかざすと花びらをまじえた竜巻を起こす  
その竜巻はその勢いを殺さず、相手のフィールドの伏せカードを確実に捕らえた後、そのカードを破壊した

「破壊された『素早いモモンガ』の効果発動！私のライフポイントを1000回復させ、さらに、デッキより『素早いモモンガ』を二枚までフィールドにセットする」

LP3500 LP4500

フィールド上に半透明のモモンガが現れ、仲間を呼ぶため鳴きはじめた



すると、相手のデッキから二体のモモンガが飛び出す

(リリース要員か？それとも・・・)

「だが、そんなこと関係ねえ！！クイーンブロッサムの効果！相手フィールド上にモンスターが存在する時、クイーンブロッサムは三回攻撃ができる！！」

「何っ！？」

再び花びらを交えた竜巻をクイーンブロッサムは起こす

だが、今回起こされた竜巻は先ほどよりも巨大で二枚のセットされたカードを吹き飛ばす

「ほう・・・私にライフを回復させる代わりに私のフィールドのモンスターの除去を優先させたか・・・」

LP4500 LP6500

(だが、その行動の裏返しは焦りからか・・・)

「これで俺はターンエンドだ」

「私のターンドロー」

「モンスターをセット。さらに、カードを一枚伏せてターン終了だ」

(これ以上デュエルは長引かせられねえ！このターンで終わらせる！！)

「俺のターン！」

〔銭湯〕

自販機前〕

「遊介！輪子！どこだ！」

僕たち今手分けして姿が見えなくなった遊介と輪子を探していた

「ダメ！銭湯には二人ともいないよ！」

（銭湯内にはもういないのか？なら、探すとなるとキツイぞ・・・）

「せめて・・・遊介か輪子が所有してる物があれば・・・」

「あつたらどうするの？利樹君」

涙目の迷些が聞いてくる

ちなみに、声も涙声だ

「そこから所有者の気を辿っていけば遊介たちの居場所を割り当てられるんだが・・・」

すると、ネネが「あつ」と言って何かを見つけたらしくその場でしやがみ込む

すると、そこには遊介のカードが落ちていた

「これって遊介のカードじゃあ・・・」

「エレメントEX・・・遊介のシンクロモンスターか・・・」

そう言った後、瞑想を開始する利樹

(真道流気流詮索術・・・導蛇!！)

手の中に気のできた蛇を造り出し、遊介の気を探らせる

そして、段々と頭の中で景色が入れ代わってゆき、最終的に工場のような場所で灰色のようなマントを身につけた男とデュエルしているヴィジョンが頭の中に広がる

(・・・?なぜ遊介はマントを着た男とデュエルをしているんだ?)

遊介の身に起きている事態について正確に把握しきれない利樹  
しかし

(行かなければならない気がする)

「迷些、ネネ、遊介たちの居場所がわかった」

「本当!?!」

「行きましよう!利樹様!」

〈廃工場〉

「俺は『エレメントF・フラッシュ』を召喚!」

スパークマンに似た両手に剣を装備したモンスターが現れる

ATK1400  
DEF1200

(今俺の手札には速攻魔法『魂格闘・ソウルバトル』があるこれは相手にダレクトアタックを決めると、自分フィールドのモンスターを犠牲にする代わり犠牲にしたモンスターの元々の攻撃力のダメージを与え、さらに、もう一枚の速攻魔法の発動条件を満たし、このターンであいつのライフを0にできる！)

「バトル！クイーンブロッサムでセットモンスターを攻撃！ブロッサムストーム！」

花びらを巻き込んだ竜巻が相手のモンスターを襲う  
すると、破壊されたモンスターが半透明で現れ狼の遠吠えのように  
鳴く

「この瞬間！『ハイエナ』の効果発動！デッキより『ハイエナ』を  
二体特殊召喚する！」

マントの男の後ろの通路から二匹の狼のようなモンスターが現れる

「だが、クイーンブロッサムの前では無意味だ！クイーンブロッサム  
追加攻撃！ブロッサムストームセカンド！」

二つに割れた竜巻が二匹のハイエナを壁にたたきつけ倒す

「行け！フラッシュ！ダレクトアタック！」

(通れ！)

フラッシュが手摺りを台にしてマントの男に仕掛ける  
そして、正確にマントの男の胴体を切り裂く

「ぐああ・・・」

LP6500 LP5100

「よし！手札から速攻魔法『魂格闘・ソウルバトル』発動！こいつは自分フィールド上のモンスターをリリースして相手にリリースしたモンスターの元々の攻撃力の数値を相手に与える！」

「ならば、そのカードにチェーンし、畏発動！『ダメージコンデンサー』！」

（このタイミングでモンスターの召喚！？）

「コストとして手札のカードを一枚墓地に送り、私が受けたダメージ以下の攻撃力を持つモンスターを特殊召喚する！現れよ！『バグ』！」

鼻が長い蟻食いのようなモンスターが現れる

ATK0

DEF2300

「これで『ダメージコンデンサー』の効果は終了だ」

「なら、チェーン1の『魂決闘・ソウルバトル』の効果！俺は『エレメントQ クイーンブロッサム』をリリース！よって、クイーンブロッサムの元々の攻撃力2300をダメージを与える！」

クイーンブロッサムが中身が抜け、半透明の霊体になりマン  
トの男の懐に突っ込む

「『バグ』の効果発動！カード効果によって発生するダメージを全  
て0にし、その数値を『バグ』の攻撃力に加算する！」

「何ッ!?」

バグが鼻を高く上げ、空気を吸い込む  
すると、霊体のクイーンブロッサムの体がバグに吸い込まれる

「だが、『バグ』は攻撃力として加算できる数値には上限がある。  
その数値は1000以下それ以上の数値が加算されれば、新たな効  
果が発動する」

ゲップをするバグの鼻から白い色の煙のようなものがマントの男を  
包む

「ダメージが1000を超えた場合は、その数値1000につきデ  
ッキからカードを1枚ドロウする。バグが吸収した数値は2300  
よって、デッキから2枚ドロウする」

バグ

ATK 0 300

「くっ……まさか、効果ダメージがこんな風に利用されちゃう  
だなんて……」

「どうした？お前のこのターンまだやることはあるのか？ないのな  
らさっさとエンド宣言をしろ」

「・・・カードを1枚伏せてターンエンド」

「私のターンドロ」

(もう奴から引き出せる実力はないか・・・)

「ならこのデュエル終幕とさせてもらう。手札より魔法カード発動。『ツングースカ・エクスプロージョン』このカードの効果は手札のカードを三枚墓地に送り、自分フィールドのカードを墓地に送る。その後、私が墓地に送ったカード枚数分相手フィールドカードを破壊する」

「なっ!?自分を犠牲にして発動する破壊系の魔法カードだ!?」

その言葉の後に地震が起こる

その地震によって体のバランスが崩れ手すりを支えにすると、遊介は地震によって発生した割れ目から無数の手が現れた

その無数の手はマントの男のフィールド上のモンスターと伏せカードを掴み割れ目へ引きずり込む

その後、割れ目の中から2本の鎖がフラッシュの体と伏せカードを絡ませ同じく割れ目へと引きずり込む

「くっ・・・(一瞬でフィールドがから空きにされちまった)」

「さらに、私の手札が1枚の時、このカードを手札から特殊召喚できる。現れる!『紅蓮の鬼王』!」

腕を4本生やした真っ赤な鎧をつけた鬼のようなモンスターが現れた

ATK 2800  
DEF 500

(クソツ！ライフがまだ無傷だからって油断していたがちよつとやばくなってきたな・・・ツ)

「今さら後悔したところでもう遅い。ゆけ！『紅蓮の鬼王』で炎城遊介！貴様にダイレクトアタック！」

鬼王が背中に備え付けられた斧を4本の腕で掴み取り、手すりを利用して遊介の元に跳ぶ  
そして、その4本の斧の射程圏内に入ると同時に物凄い勢いで斧を振り下ろし遊介の体を切り裂く

その瞬間、体を焼くすような激痛が遊介を襲った  
遊介は最初その激痛の原因がわからなかった  
ただ、何かが体中を駆け巡り、口からドロリと赤黒い液体が流れ床に落ちた

そこで遊介は理解した  
これはさつき攻撃を仕掛けたモンスターの斬撃が原因だと、

「がああああ・・・！？」

LP 4000 1200

マントの男はあまりの痛みで崩れる遊介を蔑むような目で見ていた

(所詮は一介の高校生か・・・)

勝負は決したといわんばかりにデュエルディスクを構えた腕を下ろす



「ではデュエル前に言った通り炎城遊介とその娘仲良く葬つてやるが、その前に我が主<sup>あるじ</sup>の命により貴様が所有するロストカードを回収させてもらおう」

マントの男は、遊介のいる向こう方に歩きだす

すると、バチイイイ！とデュエルが終了もしくは相手の戦意消失の場合のみ電流が止められるはずのデスベルトがマントの男の行く手を遮る

(なに・・・?)

マントの男は直ぐさま遊介の方を向く

すると、そこにはまだかろうじて意識を繋げている遊介がてすりを掴んで立ち上がるうとしていているところだった

(ほう、精神は頑丈に出来ているというところか・・・)

元の立ち位置に戻るマントの男

そして、何事もなかったように淡々とデュエルを進める

「バトルフェイズを終了、メインフェイズ2に移行。そのままターンエンド」

やっと立ち上がることでできた遊介の目は焦点が合せることができず、視界はグラグラし続ける

「・・・・・・・・」

小さな声で囁くと震える手でカードをドロウする

(だめ・・・だ・・・カー・・・ドが・・・よく見・・・えな・・・い)

再び全身の力が抜け手すりに全身の体重を掛ける  
遊介は今度こそ意識がなくなつた

「遊介!！」

すると、凜とした声が工場内に響いた  
ピクンとカードを持つ指先が動く

「なっ・・・!?」

マントの男も予想外の出来事に動揺される  
なぜならこの工場内に青髪の整つた顔立ちの少年と黒いロングヘア  
の少女と自分の背丈ぐらいある髪を両端で結んだツインテールの  
少女、3人が誰も立ち入ることのないはずの工場にいたからだ

(なぜ奴らがここに!?そもそもなぜここがわかつた!?)

困惑するマントの男をよそに利樹は必死に遊介を呼び続ける  
しかし、遊介は無反応のままだった

「くっ、貴様!遊介に何をした!！」

利樹の大声が工場内に響く

「ただのデュエルさ・・・命を賭けたな・・・」

「ふざけるな!何が命を賭けたデュエルだ!今すぐこんなことをや  
めろ!！」

珍しく激怒する利樹にマントの男はこう言った

「殺<sup>や</sup>れ」

すると、後ろに待機していた真っ赤なモンスターは砲弾のように高速に跳ぶ

一瞬で利樹たちの目の前に真っ赤なモンスターが詰め込み片手で斧を振り上げる

ズドオオオオオオ！！

廃工場一帯が揺れるような感覚が近くにいた迷些とネネを襲う

「わわわわわわ・・・」

「利樹君ッ！！」

粉塵が利樹の姿を隠す

だが、マントの男は確信していたあの男の体は死んでいると

しかし、現実はそのはいかなかった

なぜなら振り下ろされた斧は利樹の体の中心を裂くはずだったのに  
かわからず、そこには無傷の利樹が今もマントの男から目を離さず  
にいた

そして、足元のコンクリートには長さおよそ3メートルある斧が利  
樹から数センチ隣に刺さっていた

「バカな！？（私の力が作用していたはずだ！まさか、奴は恐怖を  
感じなかったのか！？）」

「そうか・・・遊介を気絶までに追いやった原因はお前にあるのか・・・」

「ッ・・・!?!?」

(いや待て!あの男からの事前の調査から上条利樹には、格闘術から読心術に至るまでの技を習得している話だったはずだ。ならば、奴を気にすることは単なる時間の無駄になるな)

すると、利樹は相手の変化を感じ齒噛みする

(思ったより落ち着くのが早い・・・!)

時間稼ぎをしていた利樹からすれば、芳しくない状況に陥った

(通常スタンディングデュエルにおいてお互いに割り振られた思考時間は5分、さらに、対戦相手から戦意が感じられない場合、コンピュータが自動的にデュエルの勝者を決定してしまう・・・今のところコンピュータはどうか騙されているが、相手の性格からしてコンピュータに関係なく、勝敗を決されてしまう・・・!)

(あとは、遊介の精神力にかかっている・・・頼む!立ち上がってくれ遊介!)

最善を尽くした利樹には、もう祈ることしか出来なかった  
後ろの二人もそうだった

そして、その答えはすぐに返ってきた

「なん・・・だと・・・!?!?」

驚愕するマントの男の目の前には、確かな足取りで立ち上がった遊介の姿があった

真つ暗な闇の中で声がした

懐かしい声がした

もう何年もこの声を聞いたことはなかった

今は亡き、少女の声

その声はしきりに俺に呼びかけた

『遊介君・・・遊介君・・・』

俺はその声を頼りに手を伸ばすと、何かが俺の手を包んだ感覚がしたそれは、とても柔らかく以前にも触れた覚えのある感覚だった俺が決して忘れてはいけない女の子の手だった

「そうだよな・・・俺は2度も約束を破りそうだったぜ・・・日和・・・」

「なん・・・だと・・・!?!?」

俺は、1度だけ約束を破つちまった

それに対して言い訳はない

だけど、今俺のせいで巻き込まれている輪子を見捨てる訳にも諦める訳にもならない

なら、俺のとれる行動は一つだけ!!

「俺の名は炎城遊介！俺は正々堂々デュエルでお前をブツ倒す！！」

これは俺の今の決意

見ててくれよ日和！！

「俺は『エレメントR ロックマン』を守備表示で召喚！」

右腕がやたらデカイ岩石のモンスターが現れた

DEF 1600

ATK 1600

「カードを一枚伏せてターンエンド！」

「私のターン」

（なぜだ！？奴から恐れのお感情が乏しくなってきた！これでは、私の力が通用しない！）

「『紅蓮の鬼王』の効果によって私はドローフェイズにドローできない」

（これについて考えるのはあとだ！まずは、私の使命を果たす！！）

「『紅蓮の鬼王』で『エレメントR ロックマン』に攻撃！！闘血の滾り！」

4つの腕で斧を握みロックマンに襲い掛かる

「『エレメントR ロックマン』の効果！1ターンに1度戦闘によって破壊されない！」

大きな右腕が4つの斧を止める

「くっ、ターンエンドだ」

「俺のターン！ドロー！！」

（俺の手札にあのモンスターを倒せるカードはない・・・だが、こいつを使えばあいつのライフを十分に減らせられる！）

「『エレメントC サイクロンコマンダー』を召喚！」

緑のロングコートを着た左目を風が舞い上がる様を表現した右側が欠けた仮面を付けたモンスターが現れる

ATK 1500  
DEF 1200

（あのモンスターは、過去の記録から『エレメント』シリーズの数少ないチューナーモンスター・・・あのモンスターを使い、シンクロ召喚するつもりだろうが、それによって強力なモンスターを召喚できて私の『紅蓮の鬼王』の前では無意味だ）

そのように予測したマントの男は、余裕を保ったしかし、その予測は外れることとなった

「『エレメントC サイクロンコマンダー』の効果発動！コマンダーはこのカードと相手フィールド上のモンスター一体を手札に戻す

「ことができる！」

コマンダーと鬼王の真下から竜巻が発生し、お互いがその竜巻によつてお互いの手札に戻る

「なっ!?!」

予想とは違う展開に困惑するマントの男

「フツ」

余裕の笑みを浮かべる遊介

「いくぜ・・・マント野朗・・・『エレメントR ロックマン』を攻撃表示にして・・・攻撃だ!!ゆけ!ロックスタンプ!!!!」

ロックマンが手摺りを利用して一気に距離を詰め、マントの男の眼前に現れ、バカデカイ腕でマントの男の鳩尾にロックマンのフルパワーを叩き込む!

「は・・・ッ!!!」

LP5100 3500

あまりの衝撃に足が震えるマントの男

(くっ、この痛みこの私があの小僧に恐怖を抱いているというのか!?!)

そう思うと体全身に震えが奔る  
これは恐怖からか?と思っただが





DEF 500

「さあ、礼の時間だあ!!!『紅蓮の鬼王』!殺れ!!!」

4本の腕の手に掴ませた斧がロックマンの体を切り裂く

「がああああああああ!!!」

LP 1200 100

(やばい!いろんな意味でこれはやばい!)

「ヒヤハハハハ!私はこれでターン終了だ」

「俺のターン!ドロー!」

(だめだ!これじゃ勝てない!)

「ロックマンを守備表示に変更し、ターンエンド」

「私のターン!しかし、『紅蓮の鬼王』の効果によりドローできないが、メインフェイズ!『メタモルポッド』を反転召喚!」

丸い壺に一つ目のモンスターが現れる

ATK 700

DEF 600

「『メタモルポッド』効果発動!お互いの手札を全て捨てる。その後、お互いのデッキからカードを5枚ドローする!」

壺の中の一つ目は、大きく口を開け、遊介の手札を全て持って行く  
「お互いに5枚ドロー」

(バウンス効果持ちのコマンダーを捨てられたのは痛いがおかげで  
シンクロ召喚への布石が整ったぜ！)

「クククク、そのデクノ坊にはもう退場してもらおうとするか。速攻  
魔法！『種族偽装』！」

モンスターの種族欄に上から別の種族を書かれたシールが貼り付け  
られるイラストのカードが発動する

「このカードは自分フィールド上のモンスターの種族をそのモンス  
ターが存在する限り変更できる効果だ。よって、『紅蓮の鬼王』の  
所属を獣戦士から戦死族に変更！そして、装備魔法！『アサルト・  
アーマー2』！」

紅蓮の鬼王の周りにオレンジ色のオーラのようなものが纏わり付く  
「本来『アサルト・アーマー2』は戦士族専用装備魔法だが、現在  
『種族偽装』の効果により『紅蓮の鬼王』は戦士族に種族を変更し  
ている」

(『アサルト・アーマー2』か・・・厄介だな・・・)

「さらに、装備魔法！『ジャンク・アタック』を『紅蓮の鬼王』に  
装備！」

(『ジャンク・アタック』だと！？やばい！これじゃあこのターン

で終わらせられちまう!」)

「覚悟いいか?・・・さあ、楽しいデュエルの幕下ろしだア!」

紅蓮の鬼王が跳びあがる

そして、標的を切り裂く斧を構え振り下ろすが、ロックマンはその攻撃を一度受け止める

(防いだか・・・!?)

「だが、『アサルト・アーマー2』があることを忘れるなよ・・・  
『アサルト・アーマー2』効果アア!!自分モンスターをリリース  
することでリリースしたモンスターの攻撃力を吸収し、リリースし  
たモンスターの攻撃権を奪う!!」

メタモルポッドが素粒子化し、紅蓮の鬼王に吸収されていく

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

ATK 2800 3500

「追撃だアア!!」

再び振り下ろされた斧はロックマンの体を斜めから引き裂いた

「止めの『ジャンク・アタック』の効果!破壊したモンスターの攻  
撃力の半分のダメージを受けるおおお!!!!」

ロックマンの残骸が遊介を襲い掛かり、遊介の場が煙に包まれる

「遊介……ッ！」

「遊介君……」

「遊介……」

後ろの三人は煙で見えなくなった遊介を心配する

「……介……？」

今の攻撃で意識を取り戻す輪子

その場の全員の遊介に視線を送る

そして、煙はだんだんと周りに散らばっていく  
そこには、今も立ち続ける遊介の姿があった

「ナニッ!？」

驚愕の事態にマントの男は動揺する

「ふう、今の攻撃、正直言って危なかったぜ……だが、あの時俺  
をこいつを使わせてもらったぜ」

LP100

遊介の手にある一枚のカードそのカードにはこう書かれていた

エレメントP ファントムと

「新たなエレメントシリーズのカードだと!？」

驚愕の色を隠せないマントの男の態度に遊介は何かを感じ取った

「その口調……こいつらのこと知ってるのか？」

（しまった！このことはまだ触れさせるべきではないことだった！）

遊介の質問に無言を押し通すマントの男

「まっ、このデュエルを終わらせた後にたっぷりと聞かせてもらおうぜ……『エレメントP ファントム』の効果発動、手札から墓地に送ることで一度だけダメージを0にする」

遊介の周りの煙が集まり、笑い顔の仮面をつけた鎌を装備したモンスターが現れ、マントの男を嘲笑い、遊介の墓地へ行く

「……カードを2枚伏せターンエンド」

「俺のターン！ドロー！」

「魔法カード発動！『ミステリックシンクロ』！このカードは自分フィールド上にカードが存在しない時、自分の墓地に存在するチューナーとチューナー以外のモンスター2体を選択し除外する！そして、除外したモンスターのレベル合計と同じシンクロモンスターをエクストラデッキからシンクロ召喚扱いで特殊召喚する！俺は墓地のレベル3チューナーモンスター『エレメントF フラッシュ』とレベル5の『エレメントQ クイーンブロッサム』を除外シンクロ！」

遊介の墓地から緑の輪と5つに輝く光の玉が飛び出し、光満ちる

「暗闇の世界に希望の光が世界を満たす！我を導け！」エレメント  
EX ソーラーシャイニング！」

背中に大きな輪をつけ、肩幅の大きな武具を着たモンスターが現れる

ATK 2800

DEF 2300

「ソーラーシャイニングの効果！シャイニングがシンクロ召喚に成功した時、シャイニング以外のモンスターの効果を無効し、攻撃力を800ポイント下げる！シャイニーレイズ！」

ソーラーシャイニングの背中の輪が誰もが目を塞ぎたくなるような輝きを放つ

『グオオオオ・・・！』

ATK2800 2000

鬼王もその光に当てられ目を塞ぐ

「『アサルト・アーマー』をソーラーシャイニングに装備！」

ソーラーシャイニングにオレンジ色のオーラのようなものが纏われる

ATK2800 3100

「『アサルト・アーマー』の効果！『アサルト・アーマー』を墓地に送り、このターンのソーラーシャイニングの攻撃を2回行うことが出来る！」

「くっ！」

「ソーラーシャイニングの攻撃！ホープスラッシュ！」

ソーラーの元に無数の光が集まり光り輝く一つの剣生み出す  
そして、ソーラーの背中の輪から無数の翼のようにも見えるものが  
壁に突き刺さる

それを利用してマントの男のモンスターへ攻撃を仕掛ける

「リバースカードオープン！『ハーフシャット』！」

「何！？」

「『ハーフシャット』の効果を『エレメントEX ソーラーシャイ  
ニング』を対象に使用！これでソーラーシャイニングにこのターン  
戦闘耐性を付ける代わりに攻撃力を半分にする！」

ソーラーシャイニングの剣が魔法の影響により短くなる

ATK 2800 1400

「させるか！速攻魔法発動『収縮』！これで『紅蓮の鬼王』の元々  
の攻撃力を半分にする！」

紅蓮の鬼王の体が小さくなる

ATK 2800 1400 600

「なんだと！？」



LP3500 2700

「まだまだ！ソーラーの追撃！」

マントの男の目の前で物凄い光が輝く

「ぐあああ・・・」

LP2700 1300

（くっ、とどめまではいかなかったか）

「カードを2枚伏せるターンエンド」

「私のターンドロ！魔法カード発動！『死者蘇生』！墓地より蘇れ！『紅蓮の鬼王』！」

（またかよ！？）

「さらに、リバーズカード発動！『スキルサクセサリ』！『紅蓮の鬼王』の攻撃力を400ポイントアップ！」

鬼王の体の所々の筋肉が膨れ上がる

ATK2800 3200

「さらに、私のフィールドに鬼王以外のモンスターが存在しない時、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力の半分を吸収する！バトル！ソーラーシャイニングに攻撃！」

鬼王の咆哮と共に4本の内の2本をソーラーに向かって飛ばす



鬼王の背中に生えた血の羽が遊介を襲うが、それも阻止された

その原因は2体の半透明のモンスターが血の羽を押さえつけていた

「『残留思念』このカードは・・・まあ、ある程度お前は俺のデッキを把握しているらしいから説明はいらさないよな？」

「くっ、だが、お前のモンスターは『0ガッツ！』の効果で攻撃力は0！手札も場もその攻撃力を保護するカードない！それにいいことを教えてやるう。私の墓地には『スピリットクラッシュ』があるこのカードを除外すれば私のモンスターは貫通効果を得る！つまり、お前に次はない！」

「確かに次が俺にとって最後のターンだ。だがなその1ターンさえあれば奇跡は起こせる！カードが1枚あれば世界がガラリと姿を変えられる！さあ、いくぜ！俺のラストタアアアアン！！！」

遊介の鋭い引きが空気を切り裂く

「・・・」

場の全員が息を飲む

（遊介・・・何を引いた・・・！）

「・・・」

引いたカードゆっくり自分に向ける

それは1枚のモンスターカード

他人から見れば変哲もないただのカード

しかし、遊介にとってはとある決意を約束を交わしたカード

(力を貸してくれ！日和！)

「俺はフィールドのレベル7以上の光属性モンスターリリースした場合のみに特殊召喚できる！時の枷を破り、約束のため羽ばたけ！現れる！！」『時計仕掛けの女神』！！！」

ソーラーを包む大きな光が奔る

その光はだんだんとある形へ変えてゆく

純白の羽に時計の針のように回転し続ける針の杖を携え、青を基調として胸から臍に掛けて真ん中を切り抜かれた服装

両手、両足、首に鎖の付いた首輪や腕輪を着けた天使を面影を思わせる姿をしていた

ATK 2500

DEF 2300

「これがお前を倒す俺達の切り札だ！」

第9話 闇のデュエル！ メディックvs遊介 後編（後書き）

今回の最強カード

紅蓮の鬼王

レベル7

炎属性

獣戦士族

効果；自分フィールド上にカードが存在せず、手札がこのカード1枚のみの場合このカードを手札から特殊召喚することができる。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

自分はドローフェイズ時にカードをドローすることができない。

自分の手札が0枚のときこのカードは破壊されない。

自分フィールド上にこのカードしか存在せず、このカードが攻撃を行う時、

攻撃対象モンスターの攻撃力の半分の数値だけこのカードの攻撃力をアップする。

ATK 2800

DEF 500

このカードは人間の底辺さんからいただいたオリカです  
提供ありがとうございます！！（攻撃力を若干変更させていただきました  
きました。すいません）

現在も感想やオリカをお待ちしております

第10話 決着！・・・そして、  
(前書き)

後日談です

## 第10話 決着！・・・そして、

前回までの状況

マントの男

LP 1300

フィールド

『紅蓮の鬼王』

手札：0

炎城遊介

LP 100

フィールド

『時計仕掛けの女神』

手札：0

「これがお前を倒す俺達の切り札だ！！」

そう宣言する遊介の隣に時計仕掛けの女神が降り立つ

「わざわざロストシリーズのモンスターを捨ててまでただのモンスターを召喚だと？炎城遊介・・・お前は私を侮辱しているのか？」

怒り満ちるマントの男は遊介に言った

しかし、それをものともせず遊介はすぐに答えた

「侮辱してんのはお前のほうだろ。お前の言うロストシリーズがなんだかは知らない。貴重なカードかもしれないが、カードの価値を

決めていいのはお前じゃない！そのカードを持っている決闘者一人一人にあるんだ！！」

「ふん！くだらん！デュエルモンスターの神とも呼べる者から創造されたカードがその貴様のモンスターと同等だと！？笑わせる！所詮は一介の高校生か・・・」

いままであれ程燃え上がっていた闘志が一気に消える

マントの男はもうこのデュエルを続ける意味がないもう終わりだとしかし、遊介の余裕の表情に何か引つ掛かる

「・・・なぜ笑っている？」

「だってお前、何も分かってないって思ってたさ」

「ナニ？」

「お前はカードと向き合っていない。だから、自分の犯した失敗にも気づかずにいる。そして、それがどれほど愚かだったか教えてやる！」

「何を言うかと思えばただの戯言か・・・いいか！私のフィールドには手札が0の時、カード効果で破壊できず、私のフィールドに他のカードがない場合、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力の半分を奪う『紅蓮の鬼王』がいる！貴様のそのただのザコカードでなにができる！？」

「なら見せてやるぜ・・・俺の仲間の力を！『時計仕掛けの女神』の効果発動！1ターンに一度、相手モンスターを手札に戻す！その後、相手の墓地に存在するモンスターを1体、相手フィールドに特



殊召喚する！  
時間巻き戻し！！  
タイムリターン

時計仕掛けの女神が杖をかざす  
すると、杖の針が反時計回りに回転する  
そして、紅蓮の鬼王の体が消えていく

「なっ！？鬼王がっ・・・！？」

「蘇れ！『バグ』！」

時計仕掛けの女神が杖を地面につける  
すると、岩盤を突き破りバグが現れる

ATK 0  
DEF 2300

「なんだ・・・そのモンスターの効果は・・・」

「これがお前がバカにしたただのモンスターの力だ！ゆけ！『時計仕掛けの女神』の攻撃！時空間断絶！！」

バグが長方形状に空間が切られ、バグがその中で潰され爆発し、その風圧でマントの男は自分の後ろに繋がっている廊下へ跳ばされる

「そんなバカ・・・な」

LP 1300 0

その言葉を残し意識を失った

「やったー！！遊介の勝ちだー！！」

ネネは両手を挙げて、遊介の勝利を喜び3人が遊介の元に走り寄ると、近くに来たのを感じ取ったのか  
若干息があがりながら振り向く

「大丈夫か？遊介」

「まあな・・・」

これで一件落着だねと両手を合わせて笑顔で迷些が言うと

「コラー！！私を忘れるなー！！」

といつまでも鎖に繋がれたまま吊るされていた輪子が叫んだ

「うっ、ひどいよ。みんなして私のこと忘れるなんて・・・」

涙目で利樹のブレザーを上から羽織っている輪子が呟いていた  
ちなみに、遊介は最初にブレザー着るか？と輪子に言ったが汚いからいいと言われ、あの過酷なデュエルより深い心の傷を負っていた

「よし、後のことは警察に任せて僕たちは寮に戻ろう」

携帯を使って警察に現場に来てもらうように連絡した利樹に賛成したみんなだったが、遊介は何かを思い出したように

「・・・いや待ってくれ」

とみんなに制止を掛けた

「何かまだやることがあるの？」

とネネが遊介に聴いた

その問いに遊介は行動で答えた

「おい、起きてるんだろお前」

廊下の奥で横になって倒れていたマントの男に言う

「フツ、さすがだな」

目だけこちらを向く

「お前には聞きたいことが山ほどある。さあ、答えてもらうぜ」

「敗者には勝者の意見を拒否する権利はない。なんでも聴け」

「じゃあ、まずお前が言う『ロストシリーズ』って何だ？」

「・・・『ロストシリーズ』とは、デュエルモンスターの生みの親、ペガサス・J・クロフォードが生涯の最後に創造したと言われる幻のカードのことだ」

その言葉に誰もが驚くを隠せなかった

ペガサス・J・クロフォード

デュエルモンスターズというカードゲームを作り出した張本人

その中でも『幻神獣』と呼ばれる3枚の神のカードを創り、のちにその行為を誤りだったと答えていた

「そんなはずはない！」

反論したのは利樹だった

「ペガサス・J・クロフォードは、伝説のキング・オブ・デュエリスト武藤遊戯に敗北した後、第一線から退いた！ 仮にその後、『ロストシリーズ』を創ったとしても彼はシンクロモンスターが出る前に病死したはずだ！ なのに遊介の『エレメント』たちは彼が存在していた時にないはずのシンクロモンスターがある、これはどう説明する！？」

完璧な質問だった

ペガサスはシンクロ召喚について何も知らずに死んでいったのになぜ『ロストシリーズ』の一部とされている『エレメント』があるのか

誰もが答えられないと思っていたがマントの男は即答した

「簡単なことだ。ペガサス・J・クロフォード自身がシンクロ召喚のシステムを確立したからだ」

「な・・・に？」

訳が分からなかった

ペガサスの死後、シンクロが広まったのは数年後、確率的には可能性はあったが病に苦しみながらただひたすらデュエルモンスターの新システムを考えていたなんて思えない

「信じれないなら今は信じなくてもいい。しかし、時が訪れればマスターはお前たちの目の前に現れ、全ての真実を曝け出すだろう。」

炎城遊介、貴様の父の死の謎もな」

「なん・・・だと・・・？」

突然の告白に動揺する遊介

「それはどうということだ!？」

遊介がマントの男の襟を掴むが、

「これ以上の質問にはもう答える気はない」

そう言つて改造されたデュエルディスクを遊介に見せ付ける

すると、ディスクの液晶画面にデジタル数字で何かのカウントダウンが始まっていた

「私の名はメディック。覚えておけ、いずれ私以外の刺客がお前の元に来るだろう。12の使徒たちがな」

遊介はその言葉を聞いた後、マントの男・メディックから一気に離れた

ディスクの液晶画面に映っていた数字の意味を理解したからだ

「みんな早く逃げる!!」

その言葉と同時に遊介の後ろから爆発が起きる

その爆風を後ろから受けた遊介の体は吹き飛ばされさつきまで死闘を繰り広げられていた空間のぽっかりとど真ん中が空いた場所に落ちる

「遊介!!」

叫んだのは輪子だった

バシヤツと音がした

どうやら下には水があつたらしい

「ゲホツ、ゲホツ俺は大丈夫だ!それより早く逃げろ!今の爆発で脆い建物が倒壊するかもしれない。俺も別の出口から外に出るから心配するな!」

ずぶ濡れの遊介は必死に輪子達に叫んだ

「いくぞ、みんな」

利樹はそう言つて輪子を抱えて歩き出した

「ちょっと!利樹君!?!いいの?遊介ほつといて!?!」

抱えられた輪子が利樹に問う

「遊介が大丈夫と言つたんだ。それにあの程度では遊介も死なない・  
・はずだ。ともかく信じよう」

迷些とネネもその後続く

後ろで置き去りにされた遊介を心配しながら

「・・・」

利樹たちを送り出し、一人残る遊介  
しかし、その呼吸は不安定すぎた

(八八、さすがに無茶すぎたな)

パシャツと遊介は水の中に倒れこむ

そして、周りからバリバリバリと何かが割れる音がした

さっきの爆発で工場一帯の弱くなったコンクリートにひびが入る

(ここもだめか・・・やべえ、体に力が入らねえ)

朦朧とし始めた意識の中、遊介の頭の中では数々の思い出が巡り始めた

(これが走馬灯・・・か・・・)

遊介の頭上で何かが割れ落ちてくる

分厚いコンクリートの塊だ

遊介はもう避けるための体力すらない

もう死ぬのかと一人思うと

スパン、と何かが斬られる音がした

そして、遊介のすぐ近くに誰かが降り立つ

「・・・」

ふざけた仮面をつけた男の袖から刀のような鋭い刃のようなものを袖の中に収める

「君のはまだ死なねちゃ困る」

パチンと音がすると水の中かズズズズズ！と長方形型の立方体が現れる

ふざけた仮面の男が遊介を抱え上げその立方体に入る  
直後、その立方体の上にコンクリートの大きな破片が降り注ぎ、そ  
の立方体は言うまでもなくグシャグシャに潰れた

く?????

どこかの屋上に場間違いな立方体があった  
立方体は独りでに分解された

そして、分解された立方体の残骸の上にふざけた仮面の男と意識の  
ない赤髪の高校生がふざけた仮面の男に抱えられている形で現れた

「到着」

そう言って重い荷物を一気に置くように遊介を落とす

「があ、・・・」

爆発によって背中に受けた火傷の痛みで声が漏れる遊介

「ふう、まだ生きているな」

そう言って倒れたままの遊介をほつといて建物内へ入る仮面の男  
そして、次に屋上に入ってきたのは保健室の先生とデュエルアカデ  
ミアの講師・福山先生だった

「炎城・・・遊介君・・・？」

保健室の先生が信じられないものを見るような目で遊介を診る



「なにこれ・・・まじかから爆発に巻き込まれたみたいなた火傷は・・・」

「早く連れて行った方がいいのでは？」

そう福山先生が催促する

「そ、そうね。福山先生。炎城君を保健室まで連れてきてください。そつとですよ。私はすぐに保健室から包帯と消毒液の他にもいろいろ用意してきます」

「はい、分かりました」

福山先生が遊介を肩で抱えながら答えた

そして、保健室の先生が走って言った後、福山が遊介のポケットに一枚のカードを入れた

エレメントV

遊介の所持しないエレメントの内の一枚

「メディックを倒した償金だ」

そして、遊介のポケットから数枚のエレメントを遊介のデッキから抜き取った

「これは私に助けられた罰金だ」

抜き取られたエレメントはA、G、L、M、X、Yの六枚だった

く???く

「なぜ炎城遊介の元からロストカードを抜き取った？ 我の計画をお前も知っているはずだが・・・」

暗い空間に座っている男は男と通信をしている仮面の男に聴いた

『炎城遊介はメディックを倒したことにより、ロストシリーズの持ち主としての器が確認されたことにより発動した計画ですね？』

「その通りだ。この計画では炎城遊介と『ロストシリーズ エレメント』との連携を強固し、その上で私がそれを打ち破ることで達成する。しかし、エレメントを逆に遠ざけてしまえばその連携までの月日が長くなってしまう・・・」

男は仮面の男を睨む

計画に支障をきたすのであればこの場で消すとしても言いそうな目で

『心配には及びません。これは単なるゲームです』

「ゲームだと？」

『はい、私はこの計画でただ炎城遊介に12使徒をぶつけるのではなく面白くないと思い、あることを思いつきました』

「ほう・・・言ってみる」

『この奪ったエレメントを12使徒の面々にそれぞれ1枚ずつ預け、使徒とのデュエルの時にアンティイとして出すのです』

「・・・」

『そして、使徒とのデュエルに勝てばアンティーカードのエレメントを負ければ炎城遊介のデッキを』

「だがそれでは、あまりにも不釣合いだ。勝負に乗らないかもしれないぞ」

『だからこそ我々が出すアンティーにもう一つ付け足すのです。』  
”  
「真実”を』

「真実だと？」

『そう独自で調査で我々使徒の中に炎城遊介らと関わり合いのある人物が数人いたのでそれを利用していただきました』

「なるほどな。自分たちの知らない真実を餌にするというのだな」  
『さようです』

「ふっ、策士だな。よからうその暇つぶしのゲームやるといい」

『ありがとうございます』

プツンと映像が切れた

くデュエルアカデミア

保健室く

頭や体に包帯を巻かれた遊介は目を覚ました

「いつつ、！・・・ここどこだ？」

目の前に広がっていたのはピンクのカーテン  
すると、遊介が起きたのを見計らってかカーテンが開かれる

「やっと起きたわね」

メガネでショートカットの女性、保健室の雅<sup>みやび</sup>先生だ

「俺、どうしてここにいますか？」

ごくごく普通の質問をする

「福山先生が屋上で倒れているあなたを見つけたからよ」

あっさりそう答えられたが、おかしかった

（俺は確かメディックとかいう男とデュエルして・・・あれ？記憶  
がところどころ抜けてる）

「まあ、いつか」

（助かったならそれでよし。深いことは気にしないでおこつ）

ああそれと、と雅先生が何かを付け足した

「授業に戻るなら彼らにもお礼、言っておきなさいよ」

くデュエルアカデミア

教室

「輪子・・・目元すごいクマだよ」

「アハハ、ネネこそそのクマどうしたの？」

「・・・(ぐつたり)」

三人の少女は完全に疲れ切った顔をして机に座っていた

「どうしたんだ？みんな」

その声にガバツと顔を上げるが

「なんだ・・・ただの利樹か・・・」

「・・・(ぐつたり)」

「ねみゆたしい」

「一ヶ月前とは、比べものにならないぐらいにドライだな」

かく言う利樹も目元にもものすごいクマがあった

「大丈夫かな・・・遊介」

「まさか、あんなにひどいとはね・・・」

「でも、火傷は大きいだけで浅かったって話だけど」

「ともかくまた後で見にいこう」

昼放課にでもいくかと4人で相談していると

「どうしたお前ら」

体中を包帯で巻かれた遊介がいた

「」「」「」

「ん？どうしたみんな黙って」

「心配した自分がバカみたい」

「目元のクマの消し方って知ってる？」

「……（すぴー）」

「なんだ？いきなり場の空気が変わったぞ！？」

明らかな態度の変化にびっくりする遊介

しかし、これが普通か・・・と割り切りその会話の中に入っていった

しかし、思うことが少しあった

記憶の中にあっただュエルの終盤

俺が引いた逆転のカード『時計仕掛けの女神』

なぜあのタイミングで引けたのか、その前にあった日和との会話  
それを思い出し日和との日々を思い出しつつあった遊介であった

第10話 決着！・・・そして、（後書き）

今回の最強カード

時計仕掛けの女神

レベル10：光属性：天使族

効果：このカードは通常召喚できない。このカードは光属性・レベル7以上のモンスターをリリースした時のみ特殊召喚できる。1ターンに1度、相手フィールドのモンスターを手札に戻し、相手の墓地に存在する同じレベルのモンスターを特殊召喚する

ATK 2500

DEF 2300

今回は早めの投稿でしたが、次回はものすごく遅れる予定で10月までには投稿する予定です

今回の話でロストカードの秘密の一部が明らかになりました  
物語りも少しずつ動き始めましたね

ちなみに次回は前回よりできてきている謎の人物、日和と幼い頃の遊介や利樹の話です

お楽しみに？

感想お待ちしております

そして、オリカ、特に今回遊介の元から旅立った『エレメント』のオリカも送ってきてください



一番良かったものはそのまま物語りに入ってきます（確実に）

## 第10話 遊介と初恋

マントの男、メディックの事件から一夜明け、体中に包帯を巻きながら遊介は授業を受けていた

そして、今教卓に立ち授業を行っている先生は福山先生だ

記憶が曖昧でよく分からないが俺を助けてくれたらしい

そんな福山先生の科目は英語だ

はつきり言って俺は英語は好きじゃないし、進んで克服したいだなんて思いもしない教科だ  
つまり、授業をほとんど聞いていなかった

くデュエルアカデミア

屋上

午前中の授業はそんな感じで聞き流し続け現在昼放課の最中だったが、傷も痛いし、お腹もそれほど空いていなかったから食堂には行かず屋上で空をただひたすら見上げていた  
ちなみに、手元に1枚のカードを握っている状況だ

『時計仕掛けの女神』

本来俺の持つカードではないカードのだが、これはとある子との約束のカード

2度と会うことはないであろう少女のカード

その子の名前は風音日和かざね ひより

俺が小学3年の時に知り合いその2年後、この世を去った子の名前だ

「遊介どうしちゃったの？あれ？」

屋上の物陰からたそがれる遊介を観察する面々

「やっぱり昨日のデュエルが原因かな？」

適当に予想してみる一行

「あつ、そういえば遊介の召喚した『時計仕掛けの女神』ってど考えても遊介のデッキと相性悪いはずなんだけど、どうしてデッキに入れてるんだらう」

「そういえばそうだね」

「・・・」

各々適当に言っている中、利樹だけは何かを知っているような表情をしていた

「ん？どうしたの利樹？」

そんな表情に感じてか輪子は利樹に聞く

「ああ、ちょっと考え事をしていただけさ」

考え事？と3人が聴く

「ああ、遊介と『時計仕掛けの女神』の元々の持ち主、風音日和についてね」

あれは輪子がヨーロッパへ旅立って数ヶ月のことだった

「ネオドミノシティ

自然公園」

この自然公園はネオドミノシティ側にあるデュエルアカデミアに設置された施設である

そんな自然公園のベンチに座り、デッキのカードを確認する赤髪の少年・炎城遊介はいた

「これを抜いてこれを入れた方がいいのか？でも、そしたらこれとこれのコンボができなくなるし……」

ブツブツ言いながらベンチに数枚のカードを置いたり、手に取ったりとしていると急に突風が吹きベンチの上に置いてあったカードが飛ぶ

「げっ!!」

カードをすぐにポケットにしまい飛んでいったカードを取りに行く遊介

「ほっ！逃がすかつ!!」

カエルのように飛び跳ねながらカードを全て回収する  
気付けば自然公園にあるちよつとした林にいた  
さっさと戻ろうと今まで来た方向に振り向くと

「……!!」

林の奥のほうで何か聞こえた

「なんだ？」

好奇心に押されて行ってみるとそこには数人の女子生徒が一人の女子生徒を取り囲み、今何かを柵のある池に向かって投げ捨て数人の女子生徒が嘲笑いながらどこかへ行ってしまった

「イジメか・・・胸くそ悪いな」

遊介の友達の中にも今の彼女と同じようにイジメを受けていた男子生徒を知っている

今ではもうそんなことはないが、いつ見ても嫌になる光景だからこそ、今も泣いているその子を放つとけず近くに行く

「大丈夫か？お前」

顔を俯かせたままで表情がわからない

「ほら泣き止めよ。あいつらに何されたんだ？」

遊介は屈んでポンとその子の肩に手を乗せる  
しかし、何も言わない、ただ、池を指差す

（確か・・・あそこにこの子の何か投げ込まれたんだよな）

ふー、と息を吐いてブレザーをその子の上に被せる

「・・・？」

何かが上に覆いかぶさったことに気付き顔を上げると、遊介が柵を飛び越えて池に入った

「うおおおお！やっぱり冷てえ・・・」

初夏とはいえさすがに池はまだ冷たい

「ええつと、ここか？」

制服を濡らすことも無視して池の中に手を突っ込み続ける

「なに・・・してるの？」

「ん？何ってさっきここに投げ込まれた物を探してるんだよ・・・  
これか？・・・ちがうな」

拾っては捨て拾っては捨てるの連続

すると、さっきまで泣いていた少女はボソツと呟いた

「・・・もう少し右・・・」

「・・・これか！」

遊介は手の中に小さい物を掴んだ

真っ白なシルクのリボンに鈴が二つ付いたそれは、確かにさっき少女たちが投げたものだった

「よし！これでいいな。待ってる今そっちに行っ！？」

泣いている少女の元へ戻ろうとした遊介はその途中ですべり、派手

に転ぶ

「だっ、大丈夫!？」

さっきまで泣いていた子が遊介を心配し柵を越えて池に入ろうとするが、足を柵に引っ掛けてしまい結果として池に転がり入る  
そして、お互いずぶ濡れの二人は顔を見合わせて笑った

彼女の名は風音日和

遊介の初恋の相手の最初の出会いだった

第10話 遊介と初恋（後書き）

今回は2ページでした

なんだか今回切りのいい終わりだったので風音日和の話を2話にして投稿したいと思います



第11話 遊介と別れ（前書き）

遊介と日和の過去の後編です  
最後のあれは狙っていません

## 第11話 遊介と別れ

ネオドミノシティにあるとある一軒家

そこにはENZYUと書かれたその家は紛れもない炎城遊介が幼少期から小学校卒業まで過ごした家であった

そして、今帰宅したとある事情でず濡れの遊介は窮地に立たされていた

「さあ・・・なんで濡れているのか説明して頂戴」

茶色の髪色に髪をフワフワさせている専業主婦こと炎城沈利えんじょうしずりはドス黒いオーラを発しながらニコニコしてしながら遊介に事の事情を聴く

「ええつと、かくかくしかじかで池で転びました」

汗をたらたら流しながら言い訳してみるが、次の瞬間、遊介の胸倉を掴み投げ飛ばされた

「ぎゃああああああああああああああ!!!」

風呂場近くの壁まで吹き飛ばされた遊介は痛み叫ぶ  
それをほっとして沈利は遊介の方から左のほうに鈴付きのリボンを巻き、遊介と同じく濡れている風音日和の方へ向く

「風音日和ちゃんだっけ？」

「は、はい...」

さっきの行動に驚き声が裏返る日和  
対して沈利は柔和な笑顔で

「大丈夫、家のバカ息子みたいに投げ飛ばしたりしないからあがってあがって」

小さい可愛らしいスリッパを出して日和を家に入れる

「日和ちゃん、濡れて寒いでしょ？着替え用意しておくからお風呂でシャワー浴びてきておいで」

背中を押される形でお風呂場に入れられる日和

「あの、いいんですか？こんなことしてもらって？」

「いいのいいの、そのバカ息子を心配して濡れちゃったんじゃあ親の私も気がでないから・・・遊介・・・あんたも入んなさい」

「ちょっと待てよ、母さん！今日和が入ってるから無理だ！！」

「ナニ言ってるんだい！小学生の癖に！まだ、そこまで成長してないんだからいいのよ！」

「そんな無茶な！！」

親子二人で風呂に入れ入らないと小競り合いを続けていると

「あの・・・終わりました・・・」

「早ッ！！」

3分もしない内に日和が出てきた

ちなみに、服装は沈利が用意した女の子物のパジャマ（父が男物と間違えて買ってきたためたまたま家にあった、サイズも偶然ぴった

り）  
「ありがとうございました・・・」

俯きながら照れているのか顔が赤かった

「遊介・・・入ってきなさい」

「はい」

沈利は若干残念そうな声を出しながら遊介に促した

（数分後）

濡れた制服は洗濯で洗われ、それが乾くまで日和は家にいることになった

ちなみにその間、俺と日和はデュエルすることになった

「『ゴギガ・ガガギゴ』をアドバンス召喚！そして、バトルだ！」

「させない！『くず鉄のかかし』を発動！攻撃を無効！」

「くっ、ターンエンドだ」

「私のターン！『フォトン・リード』発動！その効果でレベル4以

下の光属性モンスター……『デイブレイカー』を特殊召喚！」

「ゲツ、そのコンボは……」

「その通り！『デイブレイカー』の効果！『デイブレイカー』を特殊召喚！さらに、効果発動！」

「『デイブレイカー』が三枚……つまり……！」

「3体のモンスターをリリース！『ギルフォード・ザ・ライトニング』をアドバンス召喚！」

「またこのパターンか……！」

遊介が頭を抱えて叫ぶが、モンスター3体のリリースによってギルフォード・ザ・ライトニングの効果が作動

ゴギガ・ガガギゴは破壊、がら空きの場にギルフォード・ザ・ライトニングの攻撃が来て遊介のライフを0にした

「くっそ〜また負けた……！」

日和と数回デュエルしてお互いにあと一歩のところだという展開を繰り返していた

そんなこんなで日は落ち、夕方になった頃

「日和ちゃん。どうせなら夕ご飯も食べていったら？」

母さんがそんなことを提案してきたが、

「えっ、でも、制服を洗ってくれて服も貸してくれて・・・そのうえご飯もだなんて・・・なんだか申し訳ないです・・・」

顔を俯かせて聞き取れるギリギリの声で呟く

「大丈夫、一人食べる人数が増えたぐらいで対して変わらないわよ」

「でも、そういうことなら家に連絡もしないといけないし・・・」

「大丈夫、さつき留守電に日和ちゃんが家でご飯食べることになったって言うておいたから」

「・・・遊介君はどうなの？」

「ん？俺はいいぜ。賑やかなほうが好きだし」

「そうなら、夕ご飯たっ、たべさせていただきます！」

と言うわけで日和が炎城家で夕ご飯を食べることになった

～炎城家

PM 18:30～

「ただいま」

3人で夕飯を食べていると炎城紅えんじよるべないが帰宅した

「あっ、父さんおかえり！」

一目散に遊介が紅のところまで走っていく

「おお！ただいま遊介！」

「お帰り、あなた」

「ああ、ただいま」

「あ……おじゃましています」

「ん？その子は？」

「風音日和ちゃん。夕飯と一緒に食べてるの」

「そうなのか、日和ちゃん。ゆっくり食べて行ってね」

「父さん！また、カードのデザイン見せて！」

「おっ！いいぞ！ええつとな……今デザイン中のカードが……  
ここに……」

「はあ、親子揃ってデュエルバカでごめんね。日和ちゃん」

「いえ大丈夫です。それより、遊介君のお父さんってカードデザイナー  
ナーなんですか？」

「まあね。世界大会の優勝者贈呈カードのデザインや新パックで収  
録されるカードとかをしてるわ」

「世界大会のカードもですか！？」

「他にも世界に一枚しか存在しないカードを作ったりしてぞ」  
誇らしげに自慢するが

「それは単にデザインしたカードの効果が強すぎたり、デザインしたらいきなり企画が変更されたりしてそこから漏れたカードたちでしよ」

「そう言われる反論もできません・・・」

ガツクと肩を落とすがすぐに顔を上げ、

「だが今回デザインしたカードは次のパックに収録決定！その名も『時計仕掛けの女神』！」

眼鏡の奥を煌かせて力みながら叫ぶと、沈利のスリッパが紅の顔面を襲う

「近所迷惑だ！バカア！！」

「ひでぶっ！！」

そんな出来事を見て不安になる日和だが、その心配は必要ないとす  
ぐに分かった  
その理由は

（みんな笑ってる・・・）

本当に仲のいい家族だと日和は思った



すると、自然と日和も笑顔になった

これが炎城家の力だと言わんばかりの笑顔をしていた

ピンポン

チャイムが鳴ると、遊介、沈利、紅の3人の表情が一気に強張った  
なぜかという向かいに住んでいるおばさんに1度うるさいと怒ら  
れ家族全員が2、3時間玄関で説教されたことがあるからだ

「向かいの・・・おばさん？」

恐る恐る沈利がドアの向こうにいるであろうその人に聴くが返事がない

(母さん開けてみようよ。おばさんじゃないかもしれないし)

(バカッ！前に説教された時も返事がなかったでしょ！向かいのお  
ばさんだよ、絶対に・・・また2、3時間正座で説教されたら明日  
から外に出られなくなるよ)

小声で家族会議をした結果、ジャンケンで開けることになり、負け  
たのは紅だった

(父さんがジャンケンで強くなって良かった・・・)

(あなた早く開けて、きつともうカンカンよ)

(待て、なんでそんなに逃げてる。開けるのは僕だが説教を受ける  
のはみんなだぞ)

ドンドンドン！

再び表情が強張る

そして、炎城家のみんなが思った

（これ以上シカトしたらドア破壊してきそう・・・）

ガチャ

紅が静かにドアを開けた

「どちらさまですか？」

汗をダラダラさせながら顔を出すと

「紅さん？」

そこに立っていたのは中年の男で紅のことをしっていた

「和馬かずまか？」

予想とは違う人物に目を白黒させていると

「パパ？」

玄関近くにいた日和がそう言った

「えっ、まさかとは思いましたが日和を預かってもらっていたのは・・・」

「はい、家です」

沈利も和馬という男性に言う

「父さん、誰？」

「風音和馬だ。うちのチームの一人だ」

「はじめまして」

「どうも」丁寧に・・・あっ、どうせならあがってください」

「えっ、でもいいんですか？」

「大丈夫だ。問題ない」キリッ

「じゃあお邪魔します」

風音和馬

炎城紅が率いるカード開発チームの一人

彼の仕事はカードのシリーズを決定したり、会議において新カードの紹介や雑誌で載せる記事を書いたりすることである

「・・・」

「・・・」

最初は他愛もない世間話をしていた紅と和馬だったが、次第に話が

ヒートアップしていき、結果カードデザインに関する仕事の話になり現在も元プロデュエリストの沈利も含めていろいろな論争を繰り広げていた

そして、それをつまらなそうに遊介と日和は見ていたが、二人は気が付けば寄り添うように眠ってしまっていた

「あれ、もうこんな時間？」

気付くとすでに時間の針は夜の10時を指していた

「時間も遅いし泊まっていかれたら？」

「いえいえ、そこまでやつてもらわなくてもいいですよ。では私たちがこれで、いくぞ日和」

「え〜・・・まだいたい・・・よ」

頭をカクンカクンさせながら駄々をこねる

「あはは。日和ちゃんまた明日遊びに来てもいいんだよ」

「でも・・・」

あっ、そうだと紅がカバンから1枚のカードを出す

「これを日和ちゃんにあげるよ」

差し出されたカードは『時計仕掛けの女神』

「紅さん！それまだ完成品じゃあ・・・」

「いいんだよ。カードはいつでも作れる。なにコンピュータの中にデータは残ってるそこからまた作ればいい」

「いい・・・の？」

「ああ、明日にでも遊介に自慢してくれ」

「うん」

こうして風音日和と和馬は自分たちの住むマンションに帰っていった

そして、時は過ぎ

運命が動き出した

遊介ら小学五年生の頃

〈デュエルアカデミア〉

「いけえ！『エレメントEX フェニックスナイト』攻撃！ブレイブスラッシュ！！」

炎の羽を生やした騎士の様なモンスターが相手モンスターを一刀両断する

「ぐあああああ！！」

LP1200 0

「しゃあ！俺の勝ちい！！」

現在デュエルアカデミアは放課中、その時間を利用しさまざまな生

徒がデュエルをしていた

「ふう、連勝連勝」

「嬉しそつだね遊介君」

「当然さー!!」

日和にぐつと親指を立てる遊介

その近くには、眼鏡を掛けていた頃の利樹の姿もあった

「遊介・・・最近、調子に乗ってないか？」

「まあな」

「・・・その分ならいけそうかもしれないな・・・」

「ん？何が」

疑問符をあげる遊介と日和

そして、利樹の眼鏡が輝きかっこよく言う

「ジュニア大会に3人でしよう!!」

「「なつ、なんだって〜!!」」

ジュニア大会

プロデュエリストを目指している小学生が参加する大会

ここですばらしい戦績を残せばプロへの道も開けさらには、有名プ

ロデュエリストとのデュエルも実現できる夢のような大会

それに遊介、日和、利樹はでることにした

大会は5月末の土曜日

利樹の家は開催されるドームの近くにあるので大会で待ち合わせ  
遊介と日和は1度公園で待ち合わせ、それから一緒にドームに行く  
ことにした

そんな大会の日は快晴だった

そして、行き交う人々の中にピンク色のワンピースを着た左側に鈴  
の付いたリボンを結んだ少女が歩いていた

現在、信号が青になるのを待っている状況だ

時刻は7時半

待ち合わせ時間は8時と30分も余裕があった

(ジュニア大会か・・・がんばろうね女神ちゃん)

小さい手の中には『時計仕掛けの女神』があった

彼女のデッキのエースモンスターであり、宝物のカードだ

信号の色が変わり、歩き出す日和

そして、次の瞬間、信号を無視して突っ込んだトラックに日和は撥  
ねられた

「くっそ〜！デッキ調整してたら寝坊したア〜！」

時刻は7時40分

まだ間に合うが日和を待たせたくないし、そこに日和が来るのを待つていたい遊介は走る

そして、誰かとぶつかった

「すつ、すいません！」

「大丈夫か？お前」

声をかけてきたのは顔に傷のあるセキュリティのおじさん

すると、他のセキュリティがパトカーからそのおじさんと呼ぶ

「牛尾さん！近くで衝突事故がありました！」

「なにい！？すぐに行く！すまねえな坊主。また今度な！！」

そう言つて現場へ急行する牛尾というセキュリティ

「・・・なんなんだ？」

気になつて後をついていく遊介

野次馬がすでにその現場にわんさかといた

その中を潜り抜け黄色い keep out と映されたテープの役割を持つ映像の近くまで来る

そして、絶句した

そこに倒れていたのはピンクのワンピースを着ていたであろう少女が真っ赤な血に沈んでいた

しかも鈴の付いた見覚えのある髪飾りをしていた

さらに、遊介の足元付近には、小さなポーチから少女の物とされているカードが大量に落ちており、1枚1枚のカードが遊介のよく知





黒崎迷些選手です!」

現在ロビーにあったテレビには生放送でジュニア大会の決勝戦と優勝者へトロフィー贈呈などを行っていた  
もちろん、その会場にはあの3人の姿はない  
お互いに無言

すると、病院の自動ドアが開き一人の中年の男性が入ってくる

「日和!ハア、日和はどこにっ!?!」

息が上がりながら入ってきた和馬  
すると、一人の医者がやってきた  
そして、

「あなたが保護者ですか?」

そして、重い口調で最悪の結果を和馬に伝えた

「残念ですが……」

「そんな……日和が……死んだ?」

医者から言われた言葉を繰り返す和馬

そして、力なく床に膝をつけしばらく動かなかった  
その日快晴だった天気は急に曇りになったという

ノオドミノシティ

墓地

日和を撥ねたトラックがセキュリティにより検査された結果、トラ

ツクは別の場所から操作されていたらしくトラックを操作していた  
犯人の捜索を開始すると、テレビではそう言っていた

だが、事件が解決しようとも日和は戻ってこない

そういう現実を叩きつけられた遊介は、雨の中hiyori kaz  
aneと彫られた墓標に立っていた

日和が亡くなってから遊介はここを毎日通い、ただ黙っているだけ  
の日々が続いた

そこに遊介の行動を心配して紅がやってきた

「遊介・・・悲しいか」

「・・・」

「輪子ちゃんよりも短い付き合いだったけど、お前にとっては大切  
な人だったから・・・悲しいのはわかる」

「・・・」

「だからといって立ち止まるのはいけないぞ」

「・・・」

「お前はこれからも生きていく。日和ちゃんのいない人生をこれか  
らも」

「・・・かる」

「だから・・・」

「父さんになにがわかる!!」

遊介の悲しみと怒りが入り混じった叫びが響く

「父さんになにがわかる・・・」

その言葉は段々と弱くなつていき消えていく

遊介の存在も一緒に消えていくように

「・・・確かに父さんには遊介の悲しさはわからない」

「・・・」

「だからどうした？」

「えっ・・・」

「だからどうしたと聞いているんだ」

「それは・・・」

「人生は続いていく。人生は旅と一緒にだ。出会いがあれば別れもある。良くも悪くもそれは続く。絶えることはない。だから、立ち止まっではいけないんだ」

「・・・」

「日和ちゃんは死んだ。お前の中の大きな存在が手から滑り落ちた。だが、落ちていく存在をただ見ていたのか？手を伸ばさなかったのか？伸ばしたなら何か掴んでいるはずだ。小さくてもその存在の面影を感じるこの出来る何かを」

自然と遊介の手はポケットに向かい一枚のカードを出した

『時計仕掛けの女神』

日和の面影を残すカード

「あるじゃないか・・・」

「・・・」

「そのカードにはさまざまな思いが宿っている。僕が作った後にできた。遊介と日和ちゃん、そして、さまざまな人たちの思いが宿ったカード、それを汚すつもりなのか？」

「汚す・・・？」

「カードは決闘者<sup>デュエリスト</sup>の映し鏡だ。それを持つものが悲しめば自然とそのカードにも悲しみが映る。そんなことはしちやいけない。笑顔でいるんだ。悲しくても笑顔でいればまた巡り会えるさ。大切な存在に、だから悲しみは今日で終わりにしろ遊介。日和ちゃんのカードに遊介のこれから作る明るい未来を映せそうすれば天国にいる日和ちゃんも笑顔になる」

「明るい未来」

俯いたままの顔をあげる

すると、さっきまで降っていた雨は止み、光が射し込む

「雨も降ればいつかは晴れる。いつまでも心に雨を降らしたらカードがそれを避けてお前に答えなくなるぞ・・・特にそのカードたちはな」

傘を閉じて遊介を独りにさせる  
そして、遊介は決心する

「日和、俺はこれから俺と一緒にいる存在を必ず守ってみせる。お前と一緒にいらなかった分まで・・・」

時計仕掛けの女神をデッキに加える

「だから、最後に言わせてくれ。俺は日和が好きだ」

そして、日和の墓標に背中を向けこれからくる出会いと別れに立ち向かう

いつまでも一人の死に感けてはられない  
明日への一步はすでに目の前にあった

くデュエルアカデミア

屋上

久しぶりに思い出した日和との出会いと別れ、嬉しかったことや悲しかったことはたくさんあった

だから、今の俺がいる

日和も今の俺をつくってくれている人の一人なんだ  
だから悲しみはない

また今日から明日へ向かって歩き出そう  
立ち止まって入られない

第11話 遊介と別れ（後書き）

次回は番外編

再びオリカ紹介！

話数は大したことないのにカードの量が半端じゃない

番外編 オリカ紹介2（前書き）

今回からオリカ紹介の回はただオリカカードの掲載にしていきたい  
と思います・・・

（セリフが思い浮かばない）



## 番外編 オリカ紹介2

〈遊介編〉

エレメントB ボーンファイヤー

レベル3：闇属性：アンデット族・チューナー

効果：このカードは自分フィールド上にモンスターが存在せず、相手フィールドのみモンスターが存在する時、手札から特殊召喚できる。この効果でこのカードの特殊召喚に成功した時、相手プレイヤーに500ポイントダメージを与える。

ATK 300

DEF 100

エレメントC サイクロンコマンダー

レベル3：風属性：戦士族・チューナー

効果：自分のターンのメインフェイズ時、相手モンスターを1体選択する。選択したモンスターとこのカードをそれぞれの持ち主の手札に戻す

ATK 1500

DEF 1200

エレメントF フラッシュ

レベル3：光属性：戦士族・チューナー

効果：このカードと戦闘を行ったモンスターは次のターンのエンドフェイズ時まで効果を発動できず、攻撃力を300ポイントダウンする。

ATK 1400  
DEF 1200

エレメントD ダイヤモンドナイト

レベル4：地属性：戦士族・チューナー

効果：なし

ATK 1700

DEF 1500

エレメントI インデックスマジシャン

レベル1：光属性：魔法使い族・チューナー

効果：手札のカードを1枚捨てる。その後、墓地から魔法カードを1枚選択し、手札に加える。この効果で手札に加えた魔法カードは発動後、ゲームから除外される。このカードの効果はデュエル中、1回のみ発動できる。

ATK 0

DEF 0

エレメントJ ジョーカージャスティス

レベル7：闇属性：戦士族

効果：自分の手札の「エレメント」と名のつくモンスターを墓地に送ることで特殊召喚できる。この効果でこのカードが特殊召喚に成功した時、墓地に送ったモンスターのレベル分このカードのレベルを下げる。さらに、そのカードがチューナーだった場合、このカードをチューナーとして扱うことだできる。1ターンに一度墓地の「エレメント」と名のつくシンクロモンスター以外のカードをゲームから除外して発動する。そのターン、この効果で除外したモンスターの効果をこのカードの効果として使用できる。このカードを素材

としてシンクロ召喚を行うとき「エレメント」と名のつくシンクロ素材にしか使用できない。

ATK 2500

DEF 2000

エレメントP ファントム

レベル3：闇属性：悪魔族

効果：このカードを手札から捨てることで、このターンの自分へのダメージを0にする。この効果は相手のターンでも使用できる。

ATK 1500

DEF 0

エレメントQ クイーンブロッサム

レベル5：風属性：魔法使い

効果：相手フィールド上にモンスターが存在する時、このカードは相手モンスターに3回攻撃できる。

ATK 2300

DEF 1200

エレメントE× ソーラーシャイニング

レベル8：光属性：戦士族：シンクロモンスター

効果：「エレメント」と名のついたチューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカード以外のモンスターの効果をこのターン、無効にし攻撃力を800ポイント下げる。

ATK 2600

DEF 2300

エレメントEX ガイアゴーレム

レベル8：地属性：戦士族：シンクロモンスター

効果；「エレメント」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

このカードのシンクロ召喚に成功した時、このカードのシンクロ素材に使用されたチューナー以外のモンスターを特殊召喚する。

ATK 3000

DEF 2300

エレメントEX セルトルネード

レベル7：風属性：戦士族：シンクロモンスター

効果；「エレメント」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

このカードが守備表示モンスターに攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。このモンスターが相手モンスターを破壊した時、相手の手札のカードをランダムに選択してデッキに戻してシャッフルする。

ATK 2600

DEF 2300

時計仕掛けの女神

レベル10：光属性：天使族

効果；このカードは通常召喚できない。このカードは光属性・レベル7以上のモンスターをリリースした時のみ特殊召喚できる。1ターンに1度、相手フィールドのモンスターを手札に戻し、相手の墓地に存在する同じレベルのモンスターを特殊召喚する

ATK 2500

DEF 2300

エレメントバース

通常魔法

デッキからモンスターカードがでるまでめくる。ドロートしたモンスターカードを手札に加える。ただし、そのカードが「エレメント」と名のついた通常召喚可能なレベル4以下のモンスターだった場合、自分フィールド上に特殊召喚できる。それ以外のカードは全て墓地に送る。

魂格闘 ソウルバトル

速攻魔法

自分フィールド上のモンスターが相手にダイレクトアタックをした時、発動できる。自分フィールド上のダイレクトアタックしたモンスター以外のモンスター1体をリリースし、その元々の攻撃力の数値分相手ライフにダメージを与える。

ミステリックシンクロ

通常魔法

このカードは自分フィールド上にモンスターが存在しないとき発動できる。自分の墓地のチューナーとチューナー以外のモンスターをゲームから除外する。その後、除外したモンスターのレベルの合計と同じシンクロモンスターをシンクロ召喚扱いで特殊召喚する。

0ガッツ!

通常罫

このカードは発動後、装備カードになる。このカードを装備したモ

ンスターの攻撃力・守備力は0になり、相手のカード効果を受けず、戦闘によって破壊することはできない。自分のターンのスタンバイフェイズ時にこのカードと装備モンスターを墓地に送ることでデッキ・手札・墓地から装備モンスターのレベル以下のモンスターを無条件で特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターは効果は無効にされ、守備力は0になる。

〈利樹編〉

幻影の投影者ヘーゲント

レベル5：闇属性：機械族

効果：1ターンに一度、相手フィールド上で表側表示で存在するカードの効果全てを無効にする。このカードが守備表示で存在する限り、お互いのモンスターは戦闘によって破壊されない。この効果を使用したターン、このカードは攻撃できない。このカードは悪魔族としても扱う。

ATK 1900

DEF 2300

暴走雷神テトリオート

レベル4：光属性：機械族

効果：バトルステップ終了時、相手フィールドにモンスターが存在する場合、もう一度攻撃することができる。このカードが相手プレイヤーに戦闘ダメージを与えた時、このカード攻撃力を300ポイントアップする。このカードが雷族としても扱う。

ATK 1700

DEF 1800

レベルクラッシュ!!

#### 通常魔法

自分の手札のカードを1枚相手に見せる。見せたカードのレベルを1下げる。その後、お互いのプレイヤーのライフに100ポイントのダメージを与える

#### 星の剣 スターソード

#### 装備魔法

このカードは機械族のみに装備できる。このカードを装備したモンスターの攻撃力は300ポイントアップする。このカードが「奇跡の戦士タウバーン」に装備された時、装備モンスターの攻撃力を1000ポイントアップする。このカードがフィールドから墓地に送られた時、ライフを500ポイント支払うことでこのカードを手札に加えることができる。

#### 偵察

#### 罨

相手がドローフェイズ以外にカードをドローした時に発動できる。自分のデッキからカードを1枚ドローする。その後、デッキの一番上のカードを墓地に送る。

#### （輪子編）

ホワイナイト  
白騎士団の剣士

レベル4：光属性：戦士族

効果：自分フィールド上に存在する「ホワイナイト白騎士団」と名のついたモン

スター1体につき攻撃力を100ポイントアップする。

ATK 1500

DEF 1200

ホワイナイツ  
ランサー  
白騎士団の槍持ち

レベル4：光属性：戦士族

効果：このカードが守備表示を攻撃した時、その守備力が攻撃力を超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

ATK 1600

DEF 1300

白騎士団の見習い戦士

レベル2：光属性：戦士族・チューナー

効果：このカードが特殊召喚に成功した時、デッキから任意の枚数『白騎士団の見習い戦士』を特殊召喚できる。

ATK 500

DEF 800

ホワイナイツ  
ロード  
白騎士団の主人

レベル6：光属性：戦士族

効果：このカードは特殊召喚できない。このカードは戦闘によって破壊できない。このカードが相手モンスターを破壊した時、相手ライフに300ポイントダメージを与える。このカードが相手によって破壊された時、そのプレイヤーに1000ポイントのダメージを与える。

ATK 2000

DEF 2000



ホワイナイト  
白騎士団の騎士王

パラディキング

レベル8：光属性：戦士族

効果：自分のライフが相手ライフより下の場合、その差の数値分このカードの攻撃力をアップする。1ターンに一度、相手が発動した魔法・罠カードの効果が無効にし破壊する。

ATK 2600

DEF 1300

進軍

通常魔法

手札からレベル4以下の戦士族モンスターを特殊召喚する。

〈迷些編〉

氷ノ騎士

レベル4：水属性：戦士族

効果：なし

ATK 1700

DEF 800

氷ノ結界師

レベル3：水属性：魔法使い族

効果：このカードはカード効果では破壊されない。自分フィールド上のモンスターが2回以上攻撃する場合、そのモンスターの攻撃力を300ポイントアップさせる。

ATK 1200  
DEF 2000

### 氷ノ彫刻家

レベル2：水属性：魔法使い族

効果：自分フィールド上にこのカード以外のモンスターが存在しない場合、ライフを500支払うことで「彫刻トークン」（レベル1・水属性・水族・攻0/守500）を特殊召喚する。

ATK 500  
DEF 300

### 氷ノ白姫

水属性：魔法使い族：レベル8

効果：このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、このカード以外のカードの効果の発動、効果の使用をこのターン無効にし、相手表側表示モンスターの攻撃力を500ポイントダウンする。相手フィールド上の表側表示モンスターを1体選択し、選択したモンスターと同じレベルの水属性モンスターを墓地から除外し、選択したモンスターの表示形式を変更する。

ATK 2800  
DEF 2300

### 氷ノ白虎<sup>びゃくこ</sup>

レベル4：水属性：獣族

効果：このカードが相手モンスターに攻撃する場合、このカード攻撃力をダメージステップ時のみ、400ポイントアップする。

ATK 1600

DEF 1200

氷ノ盾持ち

レベル4：水属性：戦士族

効果；自分フィールド上の他の水属性モンスターが攻撃されるとき、その攻撃対象をこのカードに変更する。

ATK 1000

DEF 2100

氷ノ龍

水属性：ドラゴン族：レベル9

効果；墓地の水属性モンスターが3体以上の場合特殊召喚できる。

このカードが戦闘によって相手プレイヤーにダメージを与えた時、相手フィールド上の表側表示になっている魔法・罫を1枚破壊できる。このカードの攻撃力は自分フィールド上に存在する水属性モンスター×200ポイントアップする

ATK 3000

DEF 2500

凍結封札  
とくけつふうさつ

永続罫

自分フィールドの水属性モンスターが相手によって破壊されたターン発動できる。相手モンスターを1体選択し、このカードを装備する。装備モンスターは攻撃力を1000ポイントダウンし、攻撃宣言も行えない。自分のターンのスタンバイフェイズ時、相手プレイヤーに500ポイントダメージを与える。装備モンスターがフィールド上に存在しない時、このカードは破壊される。

アイスヴェール

永続魔法

自分フィールド上に表側攻撃表示のモンスターののみ発動できる。自分フィールド上に存在するレベル4以下の水属性モンスターは破壊されない。

ドロツプドロー！

通常魔法

手札からカードを1枚選択して墓地に送る。デッキからカードを1枚ドロローする。この効果で墓地に送ったカードがレベル7以上のモンスターだった場合、さらにデッキから2枚ドロローする。

絶対零度空間

フィールド魔法

フィールド上に存在する水属性モンスター以外のモンスターの効果を無効にし、攻撃力を500ポイント下げる。1ターンに一度、自分の墓地に存在する水属性モンスターを手札に加えることができる。この効果は相手プレイヤーも使うことができる。

〈その他〉

薔薇<sup>ユヰ</sup>の歌姫

レベル3：風属性：植物族

効果：このカードは自分フィールド上にカードが存在しないとき特殊召喚できる。この効果で特殊召喚に成功した時、デッキから植物

族モンスターを1枚選択して墓地に送る。このカードがフィールドから墓地に送られる時、このカードの効果で墓地に送った植物族モンスターを手札に加える。

ATK 1400  
DEF 1000

パーフェクトコピープラント

レベル1：地属性：植物族

効果：1ターンに一度、フィールド上に存在する植物族モンスターを1体選択する。そのターン中選択したモンスターの元々の攻撃力と守備力をこのカードの攻撃力・守備力に加える。選択したモンスターがカード効果の対象になった時、その対象をこのカードに変更する。この効果はデュエル中に1度しか使用できない。

ATK 0  
DEF 0

紅蓮の鬼王

レベル7：炎属性：獣戦士族

効果：自分フィールド上にカードが存在せず、手札がこのカード1枚のみの場合このカードを手札から特殊召喚することができる。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分はドローフェイズ時にカードをドローすることができない。自分の手札が0枚のときこのカードは破壊されない。

自分フィールド上にこのカードしか存在せず、このカードが攻撃を行う時、  
攻撃対象モンスターの攻撃力の半分の数値だけこのカードの攻撃力をアップする。

ATK 2800

DEF 500

バグ

レベル10：地属性：獣族

効果：このカードのプレイヤーが受ける効果ダメージを無効にし、その数値分攻撃力をアップする。カード効果で発生したダメージが1000ポイント以上ならばダメージ1000ポイントにつきデッキからカードを1枚ドロウする。この効果でデッキからカードをドロウした時ドロウしたカード1枚つき、攻撃力を1000ポイントダウンする。

ATK0

DEF2300

ツングースカ・エクスペロージョン

通常魔法

手札からカードを3枚捨てて発動する。

自分フィールド上に存在するカードを全て墓地に送り、

この効果によって墓地に送った枚数分、相手フィールド上のカードを破壊する。

種族偽装

速攻魔法

種族を1つ宣言する。自分フィールド上のモンスター1体の種族を宣言した種族に変更する。

アサルト・アーマー2

## 装備魔法

このカードは戦士族モンスターのみに装備可能。装備モンスターが戦闘によって相手モンスターを破壊できなかった時、自分フィールド上のまだ攻撃宣言していないモンスター1体リリースすることで、リリースしたモンスターの攻撃力分、装備モンスター攻撃力をアップさせ、もう一度攻撃することができる。

## スピリットクラッシュ

### 通常罫

墓地に存在するこのカードをゲームから除外することで自分フィールド上のモンスターが守備表示モンスターと戦闘を行うとき、その攻撃力が守備力を超えていた場合、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

## 即時成長

### 通常罫

カード効果によって墓地から植物族モンスターが手札に加わった場合、そのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。

番外編 オリカ紹介2（後書き）

どうだったでしょうか？

セリフがないとおかしいでしょうか？おかしいと思う人がいるのなら感想を送ってきてください

次回は新たなヒロインと新男性キャラの登場！



## 第12話 恋する妹（前書き）

9月になって禁止・制限が変わったからカードに規制かけたんじゃないんだからね！

## 第12話 恋する妹

ニヤー、とそう鳴くのは木から降りられなくなった猫だ

そして、その猫を助けるためきに木にしがみつぎ、猫の元まで近づこうとする、長い茶髪の髪をフワフワさせて背が高く胸がにデカイ

少女

名前は霧島光希<sup>みき</sup>

「猫ちゃん、じっとしててね・・・今、光希が助けてあげるから・・・」

そうやって近づいていき、猫を捕まえる

「捕まえた！」

その瞬間、気を抜いたのが災いし、木から滑り落ちる

「！！！」

5メートルの高さから地上まで真っ逆さまに落ちる

打撲かなと思うと、落ちる場所に一人の赤髪の少年が不幸にも通りかかった

「あぶない！！！」

咄嗟に叫ぶがその距離は1メートルもなかった

炎城遊介は、一人唸っていた

「新禁止制限が公式発表されたおかげでデッキをだいぶ変えることになったんだが・・・利樹に一勝もできなかった・・・」

そう呟きながら歩いていると

「あぶない!!」

上から誰かが叫ぶ声がした

そして、上を見上げてみると

茶髪の少女が猫を抱えて遊介の立っている場所に落ちてくるのが見えた

「いつ!?!」

咄嗟に片足を引き両手を前に出す

そして、落ちてきた少女を抱き抱える

両腕に落ちてきた少女の体重がのし掛かる

最初に思った感想はというと

(重ッ　!)

まさに、無礼すぎる感想だった

王子さまをみなさん信じるだろうか  
白馬にまたがり、お姫様のピンチに颯爽と現れる女の子の憧れである  
そんな存在に光希は出会ったのかもしれない

「大丈夫か？」

光希を抱えている赤髪の王子さまは言う

「うん」

光希は頬を赤くして若干上目づかいでその王子さまを見る  
そうかと言って光希に笑顔を見せて抱え下ろす  
腕のなかの猫はミャーと言って逃げていく

光希はまだ頬を赤くしながら、その王子さまを見る  
すると、王子さまは言った

「次は気を付けろよ」

そして、走っていく

胸の高鳴る鼓動を抑えながらその後ろ姿を見送っていった

↓デュエルアカデミア

遊介たちがいるクラス↓

「いいや、メイドだ！」

「違うね！ウエートレスだ！！」

「フフ、二人ともまったくもって論外だ！やはり、ヒロインとしては落下系だ！」

そんなことを朝っぱらから3人も少女が口論する

「なあ、利樹……一体これはなんなんだ？」

俺より早く学校へ登校している利樹に聴く

ちなみに、なぜ同じ部屋の住人である利樹が遊介よりも早く学校へいくかと言うと、遊介と同じ時間に出ていけば大量の女子生徒に囲まれたということが原因らしい

「ネネがとあるマンガを読んでヒロインとして必要な要素は何かって話から始まったんだ」

「おーい、お前らどうしてそんな話に転がったかお兄さんと話し合おうじゃないか」

そうやって遊介の騒がしい日が始まった

くデュエルアカデミア

とあるクラスく

窓際の席に少年はいた

茶髪で妹のように髪はボサボサではなくいつも耳にヘッドホンを付

けた少年

名前は霧島鋼<sup>はがね</sup>

霧島光希の実兄である

鋼はいつも通り退屈そうに空を眺める

その隣には、小説を読む物静かな長髪の少女

長江紅葉<sup>もみじ</sup>

そんな物静かな二人の騒がしい日も始まったのである

くデュエルアカデミア

食堂

時は過ぎ昼放課

霧島光希はスキップしながら食堂で料理を受けとるために列に並ぶ受けとる料理はオムライスだ

オムライスをワクワクしながら待っていると、ある人が目にはいった赤髪の王子さまだ

その姿を見た瞬間、いてもたってもいられずダッシュで駆け寄り、背中に飛び付く

王子さまはオワツ！？と驚き飛び付いている光希を見る

はつきりいつて驚いた

生まれてこのかた俺は年頃の少女をこの背中で背負ったことは一度もなかった

しかも背中に飛び付いていたのは無礼にも重いつてしまった少女だった

さらに、背中には大きな膨らみが2つ背中に押し付けられていて理性が保つかはギリギリのラインを走っていた

そう思っていると、背中に飛び付いている少女が背中に乗ったまま言う

「だっ、誰？」

「光希？光希の名前は霧島光希って言うの。それで光希もあなたの名前も知りたいの」

「炎城遊介だ・・・」

「よろしくね！遊介！」

元気な子だな・・・

カレーライスをトレイに乗せ、紅葉と一緒に席を探していると、どこかへ走っていく光希をつ見つけ声をかけようとする  
しかし、声を発することはできなかった

なぜなら、光希が誰かの背中に飛び付いたからだ

その瞬間、漆黒のオーラが鋼の全身を包んだ

そして、地獄の悪魔のように底冷えする声で言った

「アレハ、ダレダ？」

紅葉が面白そうに

「・・・彼氏、かな？」

「カレシ・・・ダト？」

「殺ス」

妹を思いすぎる兄は恐いのだ

「えっと、とりあえず下りてくれないか？」

さすがに身長が高い分体重の方も重いというわけで光希という少女を下ろす

等の本人は残念そうだったが・・・

「とりあえずみんなのいる席にいくか・・・霧島さん、行こう」

遊介は歩いていくが、霧島さんがついてこない

「どうしたの？」

もう一度立ち止まっている霧島さんの元へ戻るすると、霧島さんがムスツと頬を膨らませ言う

「霧島さんじゃなくて光希だもん」

どうやら遊介の呼び方に問題があったらしい  
普段の遊介ならどんな相手でも名前前で呼ぶが光希の場合は、いきなりだったので名字で呼んでしまっていたらしい

「いめん、じゃあ気を取り直してみんなのところに行くぞ、光希」

「うん！」



食堂

とあるテーブル

どうしてこうなった

炎城遊介はそう素直に思った

俺のとなりには嬉しそうに座っている光希がいる

それはまだわかる

しかし、向こう側の席にいるヘッドホンを付けた先輩らしき人が俺に明らかかな殺意をもって睨む理由がわからない

すると、隣の席に座っていた輪子がトイレと言って席から立ち上がろうとしたそのとき、ネネが大量に食べていた料理の中の八宝菜の卵を誤って箸から落としてしまい床に転がる

それを運悪くスーパードジツ娘の輪子が踏み滑る

そして、そのまま転べばいいのに輪子の体は空中で後ろに回転し、卵を踏んづけてまっすぐにしていた足はその状況を眺めていた俺に突き刺さる

そこで輪子は床に背中から着地するが、顔面を蹴られたみたいなのは横に倒れ、あろうことか光希の大きな膨らみの部分に沈むひゃあっ!？、と可愛らしい声をあげる光希

ナイスエロハプニング!と親指を立てる迷些とネネ

そして、持っていたスプーンをへし折るヘッドホンの先輩  
多分あれは俺の死亡フラグだろう

「イタタタ、今一瞬呼吸できなかつたよ・・・」

輪子の視線の先には鼻を赤くして鼻血を出しながら霧島光希の大きな胸にうづくまっている(ように見える)遊介を見て、顔を真っ赤

にし口をパクパクさせる  
そして

「ゆっ、遊介の変態!!!!!!」

ちょうど光希の胸から離れた遊介に輪子の平手打ちが来た  
そして、遊介は思った

(理不尽すぎる・・・)

その後、遊介の意識は午後の授業が始まるまで目覚めることはなかった

くデュエルアカデミア

昇降口く

災難の連続だった

午後の授業の実技は、遅れて体育館を一人走らされるは、帰りに靴箱を開ければ呪いのワラ人形や内臓の飛び出したぬいぐるみなどがたんまり入れられていたりして精神的にもうだめなのに止めとばかりに光希のファンらしき男子生徒に追いかけて回されて気がつけば夕方方になっていた

現在、遊介は校内に設置された自販機近くのベンチに座っていた

「ハア、ハア、つつ、疲れたく」

ベンチにもたれる遊介

そして、しばらくベンチに座った後、寮に帰ることにした

「今日は俺の人生の中でダントツ一位の不幸な日だな・・・」

そう呟きながら校門へ向かっていると、

「ん？あれって……」

校門で背の高い女子生徒がいた

今朝知り合った霧島光希だ

「光希何してるんだ？」

誰かを待っているような感じの光希に聴く

「遊介を待ってたんだよ。一緒に帰ろ」

「そうゆうことなら教室にこればよかったのに」

「最初はそうしようとしたけど、ちょっとお兄ちゃんとな……」

顔を俯かせ暗い口調で言う  
そして、何かを決心して遊介に言う

「あのっ、遊介！」

「何だ？」

「今週の土曜日ってヒマ？」

「んっ、……ヒマだな」

「じゃあその日、光希と付き合っただけ……」

「別にいいぜ。今週の土曜日な？」

「うん！今週の土曜日、ネオドミノシティで！」

「わかった。じゃあまた明日な」

「うん！」

それぞれの寮に戻る二人

その背後には、ヘッドホンを付けた鋼の姿があった

～土曜日～

赤いシャツに白い夏物の薄いジャケットを着た遊介は、ネオドミノシティ行きのバスに乗った

バスはダイダロスブリッジを通過し、決められたバス停に着いたそのバスから降りた遊介は、久しぶりにネオドミノシティの土を踏んだ

シティでは、デュエルが推奨され、今あちこちでライディングデュエルが繰り広げられていた

そんなところから数メートル先には光希が待ち合わせの場所に指定した公園があった

「まだ時間じゃないか」

ポケットからケータイを出し、時間を確認すると、遠くから遊介を呼ぶ声がした

「ん、まだ時間じゃないのにはy・・・」

その声の主である光希の方を見ると、遊介は啞然とした  
光希服装がおかしい・・・

光希の着ていた服は、世間一般に言うコスプレだった  
ステッキを持っていると言うことはあれは魔法少女系のコスプレだ  
と思う

「光希・・・その服は一体・・・」

「コスプレだよ」

やっぱり〜

心のなかで呟く遊介

そして、光希が次に放った言葉も遊介には、理解できなかった

「遊介も着るんだよ」

「ええ？」

ええええええええ！？

「まさか、コスプレを着させられるとは・・・」

コスプレを着た遊介は、公園のベンチに座る

というか今遊介がいる公園で見かける人はみなコスプレをしてる何  
故だろうか？

「あれ？遊介じゃん」

そこには見慣れない肩が露出した制服？を着て黄色いリボンを両サイドに結んでツインテールにしているネネがいた

「お前なにしてんだ？」

「コスプレ」

・・・一体なんなのこの公園・・・

「ナニじろじろ見てるの？」

ネネが変態を見るような目で見てくる

「お前のキャラは空気のはずなのになんでもまだ存在感を放っているの肩の関節がはずれるうううう！！！！」

瞳の奥が赤くなり、遊介に関節技を決めるネネ

「読者の人の記憶から消えかかっているそんな設定を掘り下げるな！」

「まあ、お前だけしたい設定も思い付かずこれにしたら面白いんじゃない？とか一人思っただけの設定だもんな」

そんな暴露話は放っておいて遊介は別の話題に切り替えた

「そういえばネネは何のコスプレしてんだ？」

そう聴くとフツフツとネネがよくぞ聞いてくれましたと言った

後、少し間をあけ言う

「ISの鳳鈴音さ！」

「鳳鈴音？誰それ？」

「遊介知らないの！？」

常識を疑うような目を向けられるが、そんなことは気にしない遊介  
そうしていると、光希が二人分の着替えが入った紙袋片手にもち、  
空いた手にはアイスクリームを握ってやって来た

「え？」

そんなことを言ったのはネネだった

「何で二人してここに居るの？遊介一人ならわかるのに」

「お前まさか日頃そういう目で見てたの？泣くよ俺」

そんな言葉は華麗にスルーするネネは、光希のある部分を見つめて  
呟く

「本当、でかいよね〜衣装が悲鳴あげるくらい」

「そうかな？」

そう言ってその部分を触る

「まさに肉！！って感じだよね・・・迷些がそれを意識たら千切よ

うとするかもね」

「ちなみに、ネネ今日は一人で来たのか？」

「違うよ。迷些と一緒にだよ」

「そうか。なら、あそこでドス黒いオーラ放ってるあれは迷些でいいんだな？」

えっ？と遊介が指差す方向には、髪をウネウネさせている迷些がいた

「・・・イツカラソコニ？」

「光希の胸の話からだ」

「どうしたの？」

顔を真っ青にしているネネを心配して光希が聴いた  
それに答えたのは遊介だったが

「まあ、迷些がネネに邪悪な鉄槌を下すぐらいだ」

「ネ〜ネ〜、私初対面の人にそんなことするように見える〜？」

「みつ、見えません！」

「うん。その通り私は見境なく人を襲ったりはしない・・・だから  
ね・・・ネネノヲチヨウダイ」

「えっ!?!めっ、迷些？迷些さん？話聞いてる？お願い！無言でい



るのをやめて！！いつ、イヤアアアアア！！！！」

その後、数十分にわたり迷些による迷些のための憂さ晴らしが行われた

「そういえば光希、なんで今日コスプレを俺までしなくちゃあいけないんだ？」

「コスプレのコンテストに出るからだよ」

即答された

「へえ〜コンテストか〜、ちなみに、それって俺も出るの？」

「うん」

「へえ〜、そっか〜・・・逃げてもいいか？」

「もうエントリー済みだから無理だよ。それに光希と遊介は一緒に出るようになってるし」

ズーンと肩をおとし頂垂れる

すると、迷些にいじられまくったネネが来た

「二人もコンテストに出るの？」

「そっなたらしい」

「なら、一緒に会場に行こう」

そうしようとして光希は俺の腕を掴んで歩き出す

「光希、スカート気を付けろよ。なかが見えるかもしれないし」

「大丈夫。光希、スパッツ穿いてきたから」

「そういう問題じゃないんだけどな」

かくして遊介は成り行きでコスプレのコンテストに出ることになったのだった

（コンテストミニ会場裏）

コンテスト出場のため会場裏で名札を付けられた

俺の出場番号は13番で光希は12番、ネネは5番ですでにステージ上がったいた

会場裏では、緊張を解すために手のひらに人を大量に書く人とか自分は○○だ！○○なんだ！と自己催眠をしていたりした（作者はコスプレのコンテストに出たことないので多分こういう感じかなという感覚で書いています）

遊介はたいして緊張もせず事前に光希に渡された剣を抜いたり戻したりしていた

ちなみに服装は中国人が着るような服だ

しかし、これは何のコスプレかもわからずにいた

そして、光希といえば鳥みたいなくちばしの生えた杖を両手に抱えて震えていた

相当緊張してるなと思った

「光希・・・」

「 !?!?!? 」

「 落ち着け、とりあえず俺の理解できる言葉で喋ってくれ 」

「 ゴメン。光希今ちよつと緊張してて 」

「 そうか。まっ、とりあえず座ろっぜ 」

俺たちは近くのパイプ椅子に腰かける

「 光希はこういうのは初めてなのか? 」

「 うん。コスプレはするのをはじめてだし、コンテストに出るのも初めて…… 」

「 じゃあなんで出るんだ? 」

その質問に光希から返答はなかった  
どういう事情か遊介には知る余地もないが、光希を安心させるために言う

「 答えれないか……でも、まあいいぜ。どうせ出るんだったらお互いに思いっきり行こっぜ 」

「 ……うん 」

ポンつと光希の頭に手を乗せ撫でる

その行動の意味が訳がわからない光希は遊介を見る

そこには、自然な笑顔で光希を見つめる遊介の姿があった  
そして、俺たちの出番になり、ステージに上がっていった

くネオドミノシティ

シティ公園

空の色が赤色に変わり、地面を赤く染めているこの時に俺はベンチに座っていた

服装は今朝着てきた服装に戻り、光希は友人から借りたコスプレの衣装を返しに行っていた

コンテストの成績は言うまでもなく最下位にならずにすんだのがどちらかといえは嬉しかった

そうしていると、向こうから光希がやって来た

「お待たせ」

さっきまでの緊張は全て消え、元の光希に戻った

「じゃあ帰るか、あまり遅いといけないしな」

「その前に、遊介に見せたい場所があるの」

「見せたい場所？」

「うん。ちょっとついてきて」

そうしてついていくこと数分

夕日の見える絶景ポイントに到着した

赤く沈む太陽は一日の終わりをしみじみと思わせる

「いい場所だな」

そう光希に感謝しながら言うと

「・・・うん」

光希は涙を流していた

どうしたの？と聞くに気にはなれないそんな涙

その後、俺たちは何事もなかったように寮に帰った

くデュエルアカデミア

男子寮へ

その日の夜、部屋に戻ると、生徒手帳がメールを着信していた  
差出人は未掲載

ただ、男子寮裏の中庭に來い。それだけ書かれていた

遊介はその場所に向かうと、耳にヘッドホンをつけた名前も知らない先輩がいた

「あんたは？」

みてすぐにわかった

あいつがメールの差出人

そして、ヘッドホンの先輩は答えた

「霧島鋼」

「・・・！」

「霧島光希の兄だ」

## 第12話 恋する妹（後書き）

前書きは何を書いていたんでしょうね・・・

いかがだったでしょうか？

なんかデュエルがないとどうしても話がカオスになってしまいます  
下ネタっぽいものもありましたし

とりあえず次回は鋼vs遊介

ちなみに・・・

ISとか好きじゃないから

ただ、俺は一夏が死ぬほど嫌いなだけだから

第13話 怒る兄（前書き）

久しぶりの投稿。内容は途中おかしくなる？



## 第13話 怒る兄

「光希の兄……」

「炎城、あまり光希に馴れ馴れしくするな。この忠告を聞き入れたくないと言っなら……」

「……！」

「デュエルでお前と光希を引き離す」

そして、デュエルディスクを展開する鋼先輩  
それにつられ遊介も構える  
そして、

「「<sup>デュエル</sup>決闘！」」

デュエルを始めた

「俺の先攻！」

鋼先輩のターンからだ

「俺は手札からマジックカード『おろかな埋葬』を発動。デッキから『V・HEROミニマムレイ』を墓地へ送り、『V・HEROマールティプリガイ』を召喚！」

黒いスーツにアーマーを二本の小さい角のモンスターが現れる

ATK 800  
DEF 500

「ターンエンド」

「俺のターン！」

（光希の兄・光希の兄ならどうしてあの場所で光希が泣いた理由がわかるはずだ！）

「俺はチューナーモンスター『エレメントH ヒートヴァレス』召喚！」

胸にHの文字を刻んだ炎のモンスターが現れる

ATK 1700  
DEF 1000

「ヒートヴァレスの効果！フィールドの『エレメント』一体につきヴァレスの攻撃力を200ポイントアップする！」

『オオオオオオ』  
ATK 1700 1900

「バトル！ヴァレスでマルチプリガイに攻撃！」

ヴァレスは片手から炎を出してマルチプリガイを殴る

「・・・」

LP 4000      2900

「よし！」

モンスターを撃破して一人喜ぶ遊介

「モンスターの特性に気を付けず単調な攻撃を仕掛けるか・・・」

攻撃を受けたはずの鋼は冷静に言った

「V・HERO特性はそのほとんどがダメージを受けたとき、永続魔法としてフィールドに現れることだ！」

すると、場に灰色のミニマムレイが現れる

「なっ!?!」

(V・HEROにそんな効果があったのか!でも、なんでダメージを負ってまで魔法・畏ゾーンに復活させたんだ?)

「カードを一枚伏せてターンエンド」

「俺のターン、『V・HEROヴァイオン』召喚」

ミニマムレイとは違う赤い鎧身につけたひとつ目のモンスターが現れる

ATK 1000

DEF 1200

「ヴァイオンは召喚成功時、デッキの『V・HERO』を墓地に送ることができる。その効果で『V・HEROインクリース』を墓地に送る！そして、ミニマムレイの効果！自分フィールドの『V・HEROヴァイオン』をリリース！ミニマムレイを特殊召喚する！」

ヴァイオンが霧に包まれると、その中から黄色の鎧を身につけたミニマムレイが現れた

ATK 1200  
DEF 700

「なんだと!？」

「この効果で特殊召喚されたミニマムレイの効果発動！表側表示のレベル4以下のモンスター一体を破壊する！」

ミニマムレイの目の役割をするレンズが発光する  
その光を浴びたヴァレスは瞬間に灰になる

「ミニマムレイでダイレクトアタック！」

ミニマムレイのレンズからレーザーが出る

「ぐあ……！」

LP 4000 2800

「カードを二枚伏せてターンエンド！」

「くっ、俺のターン！」

(V・HERO・・・戦闘ダメージを負えばそのたびにフィールドに蘇る。そのため攻撃力はさほど高くない。なら・・・！)

「『エレメントR ロックマン』を召喚！」

右腕がバカでかく右肩にRを刻んだモンスターが現れる

ATK 1600

DEF 1600

「あくまでも攻撃に徹するか」

「ロックマンでミニマムレイに攻撃！」

「・・・」

LP2900 2500

小さな角を生やしたマルチタイプガイと一本角で1つ目のインクリースが灰色の霧として現れる

「カードを一枚伏せてターンエンドだ」

「俺のターン」

「手札の『V・HEROガードレイ』を墓地に送って『V・HEROファリス』を特殊召喚。さらに、ファリスの効果、デッキから『V・HEROポイズナー』を墓地に送る」

1つ目の爪の大きい茶色のモンスターが現れる

ATK 1600  
DEF 1800

「ファリスをリリースして『V・HEROインクリース』を特殊召喚！」

一本角で1つ目のモンスターが霧の中から現れる

ATK 900  
DEF 1100

「インクリースの効果、デッキから『V・HEROダークプリンセス』を特殊召喚！」

漆黒のドレスを着たモンスターが現れる

ATK 0  
DEF 200

「そして、2体をリリース、『V・HEROウィッチレイド』をアドバンス召喚！」

筒のようなものを片手で持った魔法使いが現れる

ATK 2700  
DEF 1900

「ウィッチレイドの召喚時、相手フィールド上の魔法・罫カードを

破壊する！」

「くっ、させるか！リバースカードオープン！『奈落の落とし穴』」

（これなら高レベルモンスターを破壊できる！）

「速攻魔法『予知夢』発動。自分フィールドの『V・HERO』を  
2ターンの未来へ飛ばす」

ウィッチレイドの姿が消えてそのあとに落とし穴が現れるが、不発  
に終わった

「チェイン処理だ。お前の残ったリバースカードを破壊する」

リバースカードが爆発する

（くっ、ミラーフォースが・・・！）

「カードを一枚伏せてターンエンド」

「俺のターン！」

（モンスターが引けない！）

「くっ、ロックマンで攻撃！」

ロックマンの巨大な右腕が鋼先輩の鳩尾に食い込む

「がはっ・・・！」

LP2500 900

ライフダメージを受けてミニマムレイとインクリースが幻影で現れる

(よし!あと少しだ!)

「カードを三枚伏せてターンエンド!」

「待て、エンドフェイズにリバースカードオープン!永続罫『塵気楼』発動」

LP900 2500

「ライフポイントが回復した!?!」

突然のことに困惑する遊介

「永続罫『塵気楼』の効果は、自分フィールド上の魔法・罫ゾーンに『V・HERO』が存在するとき、毎ターンのエンドフェイズ毎にそのターン中に受けた戦闘ダメージを回復する。しかし、魔法・罫ゾーンに『V・HERO』がいなくなった時、このカードを破壊する」

(つまり、先輩を倒したいなら効果ダメージでライフを0にするか、一気にライフを0にできる攻撃力を持つモンスターで攻撃するしかないのか・・・)

「俺のターン、」

鋼先輩はドローカードを見てしばらく動きを止めた

「?」



その行動を不振に思ったが、近づこうとは思えなかった  
そして、

「このデュエル、俺の勝ちだ」

遊介は驚く暇もなく鋼先輩が動く

「魔法カード発動。『ヴァイジョンフュージョン幻影融合』」

「専用の融合カード……」

フィールドの幻影のミニマムレイとインクリースがお互いに渦巻き  
ひとつになる

その渦が逆流した時、マントを翻して腕を組んだモンスターが現れた  
そして、鋼先輩は呟いた

「『V・HEROアドレイション』融合召喚」

|     |      |
|-----|------|
| ATK | 2800 |
| DEF | 2100 |

「くっ、高レベルの融合モンスター……!」

通常HEROシリーズのモンスターはどれも単体では弱いカードば  
かり

だが、融合カードはHEROを最強にさせるうえ、その種類も豊富  
で今もなお人気の高いシリーズなのだ

「アドレイションでロックマンを攻撃！リバーサルムトレイション

「！」

アドレイションが組んだ腕を解いて右手を出すと、耳障りな音が発する

すると、ロックマンの体のあちこちの色が反転しずれる  
それと同時にロックマンから火花が散る

「ぐああああ！」

LP2800 1600

攻撃の余波が俺を襲う

そんな中、鋼先輩は冷静に状況分析を行う

「なるほど破壊耐性が・・・ターンエンド」

「俺のターン！」

（またモンスターは引けない！だけど・・・）

「魔法カード『死者蘇生』発動！墓地より蘇れ！」  
「レベル4『エレメントH ヒートヴァレス』！」

胸にHを刻んだモンスターが蘇る

「チューナー・・・シンクロか」

「レベル4『エレメントR ロックマン』にレベル4『エレメントH ヒートヴァレス』をチューニング！不死鳥の羽を持つ戦士よ。その剣で我を勝利へ導け！ シンクロ召喚！燃えろ！」  
「エレメントEX フェニックス・ナイト！」

炎の羽を大きく広げ持っている剣を地面に突き刺す

ATK 2800  
DEF 2300

「更に装備魔法！『皇剣 カイザー・ブレイド』をフェニックス・ナイトに装備！」

金色の剣がフェニックス・ナイトに装備される

「カイザー・ブレイドを装備したモンスターが戦闘を行うとき、戦闘する相手モンスターの攻撃力は装備モンスターのレベル×100ポイントダウンする」

フェニックス・ナイトの持っている金色の剣が輝く

『オオオオ』

ATK 2800 2000

（これでアドレイションを破壊できれば、合計2200のダメージ！『蜃気楼』の効果でライフは700回復するけどそれでも鋼先輩のライフは1000！）

フェニックス・ナイトが金色の剣を降り下ろす

しかし、アドレイションの前に見えない壁が現れ、カイザー・ブレイドを弾く

「なにっ!?!」

突然のことに驚く俺

「残念だったな。墓地の『V・HEROガードレイ』の効果を発動させてもらった」

「コストで墓地に送ったモンスター・・・」

「ガードレイはこのガードとフィールドの魔法・罨ゾーンにある『V・HERO』を一枚ゲームから除外して相手モンスターの攻撃を無効にし、デッキからカードを一枚ドロウする」

フェニックス・ナイトが俺のフィールドに戻ってくる

「お前はよく頑張った。だが、俺は手加減する気はない。これにこりたら未希に近づくな」

「ふざけるな」

「・・・」

「なんで未希に近づくなとは訊かない。訊かなくても理由はわかる。だけど、なんでそんなに未希を他人から遠ざける？」

「・・・」

そう俺は前にも未希の姿を見たことがある

未希は明るいがその周りには人はいない

あれはいじめというより誰かが未希に近づけさせていないように見えた

未希を見る目は仲良くしたいけど、近づけばどうなるかわからない

「俺はお前に訊いてるんだよ！霧島鋼！」

「・・・」

鋼はおもむろにヘッドフォンを外す

「炎城、お前はサイコデュエリストを知っているか？」

「？」

「サイコデュエリストとは特殊な能力を持っている決闘者を指す」

「伝説のチーム5D'sの十六夜アキがそれらしいな」

「そうだ。そして、サイコデュエリストがみなソリッドビジョンのモンスターを実体化出来るわけではない。俺のようにな」

「お前のように？」

「そう、俺には他人の心の声を聞く力がある」

「!？」

他人の心の声が聞こえる？そうしたら・・・

「そう、相手の手の内が分かってしまう。だから、俺はヘッドホンを掛け他人の声を遮断した」

「それが未希とどう繋がる!?!」

「お前の本心が聞ける」

「!?!」

「お前は未希を好きではない。それどころか別の人間がお前の心にはいる。そんなに恋しいか? 風音日和が」

「お前に日和の何が分かる!?!」

「分からんよ。聞こえるだけで何もな」

「なら、なんでお前の妹の声を聞いてやらない」

「・・・」

「あいつが必死に悩んでいることになんて耳を傾けない?」

「だまれ」

「嫌われるのが嫌なのか?」

「だまれ!」

「未希は今日泣いていたぞ」

「!」

「その理由は分かるんだろ。兄妹だから」

「お前に答えることはもうない」

嫌な思い出を塞ぎ止めるように会話を切る

「分かったぜ・・・なら、このデュエルに勝って吐かせてやる！リ  
バースカードオープン『切り札！』<sup>ジョーカー</sup>！この効果によりフェニックス・  
ナイトをリリース！デッキ、手札、墓地より『エレメント』 ジョ  
ーカージャスティス』を特殊召喚！」

漆黒色のマントを纏ったモンスターが現れる

ATK 2500  
DEF 2000

「さらに！『皇剣 カイザーブレイド』の効果！装備カードが効  
果によってリリースされた時、このカードを自分フィールドのモン  
スターに装備する！」

ジャスティスの手に金色の剣が装備される

「バトル！ジョーカージャスティスでアドレイションを攻撃！カイ  
ザーブレイク！」

金色の剣でアドレイションに挑むが突然アドレイションの体を黒い  
霧が包みジョーカーの攻撃を弾いた

「何っ！？」

「墓地の『V・HEROダークプリンセス』の効果、墓地のこの力

ードとフィールドの魔法・罨ゾーンにある『V・HERO』をそれぞれ一枚除外することで自分のモンスターが戦闘で破壊されるのを防ぐことができる」

LP2500 2100

「な・・・」

負けた？

「魔法・罨ゾーンに『V・HERO』が存在しないため『塵気楼』を破壊する。そして、俺のターン」

ウィッチレイドが煙のように現れる

「アドレイションの効果。自分フィールドの『HERO』を一体選択、相手モンスターの攻撃力を選択した自分のモンスターの攻撃力分下げる。     ダウンナイトメア」

黒い火柱のようなものがジョーカーを包む

『オオオオオ・・・』

ATK 2500 0

「二体で攻撃」

遊介の伏せたカードはブラフ  
完璧に遊介の負けだ

「くそ・・・」

LP1600 0



膝をつき眩く

鋼先輩はデュエルディスクを待機状態に戻しその場をあとにした

くデュエルアカデミア

男子寮く

部屋でヘッドホンを付けた鋼は夜空をみながら炎城遊介の言ったことを思い出していた

（未希が泣いていたか・・・まさか、未希にとって炎城遊介はそれほどどの相手なのか？）

妹の未希が泣くことは1つしかない

そして、俺はその妹の涙を止めるため復讐を決意した悪魔だ

### 第13話 怒る兄（後書き）

今回の最強カード

V・HEROアドレクション

星8 / 闇属性 / 戦士族 / 攻2800 / 守2100

「HERO」と名のついたモンスター×2

1ターンに1度、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体と、

このカード以外の自分フィールド上に表側表示で存在する

「HERO」と名のついたモンスター1体を選択して発動する。

選択した相手モンスターの攻撃力・守備力は

エンドフェイズ時まで、選択した自分のモンスターの攻撃力分ダウンする。

これから投稿スピードは今まで以上に下がってしまいます。すいません・・・

**第14話 宇宙不良高校生！！（前書き）**

10月、11月を飛ばして12月の初投稿・・・いろいろすいません  
そして、今回も話が強引です

## 第14話 宇宙不良高校生！！

〈ネオドミノシティ

ダイダロスブリッジ〉

一般車道のそこは早朝のためか一台も車が走っていないかった  
そんな車道に一台の自転車が通る  
学ランを着て髪型をソフトリーゼントにした少年は目指す

「いくぜ・・・！デュエルアカデミア！」

〈デュエルアカデミア〉

「おはよ。迷些、ネネ」

一話ぶりの登場だけど、なぜか久しぶりな気がする

「「おはよ。輪子」」

いつもながら二人の息はピッタリだね。うん

利樹もいつも座って本を読んでいる

私はその後ろを通って席に座る

そして、横を見ると目線がどこにいつているかわからない幼馴染み  
炎城遊介がいた

負けた。俺の全力のデュエルを子供をあやすような感じで俺を倒した鋼先輩。学年が一年違うだけでこれ程まで次元が違うのかと思

知らされて嫌になる

「ゆ〜う〜す〜け!」

バシン!と背中を叩かれた

「ん? 輪子か。おはよう」

「!?! ゆ、遊介? なんでも言い返したりしないの!?!」

予想外の行動を起こした珍動物を見るような目をやめる

「考え事をしてるから少し黙っとけ」

輪子を黙らせたあと再び考え更ける

そんな様子を見て輪子が利樹たちに訊いた

「どうしたの遊介のあの様子。異常じゃない?」

うんうんと迷些とネネが頷く

すると、チャイムが鳴り全員席についた

「おはようございます。では、朝のSTを始めます」

そして、時間は過ぎ昼放課の食堂にて

「・・・」

今日の昼飯は日替りランチを頼み食べているはずなのだけど箸は「  
飯粒ではなく空気を掴むばかりだった

「遊介って朝からこんな感じだね」

「そういえば金曜日、遊介くんには昼放課中ずっとくっついてた霧島さんもいないね」

「日曜に何かあったのかな？」

そんな三人の会話にも反応を示さず時間は放課後に移る

くデュエルアカデミア

デュエルホールく

俺は輪子、迷些、ネネの三人に連れられ牙城元先生とデュエルしたホールにやって来ていた

「はい。デュエルディスク持って！」

「デッキをホルダーにセットして！」

「舞台上上がって！」

三人が急かしまくる

「今、俺はデュエルする気にないって……」

勢いで舞台上に上らされてため息混じりに呟いた。すると、舞台上には久々の登場のシャルル・リサーナ先輩が誰かとデュエルしていた。今まで気づかなかったがシャルル先輩に余裕の笑みはなく焦っているように見えていた

「いくぜ！俺のターン！バトル！モンスターでダイレクトアタック！宇宙ドリルキック！！」

何か相手のフィールドから飛び上がり左足のドリルがシャルル先輩を襲う

「き、きゃああああ！！！！」  
LP7000

シャルル先輩に相手モンスターの攻撃が決まりシャルル先輩のライフが0になる

「くっ、まさかまた下級生に負けるなんて・・・！！」

シャルル先輩が膝をついて呟いた  
すると、相手が近づいてきて一言

「楽しいデュエルだったぜ！あと、これから俺たちは友達だ！よろしくー！」

相手の格好は学ランにリーゼント（漫画とかでよくあるものではなく仮面ライダーフーズの主人公に近い髪型。わからない人はググってください）

「お！次の相手か？俺は1年の神無月慧だ！よろしく！」  
かなづきさとし

強く握手をしたあと向こう側に行ってディスクを構える  
そんなやり取りを近くから眺めていた三人はやっと納得した

「そついえば学園長が言ってたね」

「うん。デュエルホールが使用許可の申請をもう受けたって」

「いついつことが」

「よし。決闘だ！」  
デュエル

Satoshi LP4000

「なんか強引なデュエル展開だな・・・」

Yusuke LP4000

慧とかいう奴のターンからだ

「俺のターン！ドロー！」

(いくぜ！宇宙デッキの力！)

「手札から『スペースマンボウ』を墓地に送って魔法カード『コストダウン』を発動！俺の手札のモンスターのレベルを2下げる！そして、レベル5から3になった『サテライトキャノン』を召喚！」

慧がディスクにカードをセットすると慧の後ろにある巨大なモニターに衛星が出現した

ATK 0

DEF 0

「さらに、カードを二枚セットしてターンエンド！」



「俺のターン！ドロー！」

「俺は『エレメントH ヒートヴァレス』を召喚！」

胸にHを刻んだモンスターが現れる

ATK 1700

DEF 1000

「『サテライトキャノン』はレベル7以上ないと戦闘破壊されないが戦闘ダメージは発生する！というわけでヴァレスで『サテライトキャノン』に攻撃！」

ヴァレスは一度構えたあと片腕に炎を貯める

そして、それを一気に解き放って打つ

「させるか！リバーズカードオープン！永続罫『スピリッドバリア』！」

ヴァレスが放った炎はサテライトキャノンに激突したが完全に破壊することができなかつたが、その時に発生した破片が慧に降り注ぐが透明なバリアがそれを防いだ

「なっ!?!」

「『スピリッドバリア』の効果は自分フィールド上にモンスターが存在し続ける限り戦闘ダメージを0にするぜ」

「ならカードを一枚伏せてターンエンド」

「俺のターン！ドロー！この瞬間、『サテライトキャノン』にエネルギーが充填される！」

ATK 0 1000

「さらに、フィールド魔法！『ラピッドステーション』！」

フィールドが月面に変わり、慧の背後に何かの施設が存在していた

「『ラピッドステーション』の効果！ターンに一度、デッキからスベモヌユール『SM』と名のつくカードを手札に加える！この効果でスベモヌイダ『SMRDリルファイター』を手札に加えて召喚！」

両手足にドリルを装備した全身が黄色のメカが現れる

ATK 1600

DEF 800

「さらに、魔法カード『スベモヌウエダシSMWロケットブースター』をドリルファイターを対象に発動！」

ドリルファイターの背中にオレンジ色のロケットが2つ装備される

「ロケットブースターの効果でドリルファイターの攻撃力を400ポイントアップする！」

ATK 1600 2000

「バトル！ドリルファイターでヴァレスを攻撃！宇宙ドリルパーン

チ！」

ロケットブースターの推進力を得てドリルファイターがヴァレスに突っ込む

「させるか！リバーズカードオープン！『エレメントエナジー』！手札の『エレメントW ウォータールミネ』を墓地に送ってヴァレスの攻撃力をルミネのレベル×100ポイントアップさせる！」

「なに！？」

突っ込んできたドリルファイターにヴァレスの強力なパンチがめり込み爆発する

「くそお！」

例のごとく慧はスピリットバリアの効果により戦闘ダメージはない

「俺はこれでターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー」

遊介のドローカードはサイクロンコマンダー

（これなら『サテライトキャノン』を手札に戻せて『スピリットバリア』効果圏外になる・・・）

そう考えてサイクロンコマンダーを取ろうとした瞬間、慧が話しかけてきた

「なあ、お前デュエル楽しんでるか？」

突然訊かれたから一瞬口ごもるが改めて思った

(あいつの言う通り今の俺はデュエルを楽しんでいるのか?)

心なしか手札のカードもそれを俺に問いかけてる気がした

「なんか。遊介が固まってるね」

ネネが遊介を見てそう言った

「そうだね。朝から様子がおかしかったから元気づけようとしてデュエルに誘ったんだけど・・・」

迷些もそんなことを言う

「本当にどうしたんだろう・・・」

私たち三人がどんよりムードに包まれていると

「遊介に無駄な心配はいらないと思うよ」

私たちがそっちの方を向くと利樹がいた

「え？それってどうゆうこと？」

私は利樹に利くとすんなり答えてくれた

「ああいうことが前にも一度起こったことがあったんだ」

「「「え?」「」」

幼馴染みの輪子すらキョトンとした

そう利樹と日和だけが知る遊介の出来事が昔に一度起きていたのだ

「だけど、遊介は自分で答えを見つけて自分で立ち直った。だから、心配する必要はないんだ」

(鋼先輩のことばかり気にして俺のデュエルを見失ってた。そうだ！たとえどんな強い相手にいなされようが俺はデュエルを全力で楽しむ！)

「いくぜ！慧！俺の全力のデュエルを見せてやる！」

「へ！そうこなくちゃな！」

「俺は『エレメントR ロックマン』を召喚！そして、レベル4のロックマンにレベル4のチューナーモンスター、ヒートヴァレスをチューニング！ 気高き二つの心今交わりて真の業火の剣士を呼び覚ます！不死の翼に見出だせ！シンクロ召喚！これが俺の全力だ！『エレメントEX フェニックスナイト』!!」

炎の羽を纏った騎士がフィールドに舞い降りる

DEF 2300

「さらに、手札から魔法カード『サイクロン』を発動！破壊する対象は勿論、『スピリットバリア』！」

遊介のフィールドから竜巻が起こり、慧の永続罫『スピリットバリア』を破壊する

「いけ！フェニックスナイト！」

月面の土を蹴りあげ『サテライトキャノン』がいる地球軌道に向かう

「ブレイブスラッシュュー！」

フェニックスナイトが不死鳥のように燃え上がりサテライトキャノンを真つ二つに切り裂いた

「ぐ！『サテライトキャノン』が！」

LP 4000 2200

「さらに、フェニックスナイトの効果！破壊したモンスターの攻撃力の半分のダメージを相手ライフに与える！  
イクリプトフレイヤ！」

フェニックスナイトの背中の中の炎が鞭のようにしなり慧の体を打ち付ける

「あぢぢぢぢ」

LP 2200 1700

「まだまだ！リバーズ罨オープン！『ボタンタッチ！』」

「なんにい！？」

「き、鬼畜だね・・・」

「ま、まあ、スイッチが入った遊介は手加減せずにかかるからな」

「このカードはフィールド上のモンスターを一体リリースすることでリリースしたモンスターのレベル・攻撃力・守備力以下のモンスターを攻撃力、守備力をリリースしたモンスターのレベル×100ポイント下げて特殊召喚する！」

「俺のライフは残り1700・・・」

「フェニックスナイトのレベルは8だから・・・」

「攻撃力が2500のモンスター・・・」

「今の遊介になら可能だな」

「手札から『エレメントJ ジョーカージャスティス』を攻撃力・守備力を800ポイント下げて特殊召喚！」

ジョーカーが月面を突き破って現れる

|     |      |      |
|-----|------|------|
| ATK | 2500 | 1700 |
| DEF | 2100 | 1300 |

「とどめだ！ジョーカーでプレイヤーにダイレクトアタック　ジ  
ョーカーエクストリーム！！」

月面でもはつきり輝く闇を纏い慧に一撃を与えた

「ぐううう・・・」

LP 17000

くデュエルアカデミア  
デュエルホールく

「は、鋼先輩とデュエルしたあ！！？」

ネネが声をあらげて叫んだ  
迷些は震えながら言う

「あの、ジュニア大会を最年少にして六連覇した通称、無敗の英雄  
と・・・」

「最後のジュニア大会を期に姿をくらませたって聞いていたけどこ  
のアカデミアに入学していたなんてな・・・」

「でもなんで遊介がそんな有名人とデュエルできたの？」

輪子がそう訊くとみんなそういえばそうだという顔をする

「まあ・・・俺にもよくわからん。だけど、鋼先輩の妹柄みだと思



「う

くデュエルアカデミア

学園長室く

「学園長、言われた通り炎城遊介とデュエルして立ち直らせてぜ」

今学園長室には神無月慧がいた

「ごくろうさま。じゃああとは霧島兄妹の問題だけだね・・・ちよ  
うどあれの時期だし」

デュエルアカデミアのイベントの一つ学年総当たりのデュエル大会、  
デュエルフロンティアの始まる時期に遊介たちは差し掛かっていた

第14話 宇宙不良高校生！！（後書き）

次回からデュエルフロンティア編だ！

鋼先輩の幼馴染みのデュエルもあります！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9626q/>

---

遊戯王LOST

2011年12月4日23時55分発行